

祖父母と発達障害児及び発達につまずきのある児 との交流が双方に与える影響

2017

兵庫教育大学大学院
連合学校教育学研究科
学校教育実践学専攻
(鳴門教育大学)

二重 佐知子

目次

| | | |
|-----|---|----|
| 第1章 | 序論 | 1 |
| 第1節 | 発達障害児を取り巻く現状 | 1 |
| 第2節 | 障害児の祖父母に関する文献研究 | 9 |
| 第3節 | 本研究の目的 | 16 |
| 第4節 | 研究の構成 | 17 |
| 第5節 | 倫理的配慮 | 18 |
| 第2章 | 研究1：祖父母との交流が発達障害児及び発達につまずきのある児に与える影響 | 24 |
| | ー保育士へのインタビュー調査及び質問紙作成とその調査ー | |
| 第1節 | 研究の背景と目的 | 24 |
| 第2節 | 保育士へのインタビュー調査 | 26 |
| 第3節 | 祖父母との交流が発達障害児及び発達につまずきのある児に与える影響に関する質問紙の作成と調査 | 38 |
| 第3章 | 研究2：発達障害児及び発達につまずきのある児の特徴と祖父母との関わりによる関連 | 59 |
| | ーつまずきチェックシートを用いてー | |
| 第1節 | 研究の背景と目的 | 59 |
| 第2節 | 予備調査 | 61 |
| 第3節 | 本調査 | 70 |
| 第4章 | 研究3：祖父母は発達障害児及び発達につまずきのある孫にどのように関わっているのか | 91 |
| | ー当事者へのインタビュー調査ー | |
| 第1節 | 研究の背景と目的 | 91 |
| 第2節 | 当事者へのインタビュー調査 | 92 |

| | | |
|-----|----------------------|-----|
| 第5章 | 研究結果の概要と総合的考察及び今後の課題 | 107 |
| 第1節 | 研究結果の概要 | 107 |
| 第2節 | 総合的考察 | 110 |
| 第3節 | 今後の課題 | 112 |

謝辞

資料

資料1 つまづきチェックシート（予備調査用）

資料2 つまづきチェックシート（本調査用）

資料3 「祖父母との交流が孫（発達障害児または疑いを含む）に与える影響に関する質問紙」

（祖父母と交流が有る発達障害児《疑い含む》の場合）

資料4 「祖父母との交流が孫（発達障害児または疑いを含む）に与える影響に関する質問紙」

（祖父母と交流が無い発達障害児《疑い含む》の場合）

第1章 序論

第1節 発達障害児を取り巻く現状

1. 発達障害児について

わが国の障害者施策の総合的推進は、1970年に制定された心身障害者対策基本法の中で示され、障害者の自立及び社会参加の支援等のための施策を総合的かつ計画的に推進することを目的とされた。同法において障害者の定義は、「身体障害、精神薄弱又は精神障害（以下「障害」と総称する。）があるため、長期にわたり日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける者をいう。」であった（内閣府，2013）。しかし、自閉症などの発達障害は、知的障害をあわせ持たない限り支援の対象とされず、本人や保護者らは、「制度の谷間」と形容され、必要な支援を得ることが難しい状況におかれていた。そのような中、発達障害への関心が高まるとともに、支援の必要性についても認識され、2005年4月より発達障害者支援法が施行された（中山，2006）。発達障害の定義は、「自閉症，アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害，学習障害，注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」とされている（厚生労働省，2005）。

発達障害者支援法の制定には、学校教育現場での発達障害児の存在が、大きな影響を与えた（滝村，2006）。学校教育現場では小・中学校等に在籍する注意欠陥／多動性障害（ADHD）児、高機能自閉症児など特別な教育的支援を必要とする児童生徒への対応が求められるようになり、2002年2月に文部科学省は、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の実態を明らかにするため全国実態調査を実施した。その結果、知的には遅れはないものの、学習面や行動面で著しい困難を示すと担任教師が回答した児童生徒は、6.3%とされたのである（文部科学省，2003a）。この結果を受け、これまで障害の種類や程度に応じて盲・聾・養護学校などで分離別学の形で教育を行っていた「特殊教育」から「特別支援教育」へ方向転換し、従来の特殊教育の対象の障害だけでなく、学習障害、注意欠陥／多動性障害（ADHD）児、高機能自閉症を含めた障害のある児童生徒へ適切な教育や指導を通じて必要な支援を行うこととなった（文部科学

省，2003b)。

2. 発達障害の早期発見と支援について

発達障害者支援法では、国及び地方公共団体の責務として、発達障害の早期発見，早期支援を行うことが重要であるとされている（厚生労働省，2005）。しかしながら、高機能広汎性発達障害児、学習障害などの軽度の発達障害児は、幼児期には診断がついていない場合が少ないとは言えず、学齢期に問題が顕在化し、心身症、不登校、不安障害、気分障害などさまざまな二次障害や不適応状態になることもまれではない（郷間ら，2008）。幼児期からの早期発見を図るため、発達障害者支援法では、「市町村は母子保健法に規定する健康診査を行うに当たり、発達障害の早期発見に十分留意しなければならない」とされている。母子保健法に規定する健康診査とは、乳幼児健康診査であり、同法で定められている対象月齢は1歳6か月、3歳である。日本臨床心理士会（2014）は、2012年に全国の1,917市町村に、乳幼児健康診査について調査を依頼し、1,006の市町村より回答を得た。その結果、乳幼児健康診査で「要観察」、「要精密」の判定のうち、発達・行動に問題があった割合は、1歳6か月児健康診査では11%、3歳児健康診査では10%であった。発達・行動に問題があったとされた主な判定理由は、1歳6か月児、3歳児ともに、「言語発達」、「多動などの行動」、「精神発達」、「社会性」、「癖・振る舞い」、「癇癪・性格」、「生活習慣」、「愛着関係」であったことを報告した。また、95%の市町村が、「要観察」、「要精密」の判定を受けた後のフォロー体制として、他機関との連携を行っていた。その約8割の市町村が保育所と連携しており、連携機関として最も多く選ばれたのが保育所であり、次いで医療機関、公的療育機関であったことを報告した。総務省（2017）は、2017年に「発達障害者支援に関する行政評価・監視結果報告書」を示し、その中で乳幼児健康診査において発達が疑われた児童に対する市町村の対応について、①保健師、臨床心理士等の心理職の訪問又は相談を実施しているものが99.1%、②ことばの教室等の言語指導に係る教室や、自立支援のための指導等を行う療育教室等を開催しているものが78.3%、③医療機関・療育機関の紹介を行っているものが97.8%、④児童発達支援センター（地域の障害児支援の専門通所施設であり、地域の障害児やその家族への相談、障害児を預かる施設への援助・助言を行う）等を紹介しているものが

70.0%であったことを報告し、乳幼児健康診査でのフォローがなされていた。

厚生労働省（2015a）によると、2011 年において在宅で生活している 18 歳未満の障害児数は約 21.5 万人（推計値）であり、18 歳未満人口（約 2034 万人）の 1.1%であった。障害児支援サービスの近年の動向については、2012 年に児童福祉法が改正され、障害児通所系サービス及び障害児入所系サービスは、いずれも児童福祉法に一本化された。現行の障害児通所系サービスは、児童発達支援、放課後等ディサービス、保育所等訪問支援、医療型児童発達支援の 4 種類である。児童発達支援は、「日常生活における基本的な動作の指導、知識技能の付与、集団生活への適応訓練などの支援を行う」ものであり、2012 年の利用児童数は 47,074 人であったが、2014 年では 75,011 人に増加した。放課後等ディサービスは、「授業の終了後又は休校日に、児童発達支援センター等の施設に通わせ、生活能力向上のための必要な訓練、社会との交流促進などの支援を行う」ものであり、2012 年の利用児童数は 53,590 人であったが、2014 年では 88,360 人に増加した。医療型児童発達支援は、「日常生活における基本的な動作の指導、知識技能の付与、集団生活への適応訓練などの支援及び治療を行う」ものであり、2012 年の利用児童数は 2,797 人であったが、2014 年では 2,451 人に減少した。保育所等訪問支援は、「保育所等を訪問し、障害児に対して、障害児以外の児童との集団生活への適応のための専門的な支援を行う」ものであり、2012 年の利用児童数は 412 人であったが、2014 年は 1,633 人に増加した（厚生労働省，2015a）。

障害児通所系サービスでは、児童発達支援と放課後等ディサービスの利用児童数の顕著な増加が示されている。発達障害児の利用状況に関して、2014 年に日本知的障害者福祉協会が全国の児童発達支援センター 277 か所に調査を依頼し、172 か所から回答を得た結果、利用契約児童の障害別状況では、発達障害（広汎性発達障害、注意欠陥・多動性障害、学習障害とする）が 22.1%であったことを報告した（公益財団法人日本知的障害者福祉会，2016）。また、峯川（2017）は、大阪市内の児童発達支援事業所及び放課後等ディサービス事業所 288 か所に調査を依頼し 192 か所から回答を得た結果、発達障害児を受け入れている事業所は 180 か所であり、登録児童数に対する発達障害児の割合は、未就学児で 80%、就学児で 70%を占めていたことを報告した。総務省（2017）は、自閉症、学習障害、注意欠陥／多動性障害（ADHD）児の児童生徒数において、2006 年

に比べ 2015 年は 6.1 倍に増加していることを示しており、このことが障害児通所系サービスの利用の増加に繋がっているのではないかと考える。医療型児童発達支援の利用が減少しているのは、適応訓練等は児童発達支援センター等の施設においても実施している現状があり、このことが利用減少に影響している可能性があると考え。保育所等訪問支援の増加は著しく、保育所における障害児支援の増加を示唆している可能性がある。

3. 発達障害児および障害児への保育所による保育サービスについて

2013 年の全国の保育所の数は 24,038 であり（内閣府，2014）、そのうち、障害児を受け入れている保育所の数は 15,087 と 6 割以上の保育所が障害児を受け入れていた（厚生労働省，2015b）。郷間ら（2008）は、医師による診断はないが保育の指導上困難を抱える「気になる子」は、診断を受けている障害児に比べ約 3.5 倍在籍していたことを報告した。さらに、平澤ら（2005）は、保育所に通所している子どもにおいて、診断のない子どもは診断のついている子どもの約 3 倍であったことを報告した。

保育所に関係する障害児支援サービスとして、保育所等訪問支援がある。利用にあたっては、保護者が市町村に申請をするもので、対象は、児童福祉法に定める「障害児」であり、保育所等の施設に通い、集団での生活や適応に専門的支援が必要としている（厚生労働省，2016）。児童福祉法に定める「障害児」とは、「身体に障害のある児童、知的障害のある児童、精神障害のある児童（発達障害者支援法（平成 16 年法律第 167 号）第 2 条第 2 項に規定する発達障害児を含む。）又は治療方法が確立していない疾病その他の特殊な疾病があつて障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律（平成 17 年法律第 123 号）第 4 条第 1 項の政令に定めるものによる障害の程度が同項の厚生労働大臣が定める程度である児童をいう。」である。なお、「障害児」の認定にあたっては医学的診断や障害者手帳の有無は問わないとされている（厚生労働省，2016）。児童指導員（障害児支援に関する知識及び相当の経験を有する者）、保育士、理学療法士、作業療法士又は心理担当職員等の集団生活への適応のための専門的な支援の技術を有する者が保育所で訪問支援を行う。支援内容は子どもに対して直接、発達支援を行うことと、保育士等のスタッフの関わり方や活動の組み立て方などを教示する。障害のある子どもの発達支援は、これまで施設又は事業所という特別な場所において通所又は入所と

いう形で提供されてきたが、発達上の課題が、家族や個別対応では問題が見えにくく、通所支援に至らないことが多い。しかし発達上の課題が保育所等の集団場面で気づかれることが多いため、保育所等訪問支援が障害児支援サービスとして位置づけられた（厚生労働省，2016）。このサービスの利用者は、2011年から2014年にかけて2倍以上にも増加しており、保育所における集団場面での直接支援が、子どもの早期発達支援としてニーズが高まっていることが示されている。

乳幼児健康診査後のフォロー機関として、多くの市町村が保育所と連携している（臨床心理士会，2014）。松山（2006）は、保育所における保育士の7割以上が、軽度発達障害児の保育経験があることを認識しており、このため、保育士の多くは、軽度発達障害児に接した体験を踏まえて、その不適応行動について理解していると述べており、このことが連携をする理由の1つと考えられる。さらに乳幼児健康診査では、発達障害の早期発見には限界があり、その理由として、乳幼児健康診査の環境と時間の制約のため、発達障害の特性である相互的な社会関係性とコミュニケーションの質的障害を見抜くことが困難であるとされている（小枝ら，2007）。しかし、前田ら（2010）は、保育士は日常生活の場で乳幼児を保育しながら観察しており、早期発見に大いに貢献できると述べている。

これらのことから、近年、保育所は、発達障害の早期発見・支援に関して、その重要性や必要性が増してきており、保育士は、発達障害児への認識や、経験、観察力などのスキルが高くなっていると考えられる。

4. 発達障害児の母親の育児ストレス・育児不安、および就労について

発達障害者支援法において「都道府県及び市町村は、発達障害者の支援に際しては、家族も重要な援助者であるという観点から、発達障害者の家族を支援していくことが重要である。特に、家族の障害受容、発達支援の方法などについては、相談及び助言など、十分配慮された支援を行うこと。また、家族に対する支援に際しては、父母のみならず兄弟姉妹、祖父母等の支援も重要であることに配慮すること。」とされており、家族支援の重要性を謳っている（厚生労働省，2005）。本稿では、発達障害児の支援を考える上で、最も重要な援助者としての母親について、その育児ストレス・育児不安、および就

労などについて、文献的に考察する。

わが国では少子化や核家族化の進展，地域社会との希薄化、働く女性の増加、等により家族を取り巻く環境は大きく変化している（宮寄，2009）。さらに障害児を養育する家族においては，児の障害の種類や重症度，必要とするケアによっても異なるが，心理的，身体的負担が大きいとされる（久野ら，2006）。特に母親の育児ストレスに関する研究は多い。

医学中央雑誌 web 版（ver. 5）を用いて，2016 年 9 月 5 日現在において，2011 年から 2016 年までの 5 年間に発表された国内の文献を，抄録があるものを選んで，「障害児」，「母親」，「育児ストレス」のキーワードで検索した。その結果，50 件の文献が該当した。その内，23 件が発達障害児に関するものであった。杉山（2007）は，発達障害の特徴として，大きく，「認知（周りの世界を知り，理解すること）」，「学習能力（文字を読む，書く，計算するといった能力）」，「言語能力（言葉の発語や理解）」，「社会性（他人の気持ちを読むこと，人との付き合い方や社会のルールの習得）」，「運動（歩く，走るといったからだ全体の運動）」，「手先の細やかな動き」，「注意や行動のコントロール」の 7 側面の発達に障害があると述べている。これらの障害は，集団生活でのトラブル、対人関係障害（年齢相応の友人関係を築けない）、障害に起因する様々な行動上の問題、等を呈し、養育上の困難を感じる事が多く、親はストレスフルな状態になることが考えられる。それに加えて、障害受容、将来への不安などの心理的負担が大きいことも考えられる。

永田ら（2013）は、発達に大きな遅れはないものの、落ち着きのなさややりとりの難しさがある自閉症スペクトラム障害が疑われる 2 歳児の母親 51 名と、同じ地域に住む同年代の子どもをもつ母親 48 名（統制群）を対象に、抑うつと育児ストレスについて調査した結果、自閉症スペクトラム障害が疑われる児の母親は、抑うつが強く、育児ストレスも高いことを明らかにした。夏堀（2001）は、自閉症の母親とダウン症の母親が、子どもの障害を受容するまでに体験する苦悩や葛藤の種類を調査した結果、「現実否認」、「苦悩・絶望感」、「育児不安」、「親としての劣等感」、「葛藤、混乱」、「育児に焦る」という思いがあることを明らかにした。さらに、発達障害児を養育する保護者は、日々の子育てを通じて、ストレスを感じ、劣等感や抑うつ度が高まる可能性が示唆されている。

しかし、山田（2010）は、療育機関に通う自閉症スペクトラム児を持つ母親の育児ストレスについて、自分の父母及び配偶者の父母の育児に関する協力が、母親の育児ストレスの軽減に有効であることを明らかにした。また、Margetts ら（2006）は、祖父母は親の主要な支援者と見なされるべきであると述べ、Barry ら（2008）は、発達障害児の母親の育児ストレスは、非難や拒絶されることなく、父方母方祖母から、自尊心を高めるサポートやポジティブな情緒的サポートにより軽減することを示した。

丸山（2013）は、障害児の母親の就労と祖父母による援助について、59 人の母親を対象として、祖父母による援助の実態をインタビュー調査した。その結果、障害児の母親の就労が、祖父母による援助に強く依存している実態を示した。さらに、障害児のある子どもの預かりや送迎などを行う祖父母が多く、そのような祖父母による援助がなければ、就労が大きく制約されるとしている。しかし、子どもが成長するにともなって、当然ながら祖父母も年齢を重ねるため、多くの場合に、祖父母が担える役割が縮小する。そのため、祖父母が若いときには、援助を受けて母親が就労できても、祖父母の状態の変化によって、母親の就労が極めて困難になることもインタビュー調査の中で示されていた。また、医療機関や療育機関に通う必要がある場合、子どもにとっては重要なことであるが、時間を要したり、送迎等の負担が発生し、保護者が就労している場合は、特に負担が大きくなる可能性があると考ええる。

5. 結語

発達障害者支援法が制定され、発達障害の早期発見と支援、特別支援教育は国及び地方公共団体の責務として位置づけられ、様々な取り組みが行われるようになってきた。早期発見では、市町村の乳幼児健康診査で、「要支援」、「要観察」の判定のうち、発達・行動に問題があった割合は、1 歳 6 か月児健康診査では 11%、3 歳児健康診査では 10% であり、それらに対しては、直接または他機関との連携、紹介などにより、フォローされていることが報告されていた（日本臨床心理士会、2014）。支援サービスとしては、近年、サービスの利用数の増加は顕著であり、それに占める発達障害児の割合は、2 割以上となっていた（公益社団法人福祉会日本知的障害者福祉協会、2016、峯川、2017）。乳幼児期の子育てに重要な位置を占める保育所では、全国の保育所の 6 割以上が障害児

を受け入れているという現状があった（厚生労働省，2015b）。近年、保育所は、発達障害の早期発見・支援に関して、その重要性や必要性を増してきており、保育士は、発達障害児への認識や、経験、観察力などのスキルが高くなっていることが考えられる。

発達障害児の支援を考える上で、最も重要な援助者としての母親に関しては、同年代の子どもを持つ母親より、抑うつや育児ストレスが高いこと、日々の子育てを通じて、ストレスを感じ、劣等感や抑うつ度が高まる可能性が示唆されていた（夏堀，2001）。しかし、保護者の父母からの育児に関する協力が、育児ストレスの軽減に有効な場合があり、さらに保護者の就労については、保護者の父母の協力に強く依存しているという報告があった（丸山，2013）。発達障害児への支援の必要性が高まっている中、次節では祖父母の子育て支援等について述べていく。

第2節 障害児の祖父母に関する文献研究

厚生労働省では2015年7月に、「障害児支援の在り方に関する検討会」が行われ、障害児の地域社会への参加・包容（地域社会において、すべての人が孤立したり排除されたりしないよう擁護し、社会の構成員として包み支え合うこと）、家族支援について話し合われ、「発達支援」が必要な子どもに対して、発達の段階に応じて一人ひとりの個性と能力に応じた支援を行うこと、丁寧かつ早い段階での保護者支援・家族支援を充実させるという考え方が共有された（厚生労働省，2014）。しかしながら、疾病、傷害、発達上の問題を有し、育児上特別な配慮を必要とする乳幼児の育児は、家族の協力によって営まれることが多く、特に両親の親すなわち乳幼児の祖父母のサポートが、育児及び発達支援において重要となっている（石井ら，2014）。山田（2010）は、自閉症スペクトラム児の母親は、定型発達児を育てている母親に比べて、祖父母を含む家族のソーシャルサポートを求めていると報告している。また丸山（2013）は、祖父母の援助が、障害児の母親の就労に大きく貢献していることを報告しているが、障害児の祖父母に注目した研究は、日本においては少ない。

そこで、CiNii（国立情報学研究所提供）にて、「障害児」、「祖父母」のキーワードで、国内の論考を中心として先行研究を検索・抽出した（2016年9月10日現在）。その結果、13の文献が該当し、入手できたのは10の文献であった。さらにハンドサーチにより5の文献を入手した。

上記研究を整理した結果、「障害をもつ孫への祖父母の思い」、「祖父母の障害理解」、「祖父母の障害受容」、「祖父母の育児協力」、「祖父母に対する支援」の5つが見いだされた。

以下、これらについて述べる。

1. 障害をもつ孫への祖父母の思いについて

石井ら（2014）は、育児上の特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の体験について、8名の祖父母（男性2名、女性6名）に対して、孫育児、印象的な出来事や日常生活、孫育児に伴う感情、孫や家族に対する思いや考えをインタビュー調査した。

その結果、孫の疾患や障害を知った時は強い衝撃を受け、もがき苦しむ段階から、希望と落胆の間を揺らぎながら、自分自身の存在価値を認識するとともに、長い時間をかけて構築してきた夫婦間や子や孫とのつながりを価値づけていた。また、息子夫婦または娘夫婦を支える立場に身をおき続け、やり場のない自身の感情を抱えたまま、気遣い、見守り、家族の情緒的きずなや家族機能の安定を獲得していることを明らかにしている。

鳥居ら（2007）は、ダウン症児と同居している祖母5名に半構造化面接を行い、ダウン症児の祖母が抱く思いの詳細を知り、障害児の家庭内における祖母の存在意味を明らかにした。その結果、祖母の想いは、ダウン症児の両親に寄り添う存在になり得ること、祖母の存在そのものが生み出す「ゆとり」、祖母の姿にあるダウン症児を特別視しない「あたりまえ」、さらに母親の可能性を信じて行う「見守り」には、家族が円滑に機能するような「触媒」作用があること、祖母の存在が、家庭内における「緩衝」地帯になっていることを明らかにしている。

2. 祖父母の障害理解について

徳田ら（2002）は、障害児を持つ母親と祖父母の関係における思いを調査した。北海道内及び広島県内の障害児の親の会に所属する母親並びに茨城県内の児童相談所において、子どもが指導を受けている母親を対象に、祖父母がどのように障害のある子どもをとらえているかを尋ねた。その結果、「そのうち障害が治ると思っている」、「かわいそうだと思っている」という結果が得られた。また、「自閉症とはどういうものかを知らず、見た目は障害がわからないため、時々『無視しているだけ』と思う時があるようだ」、「自閉症であることは知っているが、ことばが遅れているだけだと思っている」などと、子どもの障害の理解が十分ではない祖父母についてのデータが得られていた。さらに、母親が、祖父母から子どもの障害に関して言われたこととして、「母親の育児の仕方、しつけの仕方が悪い」、「子どもの障害を血筋のせいとされる」などと、母親を苦しめるケースが少なからずあることが確認された。母親に対して、祖父母の障害がある子どもの扱いで、困ることを尋ねた結果、「人の集まるところに出させない」が最も多く、「食事やおやつの与え方が悪い」、「他のきょうだいとの扱いが違う」が挙げられた。このように祖父母の障害に関する認識不足から、祖父母が障害のある子どもに不適切な関わりをし、

母親を心理的に追い込んでしまっているケースが少なくないことを確認していた（徳田ら，2002；水野ら，2002）。つまり、祖父母が子どもの障害を理解することが、孫、保護者にとって重要であると考ええる。

3. 祖父母の障害受容について

野尻（2012）は、障害児を孫にもつ祖父母が、孫の障害をどのように捉えているか、またどのような要因が、祖父母の障害受容を促すかを検討するため、420 家族の祖父母に質問紙調査を依頼し、119 名の祖母、56 名の祖父の回答を得た。その結果、孫の障害の捉え方については、「はっきりした原因はなく仕方がなかった」と答えた祖父母が 9 割以上と最も多く、他には、「公害問題など社会環境が原因」、「親からの遺伝」、「親の育て方やしつけが原因」等と捉えていた。祖父母の障害受容を促進する要因として、孫と同居しているか否かというよりも、障害名を聞いていること、障害はなくなることはないということを認識すること、障害をもったことは仕方がなかったと理解することが、関連している可能性があることが示唆された。また、障害の種別と祖父母の受容の程度には、直接関連がないことを明らかにしている。

さらに野尻（2013，2014）は、障害児をもつ祖父母の障害受容の程度や、祖父母の存在や障害に対する理解を、両親がどのように意識しているか、その意識の違いが、両親の受容とどのように関連しているかを検討するため、420 家族の祖父母及び両親に質問紙調査を依頼し、119 名の祖母、56 名の祖父、209 名の母親、156 名の父親から回答を得た。その結果、障害児をもつ祖父母の障害受容の程度について、「障害はいずれなくなると思うか」との質問に、「なくなることない」と答えた祖父母は 8 割以上であった。祖父母の存在や障害に対する理解が両親に及ぼす影響については、祖父母と同居しているか否か、及び祖父母との交流の頻度の違いは、両親の受容とは関連せず、祖父母が「障害を聞いている」ことが、母親の「障害があることを受け止め、生活や育児を前向きに感じる」気持ちの促進にとって重要であることが示唆された。また、孫が成長しても障害がなくなることはなく、障害の原因を「仕方がなかった」と祖母が認識することが、両親の障害受容の促進に関連していたことを明らかにした。

4. 祖父母の育児協力について

鳥居ら（2007）は、ダウン症児と同居している祖母の子育てについて調査しており、祖母は孫が自ら行動するように接しており、母親に対しては、頑張る姿を認め、親としての成長を願い、母親を気遣い、背中を押すように接していた。さらに、孫の相手、育児の手伝いを祖母がすることで、母親は時間を作ることができ、母親は、祖母との関わりの中で、「話せること」や「外に踏み出す勇氣」により助けられていると感じていた。そして、祖母は母親に対して「備え」、「見守り」、「取り持つ」サポートをしていることを明らかにした。

今吉ら（2015）は、障害のある子どもをもつ母親の育児不安に対する祖父母サポート機能について、特別支援学級に在籍する児童（小学部5・6年生）の母親と福祉施設利用者の母親の24名に調査をした結果、母親は配偶者よりも、祖父母から情緒的サポートや情理的サポートを多く受けていると評価していた。しかし、祖父母による子育てサポートについての悩みを、8名の母親より得た自由記述による回答では、祖父母からの育児上の“手助け”や祖父母による障害の“理解”に対し、約半数の母親が悩んでおり、祖父母の過干渉や母親との育児方針との違いがみられた。また、祖父母の続柄による母親の悩みの違いでは、母方祖母は、育児の手助け源となっており、育児に欠かせない存在となっていることが示唆されている。一方、父方祖母は、母親にとって子どもの障害の理解を求めたい存在であることがうかがえた。また父方祖父は母親の育児について関わりが少ない可能性があった。

一方、障害のある孫の養育の負担が大きい祖父母について、今野（2003, 2009）は、2件の調査結果を示した。1つは全国の難聴幼児通園施設17園に質問紙を送付し、11園より回答を得たもので、いずれの園も、親側の事情によって、子どもの養育にかかわる負担が非常に大きくなっていると思われる祖父母がいると答えていた。その事情として、「離婚により子どもを父親が引き取るが父親の関わりが少ない」、「離婚により母親が引き取るが母親の関わりが少ない」、「共働きをしている」を半数前後の園があげていた。

「両親はいるが子育てに対する関わりがどちらも少ない」ために祖父母の負担が大きくなっているケースもあった。また「母親の病気や母親の重複障害がある」、「母親の妊娠・出産期間の付き添い」等で祖父母の負担が大きくなっていることを示した。祖父母の関

わりについては、「施設での療育・指導への付き添い」、「通園施設への送り迎え」、「親が仕事から帰るまでの子守りをしている」、「子育て全般を親代わりしている」等があった（今野，2003）。もう1つは、全国すべての発達障害者支援センター73か所のセンター長宛に質問紙を送付し、50か所より回答を得たものである。「センターに相談してくる祖父母の中には、親の離婚や病気など様々な事情によって、障害のある孫の養育に関わる負担が大きくなっている祖父母がいるか」との質問に対して、9割以上が「いる」と回答していた。そして、養育に関わる負担が非常に大きな祖父母の印象についての質問では、「精神的に大変である」、「体力的に大変である」、「健康面で大変である」、「経済的に大変である」、「自身の生活というものがない」、「知り合いや友人などから孤立しがちである」などの印象があった（今野，2009）。

このような祖父母の子育ての支援の現状がある中、祖父母に対する親からのネガティブな相談を示した研究があり、内容として、「子どもの障害を受け入れられない祖父母への対応」、「子どもに対する祖父母への接し方への不満と対応」、「障害の原因について自分（親）を責める祖父母への対応」等の相談内容があった（今野，2009）。祖父母が孫の障害を理解した上で、祖父母の負担を考慮して子育てしていけることが重要となる。

5. 祖父母に対する支援について

今野（2003）は、通園施設における障害のある子どもの祖父母に対する支援について、全国の難聴幼児通園施設17園の施設長を含む職員に質問紙調査をし、11園より回答を得た。その結果、11園中9園が祖父母に対する具体的な支援の必要性を感じていた。また11園中8園が祖父母への具体的な支援を行っていた。支援の内容として、「祖父母からの相談に応じて個別に」という園が多く、続いて、「祖父母参観日を設けている」であった。また、「家族参観や運動会などの行事への参加を祖父母にも案内する」、「家庭訪問、行事にこだわらずいつでも自由に来園を勧める」、「家族研修会への参加を呼びかける」等があった。

今野（2009）は、全国の発達障害者支援センターに、祖父母への支援について調査をした。その結果、祖父母からの相談を9割以上のセンターが受けており、相談件数は増加傾向であった。祖父母からの相談内容として、「孫について感じる異常について専門的

な意見を求めるもの」が最も多く、つぎに「孫のために、自分がどのようなことをしてやれるかについて」であり、また「孫に対する自分の接し方について」、「孫の将来について」であった。さらにセンターが「祖父母への支援力を高める必要があるか」との質問については、8割以上のセンターが肯定していた。

6. 結語

障害児の祖父母についての研究の現状を明らかにすることを目的とし、障害児の祖父母に関する研究の動向について、関連する研究を整理した結果、「障害をもつ孫への祖父母の思い」、「祖父母の障害理解」、「祖父母の障害受容」、「祖父母の子育て支援」、「祖父母に対する支援」の5つが見いだされた。

「障害をもつ孫への祖父母の思い」では、孫の疾患や障害を知った時は強い衝撃を受け、苦しみを経験していたが、息子夫婦、娘夫婦を支え、寄り添う立場となることが、家庭内における「緩衝」地帯になる。しかしその一方、孫の障害の理解が十分ではない祖父母は、障害について、親の育児の仕方を非難したり、遺伝などの血筋を理由にすることがあり、親を苦しめることにつながっており、「祖父母の障害理解」を促すことが、親の安寧につながっていた。そして、「祖父母の障害受容」を促す要因として、障害はなくなることはない等、孫の障害を受け入れ、障害は仕方がなかったことと理解することであった。つまり、祖父母への適切な知識の提供が重要となる。また、祖父母が育児の手伝いや孫の相手をするすることで、母親は時間を作ることができ、母親の就労に貢献できている。しかし、祖父母の障害の理解のなさに対して、悩んでいる母親が存在する現状があり、母親や孫を混乱させてしまうことが考えられる。そのため、障害の専門機関では祖父母に対する支援として、孫のために何ができるのか、孫への接し方等、孫との関わりについての相談等ができる場を作ることや、障害への理解を促す等の取り組みがなされており、祖父母の障害の理解は、今後さらに重要となると考える。

エリクソンは、祖父母生殖性を、「親としての生殖性に固有の責任は負わずに、孫たちを導き、愛し、世話し、役に立ってあげることができるという意味であり、世の中を維持し、永続するための中年期の責任から自由になって孫の世話をすることである」と定義し、老年期の発達課題である「自我の統合性」^(注1)は、若い世代と関わり祖父母生殖

性を発揮することによって促進されると述べている（Erik ら，1989）。障害をもつ孫の子育てをしていく中で、障害を理解し、自分自身の存在価値を認識でき、夫婦間や子や孫とのつながりを価値づけられている祖父母は、「自我の統合性」を促進していけるのではないかと考える。

用語の説明

統合性とは、一貫性と全体性の感覚で、全体を1つにまとめようとするものである。つまり、自我の統合性とは、自分自身と自分の生きてきたただ1つの人生を受け入れ、自分の人生は自分自身の責任であるという事実を受容することである。そして自分の生き方や価値観を大切に守り、自分を受容し、愛するとともに、自分とは違う生き方や態度をも尊重し、受け入れることである（服部，2010）。

第3節 本研究の目的

発達障害者支援法において、「都道府県及び市町村は、発達障害者の支援に際しては、家族も重要な援助者であるという観点から、発達障害者の家族を支援していくことが重要である。特に、家族の障害受容、発達支援の方法などについては、相談及び助言など、十分配慮された支援を行うこと。また、家族に対する支援に際しては、父母のみならず兄弟姉妹、祖父母等の支援も重要であることに配慮すること。」とされており、家族を重要な援助者にとらえ、その支援の重要性を謳っている（厚生労働省，2005）。

近年、地域や施設における高齢者と子どもとの交流プログラムが実施されており、日下（2008）は、世代間交流が高齢者にとっては生活満足につながり、子どもにとっては精神的な安らぎにつながるという研究結果を示した。さらに上村ら（2007）は、幼児と高齢者が日常的に交流を持つことができる複合福祉施設（保育所と老人介護施設が併設）において、幼児と高齢者の世代間交流の効果について検討しており、幼児において高齢者との日常的な交流は、他者への思いやり、コミュニケーションスキルの発達に寄与するということを明らかにした。また、村山（2009）は、小学生においても高齢者との交流は、共感性の発達が促進されるという研究結果が得られたことを報告した。つまり高齢者と子どもとの関わりは、相互にいい影響を与えあっていると考えられるが、いずれの研究も子どもの障害の有無に関する記載はなかった。先行研究より、幼児にとって高齢者と日常的に交流することは、他者への思いやりやコミュニケーションスキルの発達に寄与することが示唆されたとの結果が得られており、発達障害児においても社会性の障害、コミュニケーション障害が軽減されることが期待できるのではないかと考えた。

そこで、本研究の目的は、重要な援助者の一人であるという観点から、祖父母に着目し、実際に発達障害児及び発達につまずきのある児とどのような関わりをしているのか、また、そのことにより、児と祖父母は双方にどのような影響を受けているのかについて明らかにすることである。

第4節 研究の構成

本研究は5部構成である。第1章序論では、第1節においては、発達障害児及び障害児を取り巻く現状として、「1. 発達障害について」、「2. 発達障害の早期発見と支援について」、「3. 発達障害児および障害児と保育所について」、「4. 発達障害児の母親の育児ストレス・育児不安および就労」について述べた。第2節においては、障害児の祖父母に関する文献研究について、「1. 障害をもつ孫への祖父母の思いについて」、「2. 祖父母の障害理解について」、「3. 祖父母の障害受容について」、「4. 祖父母の育児協力について」、「5. 祖父母に対する支援について」述べた。第3節では「本研究の目的」、第4節では「研究の構成」、第5節では「倫理的配慮」とした。

第2章では、祖父母との交流が発達障害児及び発達につまずきのある児に与える影響を調査した。第2章第1節は、これらの影響について保育士へのインタビュー調査をし、得られた内容を分析した。第2章第2節では、保育士のインタビュー内容から「祖父母との交流が孫（発達障害児または疑いを含む）に与える影響に関する質問紙」を作成し、保育士に郵送調査をし、分析した。

第3章は、祖父母との関わりと「チェックシートⅢつまずきチェックシート[幼稚園用]」（以下、つまずきチェックシートとする）の関連を調査するため（徳島県教育委員会、2006）、第3章第1節では、つまずきチェックシートの聞き取り調査し、分析した。つまずきチェックシートは、学習障害、注意欠陥多動性障害、高機能自閉症等が疑われることにより、学びにくさやつまずきのある子どもをチェックするものである。第3章第2節は、小規模な調査で結果が得られた場合、広域的に郵送調査を実施し、分析した。

第4章は、祖父母の発達障害児及び発達につまずきのある児への子育てへの関与や思いを、当事者にインタビュー調査を実施し、分析した。

第5章は、研究結果の概要と総合的考察及び今後の課題とした。

第5節

倫理的配慮

本研究の調査対象者に対し、書面又は口頭により、研究の目的、方法、意義を示した。内容として研究への参加は強制ではなく自由であること、研究への参加は同意しない場合でも不利益を受けないこと及びいつでもこれを中断、撤回できること、研究協力者から得られた情報は本研究以外の目的で使用されることはなく、また得られた情報は研究終了後直ちに破棄、消去されること、研究者及び研究指導者以外の者が研究協力者から得られた情報を用いることはないこと、研究協力者のプライバシーが最大限に保護されること、研究目的や手段についていつでも説明を受ける権利があること、個人、施設が特定できないよう配慮した上で研究結果を発表することを示した。本研究は、著者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

引用文献

- Barry Trute, Catherine Worthington, Diane Hiebert-Murphy (2008) Grandmother Support for Parents of Children With Disabilities: Gender Differences in Parenting Stress: Families, System & Health, 26(2), 135-146
- Erik H. Erikson, Joan H. Erikson (著), 村瀬孝雄, 近藤邦夫 (訳) (1989) ライフサイクル, その完結, みすず書房, 79-86
- 郷間英世, 圓尾奈津美, 宮路知美, 池田友美, 郷間安美子 (2008) 幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究, 京都教育大学紀要, 113, 81-89.
- 服部祥子 (2010) 生涯人間発達論 人間への深い理解と愛情を育むために, 医学書院, 178
- 日下菜穂子 (2008) 超高齢時代における世代間交流の意義—関西学研都市高齢者の世代間交流に関する調査から—, 同志社女子大学学術研究年報, 59, 69 - 76
- 久野典子, 山口桂子, 森田チエ子 (2006) 在宅で重症心身障害児を養育する母親の育児負担感とそれに影響を与える要因, 日本看護研究学会雑誌, 29 (5), 59-69
- 平澤紀子, 藤原義博, 山根正夫 (2005) 保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究—障害群からみた該当児の実態保育者の対応および受けている支援から—, 発達障害研究, 26, 256-267
- 今野和夫 (2003) 通園施設における障害のある子どもの祖父母に対する支援, 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 25, 39-52
- 今野和夫 (2009) 発達障害者支援センターにおける祖父母支援—センターへの質問紙調査を通して—, 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 31, 61-74
- 今吉千尋, 稲谷ふみ枝 (2015) 障碍のある子どもをもつ母親の育児不安に対する祖父母サポート機能に関する研究, 久留米大学心理学研究, 14, 1-6
- 石井邦子, 荒木暁子, 小池幸子, 市原真穂, 水野芳子, 佐藤紀子, 林ひろみ, 北川良子, 小澤治美 (2014) 育児上特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の

- 体験, 千葉看護学会誌, 20 (1), 3-10
- 小枝達也, 下泉秀夫, 林隆, 前垣義弘, 山下裕史朗 (2007) 軽度発達障児に対する気づきと支援マニュアル 厚生労働省, <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/boshihoken07/> (アクセス日 2017 年 6 月 23 日)
- 公益財団法人日本知的障害者福祉協会 (2016) 平成 26 年度全国児童発達支援センター実態調査報告, <http://www.aigo.or.jp/choken/pdf/26jihatu1chosa.pdf> (アクセス日 2017 年 7 月 7 日)
- 厚生労働省 (2005) 発達障害者支援法について, <http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0412-1e.html> (アクセス日 2015 年 12 月 18 日)
- 厚生労働省 (2014) 今後の障害児支援の在り方について (報告書) ～「発達支援」が必要な子どもの支援はどうあるべきか～, http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisaku_toukatsukan-Sanjikan (アクセス日, 2016 年 9 月 5 日)
- 厚生労働省 (2015a) 障害児支援について, http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-126010000-Seikatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000096740.pdf (アクセス日 2017 年 6 月 12 日)
- 厚生労働省 (2015b) 現状・課題と検討の方向性 (1) 障害児支援について (2) その他の障害福祉サービスの在り方等について, http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/000010358.pdf (アクセス日 2017 年 6 月 12 日)
- 厚生労働省 (2016) 保育所等訪問支援の効果的な実施を図るための手引書, <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Syakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000166361.pdf> (アクセス日 2017 年 7 月 31 日)
- Margetts JK ;Le Counteur A;Croom S (2006) Families in a state of flux: the experience of grandparents in autism spectrum

disorder;Care,Health&Development, 32 (5), 565-574

前田和子, 譜久山民子, 宮城雅也, 山城五月, 上原梨那, 伊波輝美, 砂川恵正, 佐久川博美, 上原真理子, 金城マサ子, 鈴木ミナ子 (2010) 保育士による発達障害児の早期発見と早期支援の課題ー沖縄南部 3 市における質問紙調査ー, 沖縄県立看護大学紀要, 11, 31-38

松山郁夫 (2006) 軽度発達障害幼児期の不適応行動に対する保育士の認識, 佐賀大学文化教育学部研究論集, 11 (1), 123-131

丸山啓史 (2013) 障害児の母親の就労と祖父母による援助, 京都教育大学紀要, 122, 87-100

峯川章子 (2017) 大阪市内における児童発達支援事業・放課後等ディサービス事業所における発達障がい者支援状況に関する調査, 小児保健研究, 76, 135

宮寄雅則 (2009) 乳幼児健診の歴史と法的根拠, 小児保健シリーズ, 64, 1-6

水野智美, 徳田克己 (2002) 障害児を持つ母親と祖父母との関係Ⅱ, 日本認知心理学会発表論文集, 308

文部科学省 (2003a) 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」調査結果,

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/054/shiryo/attach/1361231.htm (アクセス日 2017 年 7 月 21 日)

文部科学省 (2003 b) 今後の特別支援教育の在り方について (最終報告) のポイント,

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/054/shiryo/attach/1361207.htm (アクセス日 2017 年 7 月 21 日)

村山陽 (2009) 高齢者との交流が子どもに及ぼす影響, 社会心理学研究. 25 (1), 1-10

永田雅子, 佐野さやか (2013) 自閉症スペクトラム障害が疑われる 2 歳児の母親の精神的健康と育児ストレスの検討, 小児の精神と神経, 53 (3), 203-209

内閣府 (2013) 障害者白書 (平成 25 年版), 東京, 42-55

内閣府 (2014) 平成 26 年版子ども・若者白書, 東京, 13-15

- 日本臨床心理士会（2014）乳幼児健診における発達障害に関する市町村調査 報告書，
<http://www.jscoop.jp/suggestion/sug/pdf/kensshinhokoku140702.pdf>（アクセス日 2017 年 6 月 22 日）
- 中山忠政（2006）発達障害者支援法の制定－制定の経緯と今後の課題－，小児保健研究，65（1），67-72
- 夏堀摂（2001）就学前期における自閉症児の母親の障害受容過程，特殊教育研究，39(3)，11-22
- 野尻恵美子（2012）障害児をもつ祖父母の障害受容を促す要因の検討，コミュニケーション障害学，29，1-8
- 野尻恵美子（2013）障害児をもつ両親の障害受容：祖父母に対する両親の意識と受容やストレスとの関連，コミュニケーション障害学，30，9-17
- 野尻恵美子（2014）障害児をもつ祖父母の障害受容と両親の受容との関連，コミュニケーション障害学，31，72-79
- 総務省（2017）発達障害者支援に関する行政評価・監視結果報告書，
http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/110614.html
（アクセス日 2017 年 6 月 16 日）
- 杉山登志郎（2007）「発達障害の子どもたち」，講談社，東京，26-50
- 滝村雅人（2006）発達障害者支援法の研究，名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究，5，67-82
- 徳島県教育委員会（2006）通常の学級に在籍している特別な支援を必要とする子どものチェックシート，
<http://www.tokushima-ec.ed.jp>（アクセス日 2017 年 6 月 12 日）
- 徳田克己，水野智美（2002）障害児を持つ母親と祖父母との関係Ⅰ，日本認知心理学会発表論文集，307
- 鳥居奈津子，横田碧（2007）ダウン症児の家庭内に祖母が存在する意味，家族看護研究，13（2），95
- 上村眞生，岡花祈一郎，若林紀乃，松井剛太，七木田敦（2007）世代間交流が幼児・高

齡者に及ぼす影響に関する実証的研究，幼年教育年報，29，65-71

山田陽子（2010）療育機関に通う自閉症スペクトラム児をもつ母親の育児ストレスに関する研究，川崎医療福祉学会誌，20（1），165-178

第2章 研究1：祖父母との交流が発達障害児及び発達につまずきのある児に与える影響

－保育士へのインタビュー調査及び質問紙作成とその調査－

第1節 研究の背景と目的

2005年4月より施行された「発達障害者支援法」において、発達障害の定義は、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」とされている。「発達支援とは、発達障害者に対し、その心理機能の適正な発達を支援し、および円滑な社会生活を促進するために行う発達障害の特性に対応した医療的福祉的および教育的援助をいう」とされており、国及び地方公共団体の責務として、発達障害の早期発見、早期支援を行うことが重要であるとされている（厚生労働省，2005）。

原口ら（2013）は、年少人口、合計特殊出生率が概ね全国平均値の地域の421か所の保育所に調査した結果、障害のある子どもや、「対人的トラブル」、「落ち着きのなさ」などの特徴を示す「特別な配慮を要する子」が、公立保育所、私立保育所共に9割を超えて在籍していたことを報告した。また、郷間ら（2008）は、保育現場において「気になる子」は、障害の診断を受けている児よりも、約3.5倍多く在籍していたことを明らかにしている。このような幼児期や、小・中学校期の発達につまずきを早期に発見し、対応を考えることを目的に、全国各地で様々なつまずきチェックリストが作成・実施されており（小野ら，2012）、発達障害もしくは発達につまずきのある児への支援の必要性が高まっていると考える。

内閣府（2014）の「家族と地域における子育てに関する意識調査」によると、20～49歳男女の有配偶者の約8割は、子どもが小学校に入学するまでは、子どもからみた祖父母が、育児や家事の手助けをすることが望ましいと回答しており、同調査における夫婦の就労状況別では、男女とも共働き世帯の方が片働き世帯よりも、祖父母の手助けを求める割合が高いことが報告されている。そして、共働き世帯の約半数が、祖母に子どもを預けながら仕事をしているとの報告がある（角川，2009）。特に障害児の母親の就労に

においては、祖父母による援助は非常に重要なものであり、支援内容として、病気の子どもを預かることや保育所等への送迎を行う祖父母が多く（丸山，2013）、祖父母が子育ての支援者としての役割を担っている現状がある。発達障害に関して、今野（2009）は、全国の発達障害者支援センター73か所に、祖父母からの相談に関する調査を行い、9割以上のセンターで祖父母からの相談を受け、その内容として、孫の障害に関すること、孫との接し方などが多かったことを報告しており、祖父母が発達障害のある孫との交流や支援を行っている現状が示されている。このように、障害の有無にかかわらず、孫と祖父母の交流は、日常的に行われ、祖父母が子育て支援をしていることが窺われる。

祖父母と交流することによる孫への影響は、幼少時においては人格形成や情緒的な発達によい影響を及ぼし（諏澤，2013a）、祖父母の優しさや微笑みなどのあたたかい態度は、孫の社交性に影響を与えると報告されている（諏澤，2013b）。さらに、他者への思いやりやコミュニケーションスキルの発達に寄与することが報告されている（上村ら，2007）。しかし、祖父母との交流と幼児期の発達障害に関しては検索できなかった。コミュニケーション、対人関係、社会性などに課題のある発達障害児に関して、祖父母との交流が与える影響について明らかにすることは、発達障害児への早期支援を日常的に進める上で、意義深いことと考える。

本研究の目的は、保育所在籍の発達障害及び発達につまずきのある児が、祖父母と交流することによる影響を、保育士への調査により明らかにすることである。保育士を対象とする理由は、9割を超える保育所にいわゆる「特別な配慮を要する子」が在籍していること（原口ら，2013）、保育所に在籍している児は、共働き世帯が大半であるため、祖父母の関わりが多いことが予想されること（角川，2009；丸山，2013）、発達障害児の認知行動上の特徴は、他者と関わるが多くなる保育所などの集団生活において明らかになると考えられるためである。尚、本研究では、児と祖父母が交流することによる影響を探索的に把握するため、保育士へのインタビュー調査をした。把握した内容を実証的に明らかにするため、児と祖父母が交流することによる影響に関する質問紙を作成し、郵送調査をした。

第2節 保育士へのインタビュー調査

1. 目的

発達障害児及び発達につまずきのある児が祖父母と交流することによる影響を探索的に把握することを目的とする。

2. 研究方法

1) 研究対象

対象者は、全世帯の5割近い世帯が、同居あるいは近隣に祖父母が居住しており（兵庫県，2011）、比較的祖父母との日常的交流が多いと考えられる地域の保育所6か所とし、発達障害児及び発達につまずきのある児を受け持った経験を有する保育士35名に調査を依頼した。

2) 調査時期

2013年7月から2014年8月

3) 調査方法

インタビューの方法には、構造化面接、半構造化面接、非構造化面接がある。構造化面接は質問項目を設定し、仮説の妥当性を検証するためのデータ収集を目的とする。半構造化面接では、仮説や質問項目をある程度設定をし、自由な相互作用を通して情報を得ることを目的とする。非構造化面接は、質問項目を設定せず、仮説を生成することを目的とする。本研究では、半構造化面接とし、保育所在籍の発達障害及び発達につまずきのある児が祖父母と日常的に交流することにより、何らかの影響があるのではないかという仮説を設定した。質問項目は、「祖父母との日常的交流が、発達障害児または発達のつまずきや気になる子に影響があると思いますか。実際にあった具体的な場面で話して下さい。」とした。調査時間は1回あたり30分～40分であった。祖父母と日常的交流がある状態とは、松尾ら（2014）を参考に、同居または週1～2回以上の関わりや保育所の送迎や施設の行事の参加が有る等とした。インタビューで聞きもらった場合、再度

質問することの承諾を得た。面接時は対象者の了解を得て録音し、逐語録を作成した。

4) 分析方法

分析方法は質的帰納的分析とした。類似する内容を集め、類似性と相違性を検討しサブカテゴリを生成し、さらに抽象度を高め、カテゴリを生成した。研究のプロセスを通して継続したスーパーバイズを受けることにより、結果の妥当性を確保した。

3. 研究結果

1) 対象者の属性 (Table2-1)

保育士の性別は、全員女性であった。年齢は「20 歳代」12 人 (34.3%)、「30 歳代」7 人 (20.0%)、「40 歳代」9 人 (25.7%)、「50 歳代」6 人 (17.1%)、「60 歳代」1 人 (2.9%) であった。就業年数は、「5 年未満」5 人 (14.3%)、「5 年以上」7 人 (20.0%)、「10 年以上」6 人 (17.1%)、「15 年以上」3 人 (8.6%)、「20 年以上」14 人 (40.0%) であった。

Table 2-1 保育士の属性

| n=35 | | |
|------|-------|----------|
| 年齢 | 20歳代 | 12(34.3) |
| | 30歳代 | 7(20.0) |
| | 40歳代 | 9(25.7) |
| | 50歳代 | 6(17.1) |
| | 60歳代 | 1(2.9) |
| 就業年数 | 5年未満 | 5(14.3) |
| | 5年以上 | 7(20.0) |
| | 10年以上 | 6(17.1) |
| | 15年以上 | 3(8.6) |
| | 20年以上 | 14(40.0) |

単位:人(%)

2) 発達障害児及び発達につまずきのある児とその祖父母との日常的交流による影響

保育士から得られた内容は 133 であり、「発達障害児及び発達につまずきのある児への影響」、「保護者への影響」、「祖父母の態度」の 3 のカテゴリに分類した。カテゴリを【 】、サブカテゴリを《 》、内容を「 」にて以下に示す。

(1) 祖父母との日常的交流における発達障害児及び発達につまずきのある【児への影響】(Table 2-2)

本カテゴリは、60 の内容からなり、18 のサブカテゴリで構成された。《コミュニケーションが上手になる》では、「その子にとっていい対応っていうか、いい接し方というか、コミュニケーションの取り方をやっぱり学んでいくのかな」等の 5 の内容があった。《人との関わりが上手になる》では、「人との関わりが上手になる」等の 10 の内容があった。《人の話が聞けるようになる》では、「おじいちゃん、おばあちゃんに個別に話しかけられるから、聞くことができるのかな」等の 4 の内容があった。《気持ちをコントロールできるようになる》では、「感情をコントロールできるようになった」等の 7 の内容があった。《愛情をもらえている》では、「おばあちゃんに関わっている分、愛情もいっぱいもらっている」等の 3 の内容があった。《守られている》では、「守られている」の 1 の内容があった。《刺激をもらえている》では、「一番興味を持っているところを刺激してあげたら、多分それ以外のところも上がると思うんです。そういう刺激を与えてくれるおじいちゃん、おばあちゃんがいる」等の 5 の内容があった。《協調性が養える》では、「同居でみんなで暮らしていると協調性が養われる」等の 2 の内容があった。《物の貸し借りができる》では、「おもちゃの貸し借りができない子が多いけど、そういうこともできるようになるのかなって」の 1 の内容があった。《優しくなる》では、「優しいから周りの友だちが集まってくる」等の 7 の内容があった。《相手の気持ちを考えられる》では、「日々、よしよしされていたら、相手の気持ちをもうちょっと考えられたり、人らしい気持がはぐくまれる」の 1 の内容があった。《心が安定する》では、「心の安定という部分でおじいちゃん、おばあちゃんに関わることで保てるのかな」等の 3 の内容があった。《落ち着きのある子に育つ》では、「お母さんたちが忙しくてかまってあげられなくても、おじいちゃん、おばあちゃんがそこを補ってくれたら、落ち着きのある子

に育つ」の1の内容があった。《心や情緒が豊かに育つ》では、「色々な人が関わることで心や情緒が豊かに育つと思いますね。色々な人の中におじいちゃん、おばあちゃんがいて、友だちや私たちがいてね」の1の内容があった。《甘え方が上手になる》では、「おじいちゃん、おばあちゃんに関わっている子はつんとしていないっていうか、素直に甘えにいけるっていうのか、甘え方を知っている」の1の内容があった。《通園時間が安定する》では、「(おじいちゃん、おばあちゃんがいなかったら) お迎えにきてもらえず、保育園で過ごす時間が長くなるので(行動が)荒れる」の1の内容があった。《親が精神的に安定することで子どもが落ち着く》では、「おかあさん自身が安定していたら子どもにもいい影響があると思いますね」等の5の内容があった。《定型発達と同等の発達を期待されて苦しむ》では、「おじいちゃん、おばあちゃんの障害に対する理解がないと他の子とおなじでないといけないと思い、子どもが苦しむ」の2の内容があった。

(2)発達障害児及び発達につまずきのある児とその祖父母との日常的交流における【保護者への影響】(Table 2-3)

本カテゴリは、29の内容からなり、7のサブカテゴリで構成された。《育児負担が減る》では、「お母さんの育児負担が減る」等の8の内容があった。《相談ができる》では、「心置きなく相談できる」等の5の内容があった。《余裕が持てる》では、「お母さんが余裕をもって子どもに関われる」等の3の内容があった。《気持ちが落ち着く》では、「お母さんが助かって、気持ちが安定する」等の5の内容があった。《気持ちが楽になる》では、「自分だけで抱え込んでしまうよりも、近くにいてくれたら気持ちが楽になる」等の5の内容があった。《前向きになる》では、「お母さんがまた新たに前に進んでいこうと思える」等の2の内容があった。《育て方が悪いと祖父母から責められる》では、「嫁姑関係が悪くて、おじいちゃんたちが強い関係であつたら、お嫁さんはすごく責められる。そういうことが前にあったんです。お姑さんに育て方が悪いからって責められていた」の1の内容があった。

(3) 発達障害児及び発達につまずきのある孫に対する【祖父母の態度】(Table 2-4)

本カテゴリは、46 の内容からなり、13 のサブカテゴリで構成された。《ゆっくりと関わっている》では、「おじいちゃん、おばあちゃんにゆっくり関わってもらえたら変わる」等の 8 の内容があった。《おおらかな目と心でみている》では、「おじいちゃん、おばあちゃんは人生経験があるじゃないですか。だから、どーんってかまえていたりして、おおらかな目でみていてくれるのかなって思いましたね」等の 5 の内容があった。《客観的にみている》では、「おばあちゃんって、お母さんと比べてちょっと客観的にその子を見ることができる」等の 5 の内容があった。《冷静にみている》では、「おばあちゃんは冷静ですよ」等の 2 の内容があった。《甘えさせている》では、「おばあちゃんに自由に甘えさせてもらっている」等の 6 の内容があった。《寄り添っている》では、「おばあちゃんのほうが（子どもに）寄り添っている感じかな」の 1 の内容があった。《お行儀や生活習慣を身につけさせている》では、「おばあちゃんがお行儀とか生活習慣を身につけさせている」等の 2 の内容があった。《色々なことを教えている》では、「おばあちゃんが色々なことを教えてくれていた、動物の名前とか言えるようになっていましたね」等の 10 の内容があった。《五感を使えるようなところに連れて行っている》では、「おじいちゃん、おばちゃんと五感を使えるようなところに連れて行ってもらおう」の 1 の内容があった。《送迎の援助をしている》では、「（おじいちゃん、おばあちゃんがいなかったら）お迎えにきてもらえず、保育園で過ごす時間が長くなるので（行動が）荒れると思います」の 1 の内容があった。《自然と子どもの発達に合った遊びをさせている》では、「自然とその子の発達に合った遊びをさせてくれるからいいかな」の 1 の内容があった。《障害の理解が不十分である》では、「（他の子と）比べてしまいがちになったり、知識を持っている人だったらいいけど、理解されていないおじいちゃん、おばあちゃんだった場合、お母さんが傷つくようなことがあったりね」等の 2 の内容があった。《多動の子をみるのは大変である》では、「多動の子をみるのは大変」等の 2 内容があった。

Table 2-2 祖父母との日常的交流における発達障害児及び発達につまずきのある【児への影響】

| サブカテゴリ | No | 内容 |
|------------------------|----|--|
| コミュニケーションが上手になる | 1 | その子にとっていい対応っていうか、いい接し方というか、コミュニケーションの取り方をやっぱり学んでいくのかな |
| | 2 | あまり自分から言わない子だったんだけど言ってくれるようになりましたね。4歳のときは聞いたら教えてくれるって感じだったけど、全体的に話したいっていう気持ちが出てきたんですね |
| | 3 | いろんな目があって、声かけがあることでコミュニケーションが上手になる |
| | 4 | 子どもの障害を受け入れている祖父母と受け入れられていない祖父母とでは、子どもの社会性やコミュニケーションに違いがある |
| | 5 | 関わる人が増えれば、話しかける人が増える。1対1で関わって、話しかけることで、言葉がちよっとでてきたっていうものもある |
| 人との関わりが上手になる | 6 | 人との関わりが上手になる。 |
| | 7 | おばあちゃんに受け入れをしてももらっていなかった子は、友だちが遊んでいても気にならないし、見ているだけで、誘っても関わろうとしなかった |
| | 8 | おじいちゃん、おばあちゃんが関わることで関わる人が2人、3人と増えるので、いろんな人と関わるのでそこにはいい影響があるのかなと思います |
| | 9 | 祖父母と日常的に交流がある子とない子とでは、人との関わりの差が大きい |
| | 10 | 人との関わりを経験することで色んな面で成長する |
| | 11 | 人との関わりが多いと何かあるのかなと思います |
| | 12 | おばあちゃんだからできる遊びがある。昔の遊びって誰かと関わって遊ぶことが多い。それが対人関係に影響する |
| | 13 | おじいちゃん、おばあちゃんが関わっていなかったら、いらいらして友だちとの関係が悪くなりそう |
| | 14 | おじいちゃんは、自分の孫だけを相手にするんじゃないで、何人かの子どものことも相手にしていて、保育者に対して「お世話になってます」っていう、人とのあたりかたっていうですか、自分の子どもだけじゃなく、他の子の頭を撫でて帰ったりとか、挨拶ひとつとっても、そういうことを子どもは肌で感じているんかなって、わからないなりに「人とこうやって関わるんや」とか |
| | 15 | 色んな人と会話できる機会があるので対人関係に影響がある |
| | 16 | おじいちゃん、おばあちゃんに個別に話しかけられるから、聞くことができるのかな |
| | 17 | 日頃からこうしなさいよって、色んな人の指示があれば人の話を聞くという能力が違ってくる |
| | 18 | 人を信じられて、安心できると聞く耳をちよっとずつ持つてくれる |
| 人の話が聞けるようになる | 19 | おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしていると、集団行動をするときに、人の話が聞けるようになる |
| | 20 | 感情をコントロールできるようになった |
| | 21 | おじいちゃん、おばあちゃんが関わることでクールダウンできる |
| | 22 | おじいちゃん、おばあちゃんが関わっていなかったら、いらいらして友達との関係が悪くなりそう |
| 気持ちをコントロールできるようになる | 23 | おじいちゃん、おばあちゃんとの関わりがありますね、ちよっと自分の気持ちを抑えられるようになってきていると思いますね |
| | 24 | 受け入れてもらっているからカッとなっても、ちらっと担任をみたり、言葉がとどくようになった |
| | 25 | 祖父母が子どもを受け入れて対応することで、いっぺんには爆発しない |
| | 26 | 受け入れてもらっているから、カッとなって切れる回数が減った |
| | 27 | おばあちゃんが関わっている分、愛情もいっぱいもらっている |
| | 28 | おじいちゃん、おばあちゃんからたくさん愛情をもらって、包んでもらえたらいいなと思います |
| 愛情をもらえている | 29 | 相対的にいろんな人から愛情をもらえるならば、子どもにとってプラスになる |
| | 30 | 守られている |
| 刺激をもらえている | 31 | 一番興味を持っているところを刺激してあげたら、多分それ以外のところも上がると思うんです。そういう刺激を与えてくれるおじいちゃん、おばあちゃんがいる |
| | 32 | 刺激が与えられないと発達がゆっくりになりますね |
| | 33 | 一緒に遊ぶことがいい |
| | 34 | 何に興味を持っているかを気づいてあげて、その部分を伸ばしてあげるのがいい |
| | 35 | いろんな人の刺激は大きい |
| | 36 | 同居でみんなで暮らしていると強固性が養われる |
| 協調性が養える | 37 | おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしている子と別々に暮らしている子では集団行動に違いがあるんじゃないかな。自分の思いだけじゃだめなことがあるので |
| | 38 | おもちゃの貸し借りができない子が多いけど、そういうこともできるようになるのかなって |
| 物の貸し借りができる 優しくなる | 39 | 優しいから周りの友だちが集まってくる |
| | 40 | 優しさは対人関係に影響する |
| | 41 | 小さい子は好きでよく小さい子の部屋に行きました。力の加減がわからなくて泣かしてしまうこともありましたけど、優しくかったですね。人の世話にするのが好きでしたね |
| | 42 | 優しい言葉をいっぱいかけてもらったり、愛情をいっぱいもらって育った子どもは人に優しくなる |
| | 43 | おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしていると、集団行動をするときに、人の話が聞けるようになる、暮らしている子どもは、すごく面倒見がよかったり、細かいところに気づいたりとか、そういうのは顕著に感じますね。 |
| | 44 | 祖父母に受け入れられている子はあったかい子になる |
| 相手の気持ちを考えられる 心が安定する | 45 | 誰かが転んだらさっと助けてあげたりとか、転んだら「痛くなかった？」とか世話してくれたり。そういう温かみとかいうのを感じたりする |
| | 46 | 日々、よしよされていたら、相手の気持ちをもうちょっと考えられたり、人らしい気持がはぐくまれる |
| | 47 | 心の安定という部分でおじいちゃん、おばあちゃんが関わることで保てるのかな |
| | 48 | 受け入れてくれると子どもが安定する |
| | 49 | 誰かと一緒にいることで心が落ち着く |
| 落ち着きのある子に育つ | 50 | お母さんたちが忙しくてかまっていられなくても、おじいちゃん、おばあちゃんがそこを補ってくれたら、落ち着きのある子に育つ |
| 心や情緒が豊かに育つ | 51 | 色んな人が関わることで心や情緒が豊かに育つと思いますね。色んな人の中に、おじいちゃんおばあちゃんのがいて、友だちや私たちがいてね |
| 甘え方が上手になる | 52 | おじいちゃん、おばあちゃんが関わっている子はつんとしていないっていうか、素直に甘えていけるっていうのか、甘え方を知っている |
| 通園時間が安定する | 53 | (おじいちゃん、おばあちゃんがいなかったら)お迎えにきてもらえず、保育園で過ごす時間が長くなるので(行動が)荒れる |
| 親が精神的に安定することで子どもが落ち着く | 54 | おかあさん自身が安定していれば子どもにもいい影響があると思いますね |
| | 55 | 夫婦のもめごとに対しても、おじいちゃん、おばあちゃんがいるほうがいい |
| | 56 | 両親、祖父母との関係が上手にいったら子どもにもいい影響がある |
| | 57 | (おかあさんが)いらいならなかったら、その子も切り替えが早くなる。他のことで気分を変えられなかったことができる、やる気がでる、その場におれる |
| | 58 | 育児負担が軽減されたら、お母さんのほうも気持ちに余裕ができるし、それが子どもに影響して、ゆつてできるんじゃないかと思う |
| 定型発達と同等の発達を期待されて苦しむ | 59 | おじいちゃん、おばあちゃんの影響に対する理解がないと他の子とおなじでないといけないと思い、子どもが苦しむ |
| | 60 | 家庭のなかで反対するおばあちゃんがいると、たぶん親はプレッシャーを感じて、その子に一生懸命文字を教えたりとか、数字を教えたりとかしたすと、子どもはしんどくなって、集団の中に入りにくくなることはあるかなって思いますね |

Table 2-3 祖父母との日常的交流における発達障害児及び発達につまずきのある児の
【保護者への影響】

| サブカテゴリ | No | 内容 |
|-------------------|----|---|
| 育児負担が減る | 1 | お母さんの育児負担が減る |
| | 2 | そういう(発達障害の)子どもって、お母さんの心の部分にすごく影響しているような気がするんで、そういう部分では手助けがあるとい いかなって思います |
| | 3 | 負担が減る |
| | 4 | 保護者に育児負担ということはおじいちゃん、おばあちゃんの協力があるのとないは違う。子どもが熱が出て、迎えが必要な時は おじいちゃん、おばあちゃんがお迎えに来てくれる |
| | 5 | 保護者の育児負担感に違いがある |
| | 6 | お母さんが楽になる |
| | 7 | 高齢者の方がいたらお母さんにとって負担が楽になる |
| | 8 | 親世代の負担もちょっと軽減する |
| 相談ができる | 9 | 心置きなく相談できる |
| | 10 | 1人で悩まなくてもいい |
| | 11 | おばあちゃんからお母さんに助言があったりとか、保育園のほうに発信がある |
| | 12 | おかあさんはおばあちゃんに悩みを言っている |
| 余裕を持てる | 13 | ちょっと違った意見がお母さんに届くかもしれないし、相談しやすい人が増えるってことになるしね |
| | 14 | お母さんが余裕をもって子どもに関われる |
| | 15 | お母さんに余裕ができればいいと思いますね |
| | 16 | お母さんに余裕ができる。みんなの目で見えあげられるっていうのがお母さん自身のゆとりにつながるのかなって思います |
| 気持ちが落ち着く | 17 | お母さんが助かって、気持ちが安定する |
| | 18 | 話を聞いてくれる人がそばにいるっていうのは安心する |
| | 19 | 家族全員で一生懸命されていることで(お母さんの)気持ちが落ち着いてこられましたね |
| | 20 | おじいちゃん、おばあちゃんが子育てを助けてくれて、おかあさんがゆとりしたら子どもにも穏やかに接することができる |
| | 21 | 協力があれば、お母さんは話を聞いてもらえてホッとする。それが子どもに対しての対応が違ってくるので、そういう意味で心の安定が保て るのかな |
| 気持ちが楽になる | 22 | 自分だけで抱え込んでしまうよりも、近くにいると楽になる |
| | 23 | 祖父母がフォローしたら、保護者の気持ちが楽になる |
| | 24 | 両親と祖父母との関係がよかったら、距離的に遠くても、助けてもらっていたらお母さんがうれしそうですね |
| | 25 | お母さんが追い詰められたときに、それぐらいでなくてもいいんじゃないっていう器が、おじいちゃん、おばあちゃんにあれば、お母さんは ホッと安心できたりして。ちょっと発達がゆとりでもいいかって思えるようなものであればいいなって思います |
| | 26 | 保護者が祖父母になんでも言える関係であれば、発散できる |
| 前向きになる | 27 | お母さんがまた新たに前に進んでいこうと思える |
| | 28 | 一緒に頑張ってくれる人がいるから、次はこの作戦で頑張ってみようとかいろんなことで励まされる |
| 育て方が悪いと祖父母から責められる | 29 | 嫁姑関係が悪くて、おじいちゃんたちが強い関係であつたら、お嫁さんはすごく責められる、そういうことが前にあつたんです、お姑さんに育 て方が悪いからって責められていた |

Table 2-4 発達障害児及び発達につまずきのある児の孫に対する【祖父母の態度】

| サブカテゴリ | No | 内容 |
|----------------------|----|---|
| ゆっくりと関わっている | 1 | おじいちゃん、おばあちゃんにゆっくり関わってもらえたら変わる |
| | 2 | 一緒にゆっくり、満ち足りた時間を過ごすことは、発達障害の子にとって大事な時間だと思う |
| | 3 | ゆっくり接してくれる人が近くにいたら、それがおじいちゃん、おばあちゃんでも、その子も穏やかになるのかな |
| | 4 | 多動性のある子は誰かがじっくり関わってくれるのがいい |
| | 5 | おばあちゃんが朝、送りにくるとき、この子は虫が好きなので、道の虫を探したり、手をつないで、話をしながら来られていますね。ゆっくりと時間をかけてね |
| | 6 | おじいちゃん、おばあちゃんって寛大ですね。上手に言葉をかけて子どもを帰らせたりとか、じっくり待ってあげたりとか、そういうことがやっぱりできる人になってほしい |
| | 7 | 園の外でじっと待っていらっしゃるおじいちゃんなんかもみられることがあります。叱らないし、引っ張ったり、抱きかかえて無理やりにするっていいことはないですね、上手になだめて連れてきてくださる人になってほしい |
| | 8 | おじいちゃん、おばあちゃんっていうのは時間的に余裕があると思うんですね。そしたら子どもが「これ何？」とか聞いても、きっちり答えてあげられる時間がある |
| おおらかな目と心でみている | 9 | おじいちゃん、おばあちゃんは人生経験があるじゃないですか。だから、どーんとかまえていたりして、おおらかな目でみていてくれるのになって思いましたね |
| | 10 | おばあさんがこの子に、やさしく、そんなんにとげとげしていないで話しかけているね。ばたばたされてないわ。そんなんもこの子にとっていいんでしょうね |
| | 11 | マイナス面に考えがいくようなときはプラスの方向にいくようにしている |
| | 12 | おじいちゃんおばあちゃんって大きい心をもっているような気がするんですね |
| 客観的にみている | 13 | 一生懸命すぎないっていうのかな、子どもを育てなくちゃっていう、力が抜けているほうがいい。大らかにみれるっていうか、そこまですでなくてもいいよっていう |
| | 14 | おばあちゃんって、お母さんと比べてちょっと客観的にその子を見ることが出来る |
| | 15 | おばあちゃんたちって2〜3歩下がって見ることが出来る |
| | 16 | 視点が違うので、気づきがあるのかなって |
| 冷静にみている | 17 | おばあちゃんはその子に対して、ワンクッション置いた見方ができる。子どもの対処の仕方が変わってくる |
| | 18 | 客観的にその子を知る機会があったら、いろんな面で自分では気づかないことも気づくことができる |
| | 19 | おばあちゃんは冷静ですよ |
| | 20 | おばあちゃんはこの子の行動をじっと見ている。(行動の)制止はしない |
| 甘えさせている | 21 | おばあちゃんに自由に甘えさせてもらっている |
| | 22 | お母さんが妊婦さんで抱っこできないのでおばあちゃんが抱っこしているのは見ますね |
| | 23 | おかあさんとは違う関わり、まあ甘えさせてもらったりする |
| | 24 | 何かあったらすぐに来てくれるし、孫がかわいさでなんでもしてくれている |
| 寄り添っている | 25 | 助け舟になる |
| | 26 | おかあさん以外でべったりさせてくれる人がいるのであれば満たされてっていう方向にいくのかな |
| | 27 | おばあちゃんのほうが(子どもに)寄り添っている感じがする |
| | 28 | おばあちゃんがお行儀とか生活習慣を身につけさせている |
| お行儀や生活習慣を身につけさせている | 29 | おじいちゃん、おばあちゃんのほうがあいさつするように促していることが多い |
| | 30 | おばあちゃんが色んなことを教えてくれた、動物の名前とか言えるようになっていましたね |
| | 31 | おばあちゃんに子どもはいろいろ教えてもらって、いつの間にかできるようになっています |
| | 32 | おじいちゃん、おばあちゃんのところ泊まりに行ったときは、行ってきた、何々してきて、楽しかったっていうことを自分から教えてくれるようになってきました |
| 色々なことを教えている | 33 | おばあちゃんが協力的で、運動会前に縄跳びができなかったら、一生懸命縄跳びの練習をしてね |
| | 34 | 療育センターでは小学校に近いこともあって、言葉とか数字をやっていきましょって言われているみたいで、おばあちゃんも協力しているみたいですね |
| | 35 | ばあちゃんが朝、送ってくるときにこの子は虫が好きだから、道の虫を探したり、手をつないで話しながら来られていますね、ゆっくり時間をかけてね |
| | 36 | おばあちゃんがトランプの仕方や動物のことを教えてくれるなど刺激を受けている |
| 五感を使うようなところに連れて行っている | 37 | この迎りの家って畑をされているところが多くて、そこに連れて行ってもらって、色んなことを教えてもらっています。野菜の名前とかね |
| | 38 | 生活の知恵っていうものがあるし、時間的に余裕があればお外にだしてもらえ |
| | 39 | 親にはないものをもらっているのは多い |
| | 40 | おじいちゃん、おばあちゃんと五感を使うようなところに連れて行ってもらう |
| 送迎の援助をしている | 41 | (おじいちゃん、おばあちゃんがいなかったら)お迎えにきてもらえず、保育園で過ごす時間が長くなるので(行動が)荒れると思います |
| | 42 | 自然とその子の発達に合った遊びをさせてくれるからいいかな |
| | 43 | (他の子と)比べてしまいがちになったり、知識をもっている人だったらいいけど、理解されていないおじいちゃん、おばあちゃんだった場合、お母さんが傷つくようなことがあったりね |
| | 44 | 就学のときに普通学級にするかどうかというときに、おじいちゃんおばあちゃんとの意見の食い違いがある場合があって、そのときはお母さんが不安定になっているっていうのはありましたね |
| 多動の子をみるのは大変である | 45 | 多動の子をみるのは大変 |
| | 46 | 何をしてもかすかわからなくて、目が離せないということで大変だと聞いたことがあります |

4. 考察

1) 祖父母との日常的交流が発達障害児及び発達につまずきのある【児への影響】について

杉山（2007）は、発達障害の特徴として、大きく、「認知（周りの世界を知り、理解すること）」、「学習能力（文字を読む、書く、計算するといった能力）」、「言語能力（言葉の発語や理解）」、「社会性（他人の気持ちを読むこと、人との付き合い方や社会のルールの習得）」、「運動（歩く、走るといったからだ全体の運動）」、「手先の細やかな動き」、「注意や行動のコントロール」の7側面の発達に障害があると述べている。

祖父母との日常的交流における発達障害児及び発達につまずきのある【児への影響】を示すサブカテゴリの中に、「優しくなる」、「相手の気持ちを考えられる」が含まれていた。これは、発達障害の特徴である「社会性（他人の気持ちを読む）」を示す内容と考える。また、サブカテゴリの「コミュニケーションが上手になる」、「人との関わりが上手になる」、「人の話が聞けるようになる」、「協調性が養える」、「物の貸し借りができる」、「甘え方が上手になる」では、発達障害の特徴である「社会性（人との付き合い方や社会のルールの習得）」を示す内容であると考えられる。つまり、祖父母の関わりが児の社会性に影響を与える可能性があるのではないかと考えられる。

発達障害児及び発達につまずきのある児が祖父母と日常的交流をすることによる影響のサブカテゴリに、「気持ちのコントロールができるようになる」、「落ち着きのある子に育つ」が抽出された。これは、発達障害の特徴である「注意や行動のコントロール」を示す内容であり、祖父母との日常的交流が、孫の衝動性に影響を与える可能性が示された。

また、祖父母より「愛情をもらえている」、「守られている」、「刺激をもらえている」という享受を示すサブカテゴリが抽出された。孫は祖母と接することで、優しさや思いやりの心が育ち、子どもの心の安らかな発達が促進される（津間ら、2010）。つまり、これら祖父母からの享受により、孫への影響を示すサブカテゴリである「心が安定する」、「心や情緒が豊かに育つ」に繋がるのではないかと考えられる。さらに、「通園時間が安定する」というサブカテゴリが抽出されており、これは、児の生活が安定することに繋がるのではないかと考える。心や生活が安定することは、子どもの健やかな

成長に欠かせないものである。しかし、「認知」、「社会性」や「注意や行動のコントロール」の発達に障害がある児は、対人トラブルを引き起こしやすく、ストレスフルな状態になりやすいが（綾屋ら，2008）、祖父母から享受される心や生活の安定は、児のストレスの緩和につながるのではないかと考えられる。

しかし、祖父母が発達障害児及び発達につまずきのある孫に対して理解がない場合は、《定型発達と同等の発達を期待されて子どもが苦しむ》というサブカテゴリが抽出された。本田ら（2008）は、4名の高機能広汎性発達障害者の就学前から青年期までライフストーリーを、インタビュー調査しており、障害を理解してもらえない悩みや苦しみについて語られていた。本研究でも孫を理解していない祖父母が、孫を苦しめることになる内容が示された。

2）発達障害児及び発達につまずきのある児とその祖父母との日常的交流における【保護者への影響】について

発達障害児及び発達につまずきのある児とその祖父母との日常的交流における【保護者への影響】を示すサブカテゴリに、《育児負担が減る》、《相談ができる》が含まれていた。このような祖父母からの支援を受けることにより、保護者において《余裕が持てる》、《気持ちが落ち着く》、《気持ちが楽になる》、《前向きになる》というサブカテゴリに繋がるのではないかと考える。本田ら（2016）は、家族人数が少ないほど、また、配偶者や配偶者以外の同居家族からの情緒的サポートが低いほど、発達障害児の親の負担感が高いことを示した。また、永田ら（2013）は、自閉症スペクトラム障害が疑われる2歳児の母親は、同年代の子どもをもつ母親に比べて、抑うつ陽性率が高く、育児ストレスは全般的に高いことを明らかにし、一方、山田（2010）は、祖父母を含む家族から、育児の協力を得られている母親は、得られていない母親に比べ、ストレスが軽減することを報告している。これらのことから、祖父母との交流は保護者への精神的援助となり、発達障害児への重要な育児支援に繋がるのではないかと考えられる。

しかし、祖父母が孫を理解していない場合は、《育て方が悪いと祖父母から責められる》とのサブカテゴリが抽出された。子どもの問題行動においては、母親の育て方の問題とみなされ、母親一人で悩みを抱え、孤立するなどの問題がある（夏堀，2001）。祖

父母が孫を理解することが、このような問題の軽減に繋がると考える。

3) 発達障害児及び発達につまずきのある孫に対する【祖父母の態度】について

発達障害児及び発達につまずきのある孫に対する【祖父母の態度】では、《ゆっくりと関わっている》、《おおらかな目と心でみている》、《甘えさせている》、《寄り添っている》のサブカテゴリが抽出され、ゆっくりとおおらかに関わる祖父母の態度が、孫の心を安定させていると考える。発達障害児は、発言や行動を認められ、伝えたいことが表現できるまで待ってもらえるという体験をすることで、衝動的行動の軽減につながるという報告があった（繪内ら，2005）。本研究においても、祖父母との日常的交流が、発達障害及び発達につまずきのある孫へ与える影響の中で、《気持ちのコントロールができるようになる》が含まれていた。つまり、祖父母の態度は、孫の発言や行動を認め、待つ姿勢となっており、そのことが孫の衝動的行動に影響を与えている可能性がある。しかしながら、祖父母と交流がないケースもある。日常的に交流している保護者、保育士等が、抽出された祖父母の態度のように、児に対してゆっくりとおおらかに関わり、待つ姿勢を示すことが、児の心の安定に繋がるのではないかと考える。

また、《お行儀や生活習慣を身につけさせている》、《色々なことを教えている》、《五感を使えるようなところに連れて行っている》というサブカテゴリが抽出された。保護者が子どもの祖父母に期待する育児の手助けとして、「子どもの話し相手や遊び相手をする」、「日常生活のしつけ」、「祖父母の経験や知恵を伝える」等であり（内閣府，2014）、本研究においても、保護者が期待する育児の手助けに、祖父母は対応できている状況が示された。

しかし、《障害の理解が不十分である》というサブカテゴリも抽出されている。孫への影響においては《定型発達と同等の発達を期待されて苦しむ》というサブカテゴリが抽出されており、保護者への影響においては、《育て方が悪いと祖父母から責められる》というサブカテゴリが抽出されていた。つまり孫には定型発達を期待し、保護者には育て方が悪いと責めるという、祖父母の《障害の理解が不十分である》ことが孫とその保護者を苦しめることに繋がるのではないかと考える。一方で、孫の特性に合わせた育児をし、保護者を助けたいと思っている祖父母が存在している（石井ら，2014）。また、

孫の障害に対して専門的な意見を求め、孫のために自分ができることを探している（今野，2009）。このような祖父母の要望を鑑み、今後、祖父母が、発達障害に対する知識や関わり方などを学習する機会を得ることが、重要となってくると考える。

また、祖父母が《多動の子をみるのは大変である》という現実があり、育児の手助けをすることが祖父母の健康に影響がでる可能性がある。実際、保育所に通園している児の母親は就労していることが多く、そのため祖父母の育児支援が重要となっており（丸山，2013）、それが祖父母において大きな負担となっている（今野，2003）。今後、祖父母の負担が軽減できるよう、教育、医療、福祉、保健を含む広い分野において、家族支援の視点となる社会資源のさらなる充実が必要である。

5. 結語

祖父母との日常的交流が発達障害児及び発達につまずきのある児に与える影響について、探索的研究として、保育士にインタビュー調査を実施した。その結果、【児への影響】、【保護者への影響】、【祖父母の態度】という3つのカテゴリが抽出され、子ども、保護者、祖父母の3者への影響が見いだされた。祖父母の態度が児の社会性に影響し、保護者においては、育児負担の軽減や前向きに取り組めるという影響があった。しかし、祖父母の障害の理解がない場合は、子どもと保護者を苦しめるということに繋がることが見いだされ、祖父母の障害の理解が重要となる。

第3節 祖父母との交流が発達障害児及び発達につまずきのある児に与える影響に関する質問紙の作成と調査

1. 目的

第2節で得られた「祖父母との日常的交流における発達障害児及び発達につまずきのある児への影響」(Table 2-2)のサブカテゴリの内容を、実証的に明らかにするため、インタビュー調査で得られた内容を基に、祖父母との交流が発達障害児及び発達につまずきのある児に与える影響に関する質問紙を作成し、調査することである。

2. 研究方法

1) 祖父母との交流が発達障害及び発達につまずきのある児に与える影響に関する質問紙の作成

質問紙の項目の抽出は、以下の通りである。

第2節の保育士へのインタビュー調査で得られた「祖父母との日常的交流における発達障害及び発達につまずきのある児への影響」(Table2-2)のサブカテゴリの内容に合致するもの及びインタビュー調査より得られたものに加え、発達障害児の行動特徴を記述するために作成された複数の既存の尺度から幅広く項目を収集した。その内容が、日常の保育場面を反映するなど具体的であり、かつ回答者が理解しやすいことを基準とした。参考にした尺度は、幼児期からの子どもの適応と精神的健康状態を包括的に把握できる Strengths and Difficulties Questionnaire ; SDQ (Goodman, 1997 ; Goodman, 2001)、自閉症スクリーニング質問紙である Autism Screening Questionnaire ; ASQ (Berument ら, 1999)、幼児用発達障害チェックリストである Checklist for Developmental Disabilities in Young Children ; CHEDY (尾崎ら, 2010 ; 尾崎ら 2012)、広汎性発達障害スクリーニング尺度乳幼児行動チェックリストである Infant behavior checklist revised ; IBC-R (金井ら, 2004)、発達障害児包括的アウトカム質問票である Comprehensive Outcome Questionnaire for Development disorder ; COQ-D (塩川, 2006)、広汎性発達障害児の社会性スクリーニング検査 (武井ら, 2012)、簡易版就学前幼児用 (4~6 歳) 用発達障害チェック・リスト (宮崎ら, 2014)、学習障害 (LD)、注

意欠陥多動性障害（ADHD）、高機能自閉症等が疑われることにより、学びにくさやつまずきのある子どもをチェックできる「チェックシートⅢつまずきチェックシート（幼稚園用）」（以下つまずきチェックシート）であった（徳島県教育委員会，2006）。

既存の尺度より採用した項目の内訳は、SDQ からは 14 項目、ASQ からは 6 項目、CHEDT からは 9 項目、IBC-R からは 4 項目、COQ-D からは 13 項目、広汎性発達障害児の社会性スクリーニング検査からは 3 項目、簡易版就学前幼児用（4～6 歳）発達障害チェック・リストからは 7 項目、「つまずきチェックシート」からは、第 3 章の予備調査において、祖父母との交流の有無において、有意差があった項目の内、祖父母の影響と考えられ、本調査の内容に合致する 6 項目であった。

内容的妥当性を確保することを目的に、質問紙の項目を、20 年以上の保育経験がある 2 名の保育士で、内容及び表現の適切性を検討した。その結果、「祖父母との日常的交流における発達障害及び発達につまずきのある児への影響」（Table2-2）のサブカテゴリの内容において、「愛情をもらえている」、「守られている」、「刺激をもらえている」、「通園時間が安定する」、「親が精神的に安定することで子どもが落ち着く」、「定型発達と同等の発達を期待されて苦しむ」は、祖父母からの享受を意味し、影響とは考えにくいことから削除した。一方、サブカテゴリに新たに採用したものを記す。祖父母の影響として、人との関わりやコミュニケーションが上手になることが示されたことより、児の社会的な遊びに影響があるのではないかと考え、「社会的な遊びが養える」を加えた。保育士のインタビューで得られた【祖父母の態度】の中に、「甘えさせている」のサブカテゴリがあり、それが高じると、児が依存的になったり、わがままになることが考えられ、「依存的になる」、「わがままになる」をサブカテゴリとして加えた。また、保育士のインタビュー調査からの【祖父母の態度】に「お行儀や生活習慣を身につけさせている」があり、その内容に「おじいちゃん、おばあちゃんのほうがあいさつするように促していることが多い」が示されており、「お行儀がよくなる」、「生活習慣が身につく」、「あいさつができる」をサブカテゴリとして加えた。つまずきチェックシートの項目である「指示の理解が難しい」、「絵本を見ようとしない」においては、祖父母の個別的な関わりによる影響が考えられるため、サブカテゴリとして加えた。以上より、サブカテゴリを 17 とし、質問項目は 66 項目とした。

サブカテゴリごとの項目の内容としては (Table2-5)、《人との関わりが上手になる・甘え方が上手になる》では、「他の子どもたちから、だいたい好かれているようだ」(SDQ) 等の 11 項目とした。《コミュニケーションが上手になる》では、「あなたから話しかけた時、交互にやりとりが成立する意味の通った会話になる」(ASQ) 等の 6 項目とした。《心や情緒が豊かになる》では、「同年齢の子どもと同じくらいに、表情のレパートリーがある」(ASQ) 等の 3 項目とした。《協調性が養える》では、「自分の興味をもつものや楽しいことを他の人と共有しようとする」(広汎性発達障害児の社会性スクリーニング検査) の 1 項目とした。《相手の気持ちを考えられる・優しくなる》では、「怒られていても相手の気持ちが分からずケロッとしている」(CHEDY) 等の 11 項目とした。《社会的な遊びが養える》では、「みたて遊びやごっこ遊びをする」(ASQ) 等の 4 項目とした。《落ち着きがでてくる・心が安定する》では、「いつもそわそわしたり、もじもじしている」(SDQ) 等の 6 項目とした。《気持ちをコントロールできるようになる》では、「カッとなったり、かんしゃくをおこしたりする事がよくある」(SDQ) 等の 4 項目とした。《物の貸し借りができるようになる》では、「物の貸し借りができるようになる」(保育士のインタビュー調査) 等の 2 項目とした。《人の話が聞けるようになる》では、「素直で、だいたい大人のいうことをよく聞く」(SDQ) 等の 4 項目とした。《依存的になる》では、「依存的になる」(保育士のインタビュー調査) の 1 項目とした。《わがままになる》では、「ゲームや競争で一番にならないと気がすまない」(CHEDY) 等の 4 項目とした。《お行儀がよくなる》では、「お行儀がよくなる」(保育士のインタビュー調査) の 1 項目とした。《生活習慣が身につく》では、「おもちゃを正しい場所に片づけられない」(簡易版就学前幼児用 (4～6 歳) 発達障害チェック・リスト) 等の 5 項目とした。《あいさつができる》では、「あいさつができる」(保育士のインタビュー調査) の 1 項目とした。《指示の理解が難しい》では、「指示の理解が難しい」(つまずきチェックシート) の 1 項目とした。《絵本見ようとしない》では、「絵本を見ようとしない」(つまずきチェックシート) の 1 項目とした。質問項目にどの程度当てはまるかを、「全く当てはまらない」1 点、「あまり当てはまらない」2 点、「やや当てはまる」3 点、「非常に当てはまる」4 点の 4 段階で評定を求めた。

本質問紙は、肯定的な表現と否定的な表現が混在しており、低い得点が、児にとって

よいことを意味するものとした。肯定的な表現を逆転項目とし、以下に示す。「項目 1. 他の子どもたちから、だいたい好かれているようだ」、「項目 2. 他の子どもたちより、大人という方がうまくいくようだ」、「項目 3. 子どもの顔を見たり、笑いかけると、笑顔で反応する」、「項目 8. 仲の良い友だちが少なくとも一人はいる」、「項目 9. 他の子どもに興味がある」、「項目 12. あなたから話しかけた時、交互にやりとりが成立する意味の通った会話になる」、「項目 13. 『あのね』『それでね』と言いながら親しげに話しかけてくることがある」、「項目 14. 欲しいものがあったり、手伝って欲しかったりした時には、身ぶりや言葉を使って、相手の顔をきちんと見て、自分の思いを伝えることができる」、「項目 17. 同年齢の子どもと同じくらいに、表情のレパートリーがある」、「項目 18. よその人が微笑みかけると笑顔で返す」、「項目 20. 自分が興味をもつものや楽しいことを他の人と共有しようとする」、「項目 22. 他人の気持ちをよく気づかう」、「項目 23. あなたが悲しんだり痛がったりしていると慰めてくれる」、「項目 24. 誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり、嫌な思いをしているときなど、すすんで助ける」、「項目 25. 他の子どもたちと、よく分け合う」、「項目 26. 自分からすすんでよく他人を手伝う」、「項目 31. みたて遊びやごっこ遊びをする」、「項目 43. 物の貸し借りができるようになる」、「項目 45. 素直で、だいたい大人のいうことをよく聞く」、「項目 54. お行儀がよくなる」、「項目 60. あいさつができる」であった。質問紙は「祖父母と交流の有る発達障害児（疑い含む）」の場合と「祖父母と交流の無い発達障害児（疑い含む）」の場合の 2 種類とした。

Table 2-5 「祖父母との交流が発達障害児及び発達につまずきのある児への影響」のサブカテゴリに関連した尺度項目

| | |
|----|--|
| 項目 | 人との関わりが上手になる・甘え方が上手である |
| 1 | 他の子どもたちから、だいたい好かれているようだ(SDQ) |
| 2 | 他の子どもたちより、大人という方がうまくいくようだ(SDQ) |
| 3 | 子どもの顔を見たり、笑いかけると、笑顔で反応する(広汎性発達障害児の社会性スクリーニング検査) |
| 4 | 他の子どもとうまくかかわったり遊んだりしない(COQ-D) |
| 5 | 見知らぬ人に接することを極端にさける(COQ-D) |
| 6 | 知っている人にたいしても極端に恥ずかしがる(COQ-D) |
| 7 | 一人でいるのが好きで、一人で遊ぶことが多い(SDQ) |
| 8 | 仲の良い友だちが少なくとも一人はいる(SDQ) |
| 9 | 他の子どもに興味がある(広汎性発達障害児の社会性スクリーニング検査) |
| 10 | 同年代の子どもと比較して友達が少ない(簡易版就学前幼児期用(4~6歳)発達障害チェック・リスト) |
| 11 | 友だちを作ることに興味がない(COQ-D) |
| | コミュニケーションが上手になる |
| 12 | あなたから話しかけた時、交互にやりとりが成立する意味の通った会話になる(ASQ) |
| 13 | 「あのね」「それでね」と言いながら親しげに話しかけてくることがある(ASQ) |
| 14 | 欲しいものがあつたり、手伝って欲しかったりした時には、身ぶりや言葉を使って、相手の顔をきちんと見て、自分の思いを伝えることができる(CHEDY) |
| 15 | おしゃべりしすぎる(COQ-D) |
| 16 | 自分が知っていることやこだわっていることに関しては、相手を知っているかどうかにかままいなく一方的に話す(ASQ) |
| 17 | 適切な速さで話すことが難しい(たどたどしく話す。とても早口。)(つまずきチェックシート) |
| | 心や情緒が豊かになる |
| 18 | 同年齢の子どもと同じくらいに、表情のレパートリーがある(ASQ) |
| 19 | よその人が微笑みかけると笑顔で返す(ASQ) |
| 20 | 嬉しい時や悲しい時でも、あまり表情を変えない(CHEDY) |
| | 協調性が養える |
| 21 | 自分が興味をもつものや楽しいことを他の人と共有しようとする(広汎性発達障害児の社会性スクリーニング検査) |
| | 相手の気持ちを考えられる・優しくなる |
| 22 | 怒られていても相手の気持ちが分かってケロッとしている(CHEDY) |
| 23 | 他人の気持ちをよく気づかう(SDQ) |
| 24 | あなたが悲しんだり痛がったりしていると慰めてくれる(ASQ) |
| 25 | 誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり、嫌な思いをしているときなど、すすんで助ける(SDQ) |
| 26 | 他の子どもたちと、よく分け合う(おやつ・おもちゃ・鉛筆など)(SDQ) |
| 27 | 自分からすすんでよく他人を手伝う(親・先生・子どもたちなど)(SDQ) |
| 28 | よく他の子とけんかしたり、いじめたりする(SDQ) |
| 29 | ほかの人を嫌がらせることをわざとする(COQ-D) |
| 30 | ほかの人に怒りをぶつけたり仕返しをしたりする(COQ-D) |
| 31 | 他のひとの感情に無関心である(COQ-D) |
| 32 | いろいろな話をするが、その時の場面や相手の感情や立場を理解しない(つまずきチェックシート) |
| | 社会的な遊びが養える |
| 33 | みたくて遊びやごっこ遊びをする(ASQ) |
| 34 | 同年齢の子どもと、鬼ごっこやかくれんぼなど、ルールのある集団遊びができない(CHEDY) |
| 35 | 遊びに介入されることを嫌がる(IBC-R) |
| 36 | 人やテレビの動作のまねをしない(IBC-R) |

続く

Table 2-5 「祖父母との交流が発達障害児及び発達につまずきのある児への影響」のサブカテゴリに関連した尺度項目

| | 続き |
|----|--|
| 項目 | 落ち着きがでてくる・心が安定する |
| 37 | いつもそわそわしたり、もじもじしている(SDQ) |
| 38 | 落ち着きがなく、長い間じっとしていられない(SDQ) |
| 39 | 落ち着きがなく、手を離すとどこに行くかわからない(IBC-R) |
| 40 | 座っていなければならない状況で座り続けることができない(COQ-D) |
| 41 | 気が散りやすい(つまずきチェックシート) |
| 42 | 遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい(つまずきチェックシート) |
| | 気持ちをコントロールできるようになる |
| 43 | カッとなったり、かんしゃくをおこしたりする事がよくある(SDQ) |
| 44 | おちこんでずんでいたり、涙ぐんでいたりすることがよくある(SDQ) |
| 45 | 嫌なことを「やられた」と思った瞬間に、すぐに手が出てしまう(CHEDY) |
| 46 | 怒りっぽくほかのことで簡単にいらいらする(COQ-D) |
| | 物の貸し借りができるようになる |
| 47 | 物の貸し借りができるようになる(保育士のインタビュー調査より) |
| 48 | 自分の好きな物や興味のある物は一人で楽しんで、他の人に見せたりしない(簡易版就学前幼児期用(4～6歳)発達障害チェック・リスト) |
| | 人の話が聞けるようになる |
| 49 | 素直で、だいたい大人のいうことをよく聞く(SDQ) |
| 50 | 指示が終わる前に勝手に動き出す(簡易版就学前幼児期用(4～6歳)発達障害チェック・リスト) |
| 51 | 質問が終わっていないのに答えてしまう(COQ-D) |
| 52 | 話をさげぎって自分の考えを突然述べようとする(CHEDY) |
| | 依存的になる |
| 53 | 依存的になる(保育士のインタビュー調査より) |
| | わがままになる |
| 54 | ゲームや競争で一番にならないと気がすまない(CHEDY) |
| 55 | みんなの遊びに強引に割り込み、邪魔をする(簡易版就学前幼児期用(4～6歳)発達障害チェック・リスト) |
| 56 | グループ活動で順番が待ってられない(COQ-D) |
| 57 | 遊びで自分が負けそうになると、ルールを勝手に変える(CHEDY) |
| | お行儀がよくなる |
| 58 | お行儀がよくなる(保育士のインタビュー調査より) |
| | 生活習慣が身につく |
| 59 | おもちゃを正しい場所に片づけられない(簡易版就学前幼児期用(4～6歳)発達障害チェック・リスト) |
| 60 | 部屋の掃除や片づけができない(簡易版就学前幼児期用(4～6歳)発達障害チェック・リスト) |
| 61 | 食事の途中に席を離れる(簡易版就学前幼児期用(4～6歳)発達障害チェック・リスト) |
| 62 | 日中におしっこや便をもらしてしまう(COQ-D) |
| 63 | 夜寝る時間、覚醒(目を覚ます)時間が不規則である(IBC-R) |
| | あいさつができる |
| 64 | あいさつができる(保育士のインタビュー調査より) |
| | 指示の理解が難しい |
| 65 | 指示の理解が難しい(つまずきチェックシート) |
| | 絵本を見ようとしな |
| 66 | 絵本を見ようとしな(つまずきチェックシート) |

2) 質問紙調査

(1) 調査対象者

全国保育協議会より公開されている A 県の保育所 100 か所に勤務している保育士であった。

(2) 調査時期

平成 28 年 3 月

(3) 調査方法

A 県の保育所 100 か所に研究協力依頼の電話をした後、依頼文、質問票、返信用封筒を同封したものを 300 部郵送した。回収は、自由意思が尊重されるように、個別で返送するものとした。

(4) 調査内容

保育士の基本属性として、性別（男性、女性）、年齢（20 歳代、30 歳代、40 歳代、50 歳代、60 歳代、60 歳代以上）、保育士の経験年数、発達障害児に関する研修や勉強会の受講の有無、発達障害児及び発達につまずきのある児を担当した年数、児の祖父母との関わりの有無を調査した。また、祖父母との交流が発達障害児及び発達につまずきのある児に与える影響について、「祖父母との交流が孫（発達障害児または疑いを含む）に与える影響に関する質問紙」として本研究にて作成した質問紙であった。

(5) 分析方法

祖父母との交流の有無と「祖父母との交流が孫（発達障害児または疑いを含む）に与える影響に関する質問紙」の合計点、サブカテゴリ、各項目との関係性を検討するため、Mann-Whitney の U 検定を実施した。解析には統計解析ソフトには、統計パッケージ SPSS Statistics 19 を使用した。

なお、正の表現で回答を求めた項目については、逆転項目として修正し、集計した。

3. 研究結果

郵送した 300 部のうち回収数は 104 部であった(回収率 34.6%、有効回答率 94.0%)。発達障害児及び発達につまずきのある児の祖父母との関わりの有無では、有群 77 人 (77.0%)、無群 23 人 (23.0%) であった。

1) 保育士の属性 (Table 2-6)

性別は、「男性」0 人 (0%)、「女性」100 人 (96.2%)、「回答なし」4 人 (3.8%) であった。年齢は「20 歳代」27 人 (26.0%)、「30 歳代」27 人 (26.0%)、「40 歳代」29 人 (27.9%)、「50 歳代」16 人 (15.4%)、「60 歳代」1 人 (0.9%)、「70 歳代」1 名 (0.9%)、「回答なし」3 人 (2.9%) であった。就業年数は、「5 年未満」9 人 (8.6%)、「5 年以上 10 年未満」23 人 (22.1%)、「10 年以上 15 年未満」20 人 (19.2%)、「15 年以上 20 年未満」13 人 (12.5%)、「20 年以上 25 年未満」16 人 (15.4%)、「25 年以上」14 人 (13.6%)、「回答なし」9 人 (8.6%) であった。発達障害児及び発達につまずきのある児を担当した年数では、「1 年」19 人 (18.3%)、「2 年」17 人 (16.4%)、「3 年」17 人 (16.4%)、「4 年」9 人 (8.6%)、「5 年」8 人 (7.7%)、「6 年」3 人 (2.9%)、「7 年」3 人 (2.9%)、「8 年」2 人 (1.8%)、「9 年」0 人 (0%)、「10 年」3 人 (2.9%)、「11 年以上」4 人 (3.8%)、「回答なし」19 人 (18.3%) であった。発達障害児に関する研修や勉強会の受講の有無は、「有」86 人 (82.8%)、「無」10 人 (9.6%)、「回答なし」8 人 (7.7%) であった。

Table 2-6 保育士の属性

| | | n=104 |
|-----------------------|------------|-----------|
| 性別 | 男 | 0(0) |
| | 女 | 100(96.2) |
| | 回答なし | 4(3.8) |
| 年齢 | 20歳代 | 27(26.0) |
| | 30歳代 | 27(26.0) |
| | 40歳代 | 29(27.9) |
| | 50歳代 | 16(15.4) |
| | 60歳代 | 1(0.9) |
| | 70歳以上 | 1(0.9) |
| | 回答なし | 3(2.9) |
| 就業年数 | 5年未満 | 9(8.6) |
| | 5年以上10年未満 | 23(22.1) |
| | 10年以上15年未満 | 20(19.2) |
| | 15年以上20年未満 | 13(12.5) |
| | 20年以上25年未満 | 16(15.4) |
| | 25年以上 | 14(13.6) |
| | 回答なし | 9(8.6) |
| 発達障害児または疑いのある児を担当した年数 | 1年 | 19(18.3) |
| | 2年 | 17(16.4) |
| | 3年 | 17(16.4) |
| | 4年 | 9(8.6) |
| | 5年 | 8(7.7) |
| | 6年 | 3(2.9) |
| | 7年 | 3(2.9) |
| | 8年 | 2(1.8) |
| | 9年 | 0(0) |
| | 10年 | 3(2.9) |
| | 11年以上 | 4(3.8) |
| | 回答なし | 19(18.3) |
| 研修等の受講経験 | 有 | 86(82.8) |
| | 無 | 10(9.6) |
| | 回答なし | 8(7.7) |

単位:人(%)

2)「祖父母との交流が孫(発達障害児または疑いを含む)に与える影響に関する質問紙」と祖父母との交流の有無との関係について

祖父母との交流の有群と無群の合計点及びサブカテゴリについて、Mann-Whitney の U 検定を実施した (Table2-7)。合計点 ($p<.01$) では、交流有群において有意に低い結果であった。サブカテゴリでは、《人との関わりが上手になる・甘え方が上手になる》 ($p<.01$)、《心や情緒が豊かになる》 ($p<.01$)、《相手の気持ちが考えられる・優しくなる》 ($p<.01$)、《あいさつができる》 ($p<.05$) について、交流有群において有意に低い結果であった。また、《依存的になる》 ($p<.10$)、《絵本を見ようとしない》 ($p<.10$) では、交流有群において有意に低い傾向であった。

次に本質問紙の各項目について述べる。祖父母との交流の有無が児にとって影響が示唆された項目が 66 項目中 16 項目であった。以下、これを示す (Table2-8)。

祖父母との交流有群において、《人との関わりが上手になる・甘え方が上手になる》のサブカテゴリである「項目 4.他の子どもとうまくかかわって遊んだりしない」 ($p<.05$)、
「項目 7.一人でいるのが好きで、一人で遊ぶことが多い」 ($p<.01$)、「項目 11.友だちを作ることに興味がない」 ($p<.05$) の 3 項目が有意に低い結果であった。《心や情緒が豊かになる》のサブカテゴリでは、「項目 20.嬉しい時や悲しい時でも、あまり表情を変えない」 ($p<.01$) の 1 項目が有意に低い結果であった。《相手の気持ちが考えられる》のサブカテゴリでは、「項目 22.怒られていても相手の気持ちが分からずケロッとしている」 ($p<.01$)、「項目 31.他のひとの感情に無関心である」 ($p<.05$) の 2 項目が有意に低い結果であった。《落ち着きがでてくる・心が安定する》のサブカテゴリでは、「項目 42.遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい」 ($p<.05$) の 1 項目が有意に低い結果であった。《依存的になる》のサブカテゴリでは、「項目 53.依存的になる」 ($p<.10$) の 1 項目が有意差はないが低い傾向であった。《わがままになる》のサブカテゴリでは、「項目 56.グループ活動で順番が待てない」 ($p<.10$) の 1 項目が有意差はないが低い傾向であった。《生活習慣が身につく》のサブカテゴリでは、「項目 63.夜寝る時間、覚醒（目を覚ます）時間が不規則である」 ($p<.10$) の 1 項目が有意差はないが低い傾向であった。《あいさつができる》のサブカテゴリでは、「項目 64.あいさつができる」の 1 項目が有意に低い結果であった。《絵本を見ようとしない》では、「項目 66.絵本を

見ようとしなない」($p<.10$)が有意に低い傾向であった。

交流無群においては、《人との関わりが上手になる・甘え方が上手になる》のサブカテゴリである「項目 3.子どもの顔を見たり、笑いかけると笑顔で反応する」($p<.01$)、「項目 9.他の子どもに興味がある」($p<.01$)の2項目が有意に低い結果であった。《心や情緒が豊かになる》のサブカテゴリでは、「項目 18.同年齢の子どもと同じくらいに、表情のレパートリーがある」($p<.05$)、「項目 19.よその人が微笑みかけると笑顔で返す」($p<.01$)の2項目が有意に低い結果であった。

Table 2-7

「祖父母との交流が孫（発達障害児または疑いを含む）に与える影響に関する質問紙」
の合計点及びサブカテゴリと祖父母との交流の有無との関係

| | | 祖父母との交流 有(77名) 無(23名) | 平均値 | 標準偏差 | Mann- Whitney のU検定 |
|--|-----------------|--------------------------|--------|--------|--------------------------|
| 質問紙の合計点 | | 有 | 161.73 | 22.69 | .00 ** |
| | | 無 | 178.52 | 22.218 | |
| サブ カテ ゴリ | 人との関わりが上手になる | 有 | 24.86 | 5.01 | .00 ** |
| | 甘え方が上手になる | 有 | 28.46 | 5.93 | |
| | コミュニケーションが上手になる | 有 | 15.05 | 2.58 | .13 |
| | | 無 | 15.33 | 3.36 | |
| | 心や情緒が豊かになる | 有 | 6.54 | 1.97 | .00 ** |
| | | 無 | 8.42 | 2.24 | |
| | 協調性が養える | 有 | 2.59 | .94 | .16 |
| | | 無 | 2.83 | .96 | |
| | 相手の気持ちが考えられる | 有 | 28.91 | 5.52 | .00 ** |
| | 優しくなる | 有 | 31.74 | 4.49 | |
| | 社会的な遊びが養える | 有 | 9.59 | 2.21 | .74 |
| | | 無 | 9.88 | 2.66 | |
| | 落ち着きがでてくる | 有 | 17.45 | 4.24 | .13 |
| | 心が安定する | 有 | 18.87 | 3.72 | |
| | 気持ちのコントロールができる | 有 | 9.01 | 3.17 | .54 |
| | ようになる | 有 | 9.33 | 3.42 | |
| | 物の貸し借りができる | 有 | 4.97 | 1.26 | .61 |
| | | 無 | 4.75 | 1.48 | |
| | 人の話が聞けるようになる | 有 | 10.26 | 2.93 | .71 |
| | | 無 | 9.79 | 3.24 | |
| | 依存的になる | 有 | 2.35 | .93 | .09 [†] |
| | | 無 | 2.71 | 1.04 | |
| | わがままになる | 有 | 8.95 | 3.23 | .48 |
| | | 無 | 9.25 | 3.53 | |
| | お行儀がよくなる | 有 | 3.27 | .68 | .37 |
| | | 無 | 3.33 | .92 | |
| | 生活習慣が身につく | 有 | 10.75 | 3.08 | .18 |
| | | 無 | 11.67 | 4.23 | |
| | あいさつができる | 有 | 1.91 | .91 | .02 * |
| | | 無 | 2.33 | .92 | |
| | 指示の理解が難しい | 有 | 2.99 | .87 | .16 |
| | | 無 | 3.21 | .98 | |
| | 絵本を見ようとししない | 有 | 2.09 | .89 | .09 [†] |
| | | 無 | 2.46 | .93 | |
| Mann-WhitneyのU検定 [†] $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ | | | | | |

Table 2-8 「祖父母との交流が孫（発達障害児または疑いを含む）に与える影響に関する質問紙」の各項目と祖父母との交流の有無との関係

| サブカテゴリ | 項目 | 内容 | 祖父母との交流 | | 平均値 | 標準偏差 | Mann-Whitney |
|------------------------|----|---|---------|--------|--------------|--------------|--------------|
| | | | 有(77名) | 無(23名) | | | |
| 人との関わりが上手になる・甘え方が上手になる | 1 | 他の子どもたちから、だいたい好かれているようだ | 有 無 | | 2.64 2.42 | .72 .83 | .21 |
| | 2 | 他の子どもたちより、大人という方がうまくいくようだ | 有 無 | | 2.94 3.00 | .75 .88 | .67 |
| | 3 | 子どもの顔を見たり、笑いかけると笑顔で反応する | 有 無 | | 3.19 2.54 | .73 .78 | .00** |
| | 4 | 他の子どもとうまくかかわって遊んだりしない | 有 無 | | 2.58 3.00 | .79 .88 | .04* |
| | 5 | 見知らぬ人に接することを極端にさける | 有 無 | | 2.10 2.25 | .92 .79 | .35 |
| | 6 | 知っている人にたいしても極端に恥ずかしがる | 有 無 | | 1.74 2.09 | .85 .95 | .18 |
| | 7 | 一人でいるのが好きで、一人で遊ぶことが多い | 有 無 | | 2.59 3.22 | .95 .74 | .01** |
| | 8 | 仲の良い友だちが少なくとも一人はいる | 有 無 | | 2.65 2.30 | 1.01 1.15 | .30 |
| | 9 | 他の子どもに興味がある | 有 無 | | 3.15 2.57 | .80 .84 | .01** |
| | 10 | 同年代の子どもと比較して友達が少ない | 有 無 | | 2.96 3.39 | .97 .72 | .14 |
| | 11 | 友だちを作ることに興味がない | 有 無 | | 2.46 3.04 | .97 .82 | .03* |
| コミュニケーションが上手になる | 12 | あなたから話しかけた時、交互にやりとりが成立する意味の通った会話になる | 有 無 | | 2.49 2.35 | .90 .88 | .74 |
| | 13 | 「あのね」「それでね」と言いながら親しげに話しかけてくることがある | 有 無 | | 2.63 2.43 | 1.04 1.08 | .68 |
| | 14 | 欲しいものがあつたり、手伝って欲しかったりした時には、身ぶりや言葉を使って、相手の顔をきちんと見て、自分の思いを伝えることができる | 有 無 | | 2.44 2.17 | .88 .76 | .23 |
| | 15 | おしゃべりしすぎる | 有 無 | | 2.43 2.52 | 1.02 .95 | .97 |
| | 16 | 自分が知っていることやこだわっていることに関しては、相手が知っているかどうかにかまわず一方的に話す（それ以外の話は受けつけない） | 有 無 | | 2.55 2.26 | .99 1.01 | .11 |
| | 17 | 適切な速さで話すことが難しい（たどたどしく話す。とても早口。） | 有 無 | | 2.65 3.04 | .98 .93 | .16 |
| | 18 | 同年齢の子どもと同じくらいに、表情のレパートリーがある | 有 無 | | 2.60 2.13 | .91 .95 | .03* |
| 心やに情緒が豊かな | 19 | よその人が微笑みかけると笑顔で返す | 有 無 | | 2.76 2.13 | .83 .80 | .00** |
| | 20 | 嬉しい時や悲しい時でも、あまり表情を変えない | 有 無 | | 1.90 2.67 | .84 .96 | .00** |
| | 21 | 自分が興味をもつものや楽しいことを他の人と共有しようとする | 有 無 | | 2.41 2.04 | .94 .77 | .16 |
| 相手の気持ちが考えられる・優しくなる | 22 | 怒られていても相手の気持ちが分らずケロッとしている | 有 無 | | 2.61 3.21 | .97 .83 | .00** |
| | 23 | 他人の気持ちをよく気づかう | 有 無 | | 1.83 1.70 | .76 .63 | .79 |
| | 24 | あなたが悲しんだり痛がったりしていると慰めてくれる | 有 無 | | 2.54 2.09 | .79 .85 | .06 |
| | 25 | 誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり、嫌な思いをしているときなど、すすんで助ける | 有 無 | | 2.09 1.74 | .81 .62 | .15 |
| | 26 | 他の子どもたちと、よく分け合う（おやつ・おもちゃ・鉛筆など） | 有 無 | | 1.80 1.78 | .66 .60 | .76 |
| | 27 | 自分からすすんでよく他人を手伝う（親・先生・子どもたちなど） | 有 無 | | 1.86 1.70 | .78 .56 | .70 |
| | 28 | よく他の子とけんかしたり、いじめたりする | 有 無 | | 2.13 2.17 | 1.06 1.11 | .87 |
| | 29 | ほかの人を嫌がらせることをわざとする | 有 無 | | 2.10 2.35 | 1.05 1.07 | .48 |
| | 30 | ほかの人に怒りをぶつけたり仕返しをしたりする | 有 無 | | 2.23 2.26 | 1.11 1.14 | .84 |
| | 31 | 他のひとの感情に無関心である | 有 無 | | 2.46 3.00 | .94 .90 | .03* |
| | 32 | いろいろな話をするが、その時の場面や相手の感情や立場を理解しない | 有 無 | | 2.42 2.70 | 1.08 1.06 | .28 |

Mann-WhitneyのU検定 * $p < .10$ ** $p < .05$ *** $p < .01$

続く

Table 2-8 「祖父母との交流が孫（発達障害児または疑いを含む）に与える影響に関する質問紙」の各項目と祖父母との交流の有無との関係

| サブカテゴリ | 項目 | 内容 | 祖父母との交流 | | 平均値 | 標準偏差 | Mann-Whitney |
|---------------------------------|----|---------------------------------------|---------|--------|--------------|--------------|--------------|
| | | | 有(77名) | 無(23名) | | | |
| 社会的養育が 養える遊 びが | 33 | みたく遊びやごっこ遊びをする | 有 無 | 有 無 | 2.45 2.43 | .98 .90 | .80 |
| | 34 | 同年齢の子どもと、鬼ごっこやかくれんぼなど、ルールのある集団遊びができない | 有 無 | 有 無 | 2.84 3.13 | .97 .87 | .36 |
| | 35 | 遊びに介入されることを嫌がる | 有 無 | 有 無 | 2.24 2.43 | .83 .90 | .70 |
| | 36 | 人やテレビの動作のまねをしない | 有 無 | 有 無 | 1.96 2.08 | .83 .78 | .41 |
| 落ち着 きがで てくる 心が安 定する | 37 | いつもそわそわしたり、もじもじしている | 有 無 | 有 無 | 2.59 2.61 | 1.00 .89 | .80 |
| | 38 | 落ち着きがなく、長い間じっとしてられない | 有 無 | 有 無 | 3.26 3.42 | .89 .72 | .55 |
| | 39 | 落ち着きがなく、手を離すとどこに行くかわからない | 有 無 | 有 無 | 2.60 3.00 | 1.00 .80 | .17 |
| | 40 | 座っていなければならない状況で座り続けることができない | 有 無 | 有 無 | 3.00 3.25 | .95 .94 | .20 |
| | 41 | 気が散りやすい | 有 無 | 有 無 | 3.31 3.35 | .75 .71 | .88 |
| | 42 | 遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい | 有 無 | 有 無 | 2.70 3.13 | .89 .87 | .04** |
| 口気持 ようル ちがの でコン タクト | 43 | カッとなったり、かんしゃくをおこしたりする事がよくある | 有 無 | 有 無 | 2.54 2.71 | 1.09 1.08 | .51 |
| | 44 | おちこんでしずんでいたり、涙ぐんでいたりすることがよくある | 有 無 | 有 無 | 1.88 2.04 | .81 .71 | .47 |
| | 45 | 嫌なことを「やられた」と思った瞬間に、すぐに手が出てしまう | 有 無 | 有 無 | 2.40 2.29 | 1.11 1.12 | .67 |
| | 46 | 怒りっぽくほかのことで簡単にいらいらする | 有 無 | 有 無 | 2.19 2.48 | .98 1.16 | .48 |
| 物の貸し 借りが できる | 47 | 物の貸し借りができるようになる | 有 無 | 有 無 | 2.31 2.30 | .83 .70 | .66 |
| | 48 | 自分の好きな物や興味のある物は一人で楽しんで、他の人に見せたりしない | 有 無 | 有 無 | 2.29 2.26 | .86 .75 | .76 |
| 人の話 が聞 ける | 49 | 素直で、だいたい大人のいうことをよく聞く | 有 無 | 有 無 | 2.51 2.26 | .70 .86 | .27 |
| | 50 | 指示が終わる前に勝手に動き出す | 有 無 | 有 無 | 2.82 2.87 | .90 .69 | .80 |
| | 51 | 質問が終わっていないのに答えてしまう | 有 無 | 有 無 | 2.44 2.26 | 1.11 1.05 | .31 |
| | 52 | 話をさえぎって自分の考えを突然述べようとする | 有 無 | 有 無 | 2.51 2.35 | 1.12 1.07 | .36 |
| 依存的になる | 53 | 依存的になる | 有 無 | 有 無 | 2.35 2.83 | .93 .89 | .09† |
| わがま まにな る | 54 | ゲームや競争で一番にならないと気がすまない | 有 無 | 有 無 | 2.08 2.22 | 1.09 1.24 | .99 |
| | 55 | みんなの遊びに強引に割り込み、邪魔をする | 有 無 | 有 無 | 2.29 2.43 | 1.00 1.04 | .79 |
| | 56 | グループ活動で順番が待ってられない | 有 無 | 有 無 | 2.66 3.13 | .97 1.01 | .08† |
| | 57 | 遊びで自分が負けそうになると、ルールを勝手に変える | 有 無 | 有 無 | 1.92 1.87 | 1.00 1.06 | .49 |
| お行儀がよ くなる | 58 | お行儀がよくなる | 有 無 | 有 無 | 1.73 1.52 | .68 .59 | .37 |
| 生活習 慣が身 につく | 59 | おもちゃを正しい場所に片づけられない | 有 無 | 有 無 | 2.18 2.39 | .82 .89 | .44 |
| | 60 | 部屋の掃除や片づけができない | 有 無 | 有 無 | 2.44 2.57 | .90 .99 | .78 |
| | 61 | 食事の途中に席を離れる | 有 無 | 有 無 | 2.12 2.33 | 1.06 1.13 | .40 |
| | 62 | 日中におしっこや便をもらしてしまう | 有 無 | 有 無 | 1.88 2.13 | 1.06 1.18 | .60 |
| | 63 | 夜寝る時間、覚醒（目を覚ます）時間が不規則である | 有 無 | 有 無 | 2.13 2.54 | .91 1.06 | .09† |
| あいさつがで きる | 64 | あいさつができる | 有 無 | 有 無 | 1.91 2.33 | .91 .79 | .02** |
| 指示の理解が 難しい | 65 | 指示の理解が難しい | 有 無 | 有 無 | 2.99 3.35 | .87 .71 | .16 |
| 絵本をみよう としない | 66 | 絵本を見ようとしな | 有 無 | 有 無 | 2.09 2.46 | .89 .93 | .09† |

Mann-WhitneyのU検定 † $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

4. 考察

1) 対象者の概要について

研究への協力が得られた保育士は、「20 歳代」から「70 歳代」の幅広い年齢層であった。保育士の就業年数は「5 年以上 10 年未満」23 人（22.1%）が最も多く、次いで「10 年以上 15 年未満」20 人（19.2%）であった。保育士が発達障害児及び発達につまずきのある児を担当した年数は、「1 年」19 人（18.3%）が最も多く、次いで「2 年」、「3 年」が 17 人（16.4%）であり、合わせると担当年数 1 年～3 年が約 5 割であった。また、約 8 割以上の保育士が発達障害児に関する研修や勉強会の受講の経験があった。全国の保育所の 6 割以上が障害児を受け入れており（厚生労働省，2015 b）、また、乳幼児健康診査にて発達等に問題があった児のフォロー機関として、全国の市町村の約 8 割が保育所と連携をしている状況がある（日本臨床心理士会，2014）。保育所における集団場面での直接支援の必要性が高まっており、本研究においても保育士の研修や勉強会等の必要性の高まりが伺えた。

2) 「祖父母との交流が孫(発達障害児または疑いを含む)に与える影響に関する質問紙」と祖父母との交流の有無との関係について

本研究は、保育士へのインタビュー調査により得られた「祖父母との日常的交流における発達障害児及び発達につまずきのある児への影響」（Table 2-2）のサブカテゴリ及びその内容を、実証的に明らかにすることを目的に、質問紙を作成し、調査した。その結果、本質問紙の合計点において、祖父母との交流の有群に正の影響が示唆された。つまり全体的には概ね祖父母との交流は良いとの結果であったと考えられる。

長峰ら（2011）は、高機能広汎性発達障害は、主特徴として、「社会的相互作用の障害」、「コミュニケーションの障害」、「想像力の障害」の 3 つがあり、特に社会性（対人関係を形成し、維持する能力）の発達において困難さが目立つ障害であると述べている。祖父母との交流により、児に正の影響があったサブカテゴリの中に、《社会的な遊びが養われる》は入ってなかった。しかし《人との関わりが上手になる・甘え方が上手になる》、《相手の気持ちが考えられる・優しくなる》は入っていた。また項目では、「項目 4.他の子どもとうまくかかわって遊んだりしない」、「項目 21.怒られていても相手の気

持ちが分からずケロッとしている」等の友人等の関係において、正の影響が認められた。以上のように、人との関わりが上手になることや相手の気持ちを考えることは、対人関係の形成、維持に必要な要素であると考ええる。つまり、祖父母の交流が児の社会性に関連することについては、いい影響を与える可能性があるのではないかと考えられる。また、《あいさつができる》ことは、相手への印象をよくし、相互の関わりやすさにつながる事が考えられ、社会的相互作用の障害においてもいい影響が期待できる。

Adrien ら（1993）は、自閉症児は健常児と比べて、感情表出の欠如があることを示している。しかし、本研究より祖父母との交流が《心や情緒が豊かになる》となり、嬉しい時や悲しい時に感情表出ができることに繋がる事が期待できる。また、本研究の結果より、祖父母との交流が、絵本を見ることへ繋がる可能性が示唆された。近藤ら（2008）は、5歳前後の発達障害児に対して継続的に絵本の読み聞かせを実践した結果、感情の表出が豊かになったことを報告している。祖父母が孫と絵本を見る行為が、感情の表出に関連している可能性がある。また、絵本を見る行為は、学習障害の読みの障害にも正の影響が期待できるのではないかと考える。つまり、祖父母が、児に絵本を読み聞かせていくことで、早期から絵本の字に親しむことに繋がり、それが読むという行為に影響を及ぼすのではないかと考える。しかし、「項目 3.子どもの顔を見たり、笑いかけると笑顔で反応する」、「項目 17.同年齢の子どもと同じくらい表情のレパートリーがある」、「項目 18.よその人が微笑みかけると笑顔で返す」などのような友好性の高い表現は、祖父母との交流の影響は期待できないことが考えられる。

本調査では、孫の祖父母に対する依存性は確認できなかった。そして、グループ活動での順番を待つこと、遊びや余暇活動におとなしく参加することは、多動性障害に関することであり、祖父母の交流が多動性障害に対して、正の影響を示す可能性があることが考えられる。さらに夜寝る時間や覚醒（目を覚ます）時間など、生活リズムを整える関わりにおいても、祖父母の影響の可能性が示唆された。保育士のインタビュー調査で得られた【祖父母の態度】において、《送迎の援助をしている》ことが示されており、このことが、生活リズムを整えることにも繋がると考える。

5. 結語

第2節で得られた「祖父母との日常的交流における発達障害児及び発達につまずきのある児への影響」(Table2-2)のサブカテゴリの内容を実証的に明らかにするため、「祖父母との交流が孫(発達障害児または疑いを含む)に与える影響に関する質問紙」を作成し、300名の保育士に調査した。その結果、概ね祖父母との交流は良いとの結果が得られた。また、祖父母との交流において正の影響が示唆されることは、「人との関わりが上手になる・甘え方が上手になる」、「心や情緒が豊かになる」、「依存的になる」、「あいさつができる」、「絵本を見る」であった。

第3章では、より詳細に発達障害のスクリーニング調査表である「チェックシートⅢ つまずきチェックシート」(幼稚園用)を用い、児の特徴と祖父母との交流の有無との関係を検討する。

引用文献

- Adrien, J. L., Lenoir, P., Martineau, J., Perrot, A., Hameury, L., Larmande, C., & Sauvage, D (1993) Blind ratings of early symptoms of autism based upon family home movies. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 32, 617-626
- 綾屋紗月, 熊谷晋一郎 (2008) 発達障害当事者研究ゆっくりていねいにつなりたい, 医学書院, 101-124
- Berument, S. K., Rutter, M., Lord, C., Pickles, A., Bailey, A. (1999) Autism screening questionnaire: diagnostic validity, *British Journal of Psychiatry*, 175, 444-451
- Goodman, R. (1997) The Strengths and Difficulties : A Research Note, *Journal Child Psychology and Psychiatry*, 38 (5), 581-586
- Goodman, R. (2001) Psychometric properties of the Strengths and Difficulties Questionnaire. *Journal Am Acad Child Adolesc Psychiatry*, 42, 1337-1345
- 郷間英世, 圓尾奈津美, 宮路知美, 池田友美, 郷間安美子 (2008) 幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究, 京都教育大学紀要, 113, 81-89
- 原口英之, 野呂文行, 神山努 (2013) 保育所における特別な配慮を要する子どもに対する支援の実態と課題－障害の診断の有無による支援の比較－, *障害科学研究*, 37, 103-114
- 本田浩子, 斉藤恵美子 (2016) 発達障害者の親の負担感に関連する要因の検討, *日本公衆衛生雑誌*, 63 (5), 252-259
- 本田千草, 黒田吉考 (2008) 高機能自閉症発達障害者の就学前から青年期までの発達・障害の理解と支援 (その 2) －当事者へのアンケートとインタビューによる検討－, *滋賀大学教育学部紀要教育科学*, 58, 123-138
- 兵庫県 (2011) 兵庫県高齢者居住安定確保計画,
web.pref.hyogo.jp/ks26/keikaku/documents/010kourei_honbun.pdf (アクセス日 2015 年 5 月 19 日)

- 今野和夫（2003）通園施設における障害のある子どもの祖父母に対する支援，秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，25，39-52
- 今野和夫（2009）発達障害者支援センターにおける祖父母支援－センターへの質問紙調査を通して－，秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，31，61-74
- 石井邦子，荒木暁子，小池幸子，市原真穂，水野芳子，佐藤紀子，林ひろみ，北川良子，小澤治美（2014）育児上特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の体験，千葉看会誌．20（1），3-10
- 角川志穂（2009）子育て支援に向けた祖父母学級導入の検討，母性衛生，50（2），300-309
- 金井智恵子，長田洋和，小山智則，栗田広（2004）広汎性発達障害スクリーニング尺度としての乳幼児行動チェックリスト改訂版（IBC-R）の有用性の検討，臨床精神医学，33（3），313-321
- 近藤文里，辻元千佳子（2008）絵本の読み聞かせに関する基礎研究と ADHD 児教育への応用（5）－発達障害児への継続的な読み聞かせ実践－，滋賀大学教育学部紀要教育科学，58，1-15
- 厚生労働省（2005）発達障害者支援法について，
<http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0412-1e.html>（アクセス日 2015 年 12 月 18 日）
- 厚生労働省（2015b）現状・課題と検討の方向性（1）障害児支援について（2）その他の障害福祉サービスの在り方等について，
http://www.mhlw.go/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukastukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/000010358.pdf（アクセス日 2017 年 6 月 12 日）
- 丸山啓史（2013），障害児の母親の就労と祖父母による援助，京都教育大学紀要．122，87-100
- 松尾里香，斎藤ひさ子，中河亜希（2014）内的ワーキング・モデル変容からとらえる孫の誕生による祖母の発達を構成する因子，母性衛生，55（2），444-453
- 宮崎雅仁，西村美緒，村川和義，森健治，橋本俊顕（2014）プライマリケアに活用できる簡易版就学前幼児（4～6 歳）用発達障害チェック・リスト作成の試み，小児の精神

と神経, 53 (4), 333-341

森司朗, 伊藤英夫, 溝口綾子, 平川忠敏 (2002) 自閉症児の対人関係の発達に関する研究—幼稚園での自由遊び場面を通して—, 東京学芸大学紀要第1部門, 53, 53-73

永田雅子, 佐野さやか (2013) 自閉症スペクトラム障害が疑われる2歳児の母親の精神的健康と育児ストレスの検討, 小児の精神と神経, 53 (3), 203-209

長峰信治, 加藤麻登佳, 辻井正次 (2011) 定型発達児・者との比較による高機能広汎性発達障害児・者の対人交渉方略の検討, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 19, 27-40

内閣府 (2014) : 家族と地域における子育てに関する意識調査報告書,

http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/reseach/h25/ishiki/index_pdf.html (アクセス日 2016年6月7日)

夏堀撰 (2001) 就学前期における自閉症児の母親の障害受容過程, 特殊教育学研究, 39 (3), 11-22

日本臨床心理士会 (2014) 乳幼児健診における発達障害に関する市町村調査 報告書

<http://www.jscop.jp/suggestion/sug/pdf/kenshinhoukoku140702.pdf> (アクセス日 2017年6月22日)

小野次朗, 庄司清弥 (2012) 通常学級に在籍する発達障害のある児童への早期気づき—「気づきのポイントシート」作成の試みを通して—, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 22, 177-181

尾崎康子, 小林真, 水内豊和, 阿部美穂子 (2010) 幼児用発達障害スクリーニング尺度の検討, 相模女子大学紀要, C, 社会系, 74, 79-88

尾崎康子, 小林真, 水内豊和, 阿部美穂子 (2012) 幼児用発達障害チェックリスト (CHEDY) による高機能広汎性発達障害の識別性に関する検討, 相模女子大学紀要, C, 社会系, 76, 91-101

塩川宏郷 (2006) 発達障害児の包括的アウトカム質問票 (Comprehensive Outcome Questionnaire for Development disorder, COQ-D) の作成: 健常児を対象とした項目および信頼性の検討, 自治医科大学紀要, 29, 29-40

杉山登志郎 (2007) 発達障害の子どもたち, 講談社, 東京, 26-50・

- 諏澤宏恵（2013a）日米の実証研究にみる祖父母－孫関係の発達的变化：祖父母・親・孫のライフステージを単位とした検討，人間文化研究科年報 28，121-131
- 諏澤宏恵（2013b）祖父母の世代間調整役割に関する考察－青年期の女子の孫を対象とした質問紙調査をもとに－，小児保健研究，72（2），322-329
- 武井祐子，高尾堅司，寺崎正治（2012）広汎性発達障害児の社会性スクリーニング検査作成の試み－養育者と保健師の評価の違いからの検討－，川崎医療福祉学会誌，22（1），31-36
- 徳島県教育委員会（2006）通常の学級に在籍している特別な支援を必要とする子どものチェックシート
- <http://www.tokushima-ec.ed.jp>（アクセス日 2017 年 6 月 12 日）
- 津間文子，笠浪欣子，中元万由美，四宮美佐恵（2010）祖母の孫育ての現状－祖母の収入に伴う仕事の有無との関係性－，母性衛生，51（3），148
- 上村眞生，岡花祈一郎，若林紀乃，松井剛太，七木田敦（2007）世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究，幼年教育年報，9，65-71
- 山田陽子（2010）療育機関に通う自閉症スペクトラム児をもつ母親の育児ストレスに関する研究，川崎医療福祉学会誌，20（1），165-178

第3章 研究2：発達障害児及び発達につまずきのある児の特徴 と祖父母との関わりによる関連 — つまずきチェックシートを用いて —

第1節 研究の背景と目的

近年、特別支援学校や特別支援学級に在籍している児童生徒が増加する傾向にあり、2002年での調査では、学習や生活面で特別な教育的支援を必要とする学習障害、注意欠陥多動性障害、高機能自閉症等の発達障害の可能性のある児童生徒が、通常の学級に約6.3%在籍していると報告されたが（文部科学省，2003a）、2012年の調査では、6.5%に増加した（文部科学省，2012b）。これらの調査は、学習面については学習障害に関するチェックリスト LDDI（Learning Disabilities Diagnostic Inventory）及び LDI（Learning Disabilities Inventory）を参考に、行動面（「不注意」「多動性—衝動性」）については ADHD に関するチェックリスト ADHD-RS（ADHD Rating Scale）を参考に、行動面（「対人関係やこだわり等」）については、ASSQ（High-Function Autism Spectrum Screening Questionnaire）を参考に、質問項目が作成され、調査された。文部科学省は、これらの結果から、「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」における判断基準（試案）を作成した（文部科学省，2012）。これを参考に徳島県教育委員会は、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、高機能自閉症等が疑われることにより、学びにくさやつまずきのある子どもをチェックし、早期に発見し、対応を考えることを目的として、チェックシート（改訂徳島版）を作成した（徳島県教育委員会，2006）。チェックシートは、「チェックシートⅠ気になる子はいませんか！」、「チェックシートⅡ気づきチェックシート」、「チェックシートⅢつまずきチェックシート（幼稚園用、小・中・高校生用）」の3種類あり、気になる子どもをチェックし、発達段階のどこにつまずきがあるかを調査できるものである。

発達障害を、生得的障害と捉えるならば、幼稚園や保育所といった保育現場でも在籍していることが考えられる。実際、原口ら（2013）は、年少人口、合計特殊出生率が概ね全国平均値である地域の421か所の保育所に調査した結果、障害のある子どもや、「対

人的トラブル」、「落ち着きのなさ」などの特徴を示す「気になる子」は公立保育所、私立保育所共に 9 割を超えて在籍していたことを報告した。さらに、郷間ら（2008）の調査によると、「気になる子」の在籍は、障害の診断を受けている児よりも約 3.5 倍多いことが明らかになっており、発達障害もしくはその疑いがある乳幼児への支援の必要性が高まっていると考える。

乳幼児期の子育ての支援者として、祖父母の存在がある。孫と祖父母との交流について、保育所に通う孫を持つ祖父母を対象にした調査では、保育所への送迎、食事などの世話や孫の遊び相手として、半数以上の祖父母が豊富な孫育てを経験していることを報告している（山崎ら，2004）。孫にとって祖父母の存在は、親から叱られた時の逃げ場や情緒の安定を求める「安全基地」としての役割を持つとされている（前原ら，2000；福島，2005）。また祖父母との関わりは、幼少時の孫の人格形成や情緒的な発達によい影響を及ぼし（諏澤，2013a）、祖父母の優しさや微笑みなどのあたたかい態度は孫の社交性に影響を与えることが報告されている（諏澤，2013b）。さらに、他者への思いやり、コミュニケーションスキルの発達に寄与することが報告されている（上村ら，2007）。そこで祖父母と交流することにより、幼児期の発達障害児に何らかの影響があるのではないかと考えたが、それらに関する先行研究はみられなかった。

本章の研究の目的は、発達障害児及び発達につまずきのある児が祖父母と日常的に交流することによって、双方が受ける影響について、調査し検討することである。予備調査にて、チェックシートⅢつまずきチェックシート[幼稚園用]（以下つまずきチェックシート）を用いて、小規模に保育士への聞き取り調査をする。予備調査にて、祖父母と日常的に交流することによる影響が示唆された場合、統計的に信頼性を高めるために、対象地域、サンプル数を拡大し、本調査を行う。

第2節 予備調査

1. 目的

つまずきチェックシートにて、発達障害児及び発達につまずきのある児の特徴と祖父母との関わりによる関連性を探る。

2. 研究方法

1) 調査対象者

全世帯の5割近い世帯が、同居あるいは近隣に祖父母が居住しており(兵庫県, 2011)、比較的祖父母との日常的交流が多いと考えられる地域の保育所6か所とし、発達障害児及び発達につまずきや気になる子どもを受け持った経験を有する保育士35人に調査を依頼した。

2) 調査期間

平成25年8月～平成26年8月

3) 調査方法

面接調査をした。6か所の保育所入所児644人中37人が発達障害児及び発達につまずきのある児として保育士より選出された。この37人に対して担当保育士に、つまずきチェックシートの記載と聞き取りを面接調査した(回収率100%、有効回答率100%)。本研究では、つまずきチェックシートにて児の認知行動上の状況を調査し、祖父母との日常的交流の有無の両群を比較した。

4) 調査内容

つまずきチェックシートは、発達障害に関係する9つの領域から構成されている。学習障害に関する領域は、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」、「計算する」、「推論する」の6つで、各5項目で構成されている。注意欠陥多動性障害に関する領域は、「不注意」、「多動性－衝動性」の2つで、各9項目で構成されている。高機能自閉症等に関する領

域は、「対人関係やこだわり等」で、27 項目で構成されている。学習障害に関する領域の回答選択肢は、「ない」を 0 点、「まれにある」を 1 点、「ときどきある」を 2 点、「よくある」を 3 点と設定している。注意欠陥多動性障害に関する領域の回答選択肢は、「ない」を 0 点、「ときどきある」を 1 点、「しばしばある」を 2 点、「非常にしばしばある」を 3 点と設定している。「対人関係やこだわり等」領域の回答選択肢は、「いいえ」を 0 点、「多少」を 1 点、「はい」を 2 点と設定している。

聞き取り調査では、つまずきチェックシート記載時の児の基本属性として年齢と性別を、影響を与える要因として、祖父母との日常的交流の有無、医療機関との関わりと診断の有無、療育機関との関わりの有無について質問した。祖父母と日常的交流がある状態とは、松尾ら（2014）を参考に、同居または週 1 ～ 2 回以上の関わりや保育園の送迎や施設の行事の参加が有る等とした。

5) 分析方法

祖父母との日常的交流、医療機関、療育機関との関係を検討するための検定は χ^2 検定、祖父母との日常的交流の有無とつまずきチェックシートの各項目との関係を検討するための検定は Mann - Whitney の U 検定を用いた。統計解析ソフトには、統計パッケージ SPSS Statistics 19 を使用した。

3. 研究結果

児の性別、年齢、医療機関及び療育機関の関わりの有無と祖父母との日常的交流の有無で 2 群に分けたものを Table3-1 に示した。祖父母との日常的交流有群（以下交流有群）は 28 人（75.7%）で、日常的交流無群（以下交流無群）は 9 人（24.3%）であった。

「男児」は 28 人（75.7%）、20 人が交流有群、8 人が交流無群。「女児」は 9 人（24.3%）、8 人が交流有群、1 人が交流無群。年齢では、「3 歳」は 11 人（29.7%）、7 人が交流有群、4 人が交流無群。「4 歳」は 10 人（27.0%）、8 人が交流有群、2 人が交流無群。「5 歳」は 12 人（32.4%）、10 人が交流有群、2 人が交流無群。「6 歳」は 4 人（10.8%）、3 人が交流有群、1 人が交流無群。医療機関との関わりが有るのは 19 人（51.4%）、内 12 人が診断を有し、14 人が交流有群、5 人が交流無群。医療機関との関わりが無いのは

18 人 (48.6%)、14 人が交流有群、4 人が交流無群。療育機関との関わりが有るのは 24 人 (64.9%)、16 人が交流有群、8 人が交流無群。療育機関との関わりが無いのは 13 人 (35.1%)、12 人が交流有群、1 人が交流無群。祖父母との日常的交流の有無と児の性別、年齢、医療機関及び療育機関の関わりの有無に、有意な差は認められなかった。

祖父母との日常的交流の有無とつまずきチェックシートとの関係について Table 3-2 に示した。学習障害に関する領域の、「聞く」では、『指示の理解が難しい。』(p<.10) が、交流有群において有意差はないが低い傾向であった。「話す」では、『適切な速さで話すことが難しい。(たどたどしく話す。とても早口。)](p<.10) が、交流有群において有意差はないが低い傾向であった。「読む」では、『絵本を見ようとしない。』(p<.10) が、交流有群において有意差はないが低い傾向であった。「書く」、「計算する」、「推論する」では有意な差は認められなかった。

注意欠陥多動性障害に関する領域の「不注意」では、『面と向かって話しかけられているのに、聞いていないように見える。』(p<.10)、『気が散りやすい。』(p<.10) の 2 項目が、交流有群において有意に低い傾向であった。「多動性－衝動性」では、『遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい。』(p<.10)、『じっとしていない、または何かに駆り立てられるように活動する。』(p<.10) の 2 項目が、交流有群において有意差はないが低い傾向であった。

高機能自閉症に関する「対人関係やこだわり等」領域では、『いろいろ話をするが、その時の場面や相手の感情や立場を理解しない。』(p<.05)、が、交流有群において有意に低い結果であった。『他の子どもたちからいじめられることがある。』(p<.10) は、交流有群において有意差はないが低い傾向であった。一方、『仲の良い友人がいない。』(p<.01) は、交流無群において有意に低い結果であった。

Table 3-1 祖父母との日常的交流の有無と児の属性、医療機関及び療育機関の関わりとの有無のクロス表

| | | 祖父母との日常的交流 | | | χ^2 検定 |
|----------|----|-------------------------|-----------|----------|-------------|
| | | 全体 (n=37) | 有群 (n=28) | 無群 (n=9) | |
| 性別 | 男児 | 28 (75.7) | 20 (71.4) | 8 (88.9) | n.s |
| | 女児 | 9 (24.3) | 8 (28.6) | 1 (11.1) | |
| 年齢 | 3歳 | 11 (29.7) | 7 (25.0) | 4 (44.4) | n.s |
| | 4歳 | 10 (27.0) | 8 (28.6) | 2 (22.2) | |
| | 5歳 | 12 (32.4) | 10 (35.7) | 2 (22.2) | |
| | 6歳 | 4 (10.8) | 3 (10.7) | 1 (11.1) | |
| 医療機関の関わり | 有 | 19 (51.4) | 14 (50.0) | 5 (55.6) | n.s |
| | 無 | (内診断あり 12) 18 (48.6) | 14 (50.0) | 4 (44.4) | |
| 療育機関の関わり | 有 | 24 (64.9) | 16 (57.1) | 8 (88.9) | n.s |
| | 無 | 13 (35.1) | 12 (42.9) | 1 (11.1) | |

単位: 人 (%)
回収率: 100%
有効回答率: 100%

Table 3-2 祖父母との日常的交流の有無とつまずきチェックシートの各項目との関係

| 領域 | 項目 | 祖父母との日常的 交流の有無 | | M | SD | Mann- Whitney |
|------|--------------------------------------|-------------------|-----|------|------|-------------------|
| | | 有28名 | 無9名 | | | |
| 聞く | 聞き違いがある。(「知った」を「行った」と聞き間違える。) | 有 | 無 | 1.07 | 1.09 | .970 |
| | | | | 1.11 | 1.27 | |
| | 聞きもらしがある。 | 有 | 無 | 2.54 | .69 | .628 |
| | | | | 2.33 | 1.32 | |
| | 個別に言われると聞き取れるが、集団指示では難しい。 | 有 | 無 | 2.50 | .75 | .630 |
| | | | | 2.33 | 1.32 | |
| 話す | 指示の理解が難しい。 | 有 | 無 | 2.25 | .84 | .080 [†] |
| | | | | 2.78 | .44 | |
| | 友だちどうして話をする時に、話の流れについて行けないことがある。 | 有 | 無 | 2.00 | 1.02 | .572 |
| | | | | 1.67 | 1.32 | |
| | 適切な速さで話すことが難しい。(たどたどしく話す。とても早口。) | 有 | 無 | 1.43 | 1.26 | .073 [†] |
| | | | | 2.33 | 1.00 | |
| 読む | ことばにつまることがある。 | 有 | 無 | 1.39 | 1.20 | .569 |
| | | | | 1.67 | 1.41 | |
| | 単語を羅列したり、短い文で内容的に乏しい話をする。 | 有 | 無 | 1.71 | 1.15 | .566 |
| | | | | 1.89 | 1.45 | |
| | 思いつくままに話すなど、筋道の通った話をするのが難しい。 | 有 | 無 | 2.07 | 1.09 | .574 |
| | | | | 2.22 | 1.30 | |
| 書く | 内容をわかりやすく伝えることが難しい。 | 有 | 無 | 2.25 | .93 | .659 |
| | | | | 2.00 | 1.22 | |
| 計算する | よく似た文字の見分けがつかない。 | 有 | 無 | .96 | 1.35 | .726 |
| | | | | .78 | 1.30 | |
| | 絵本を見ようとしなない。 | 有 | 無 | .82 | 1.19 | .085 [†] |
| | | | | 1.56 | 1.33 | |
| | 数字のひろい読みが難しい。 | 有 | 無 | .61 | 1.17 | .688 |
| | | | | .22 | .44 | |
| 推論する | 同じ文字を繰り返し読んだり文字をとばして読んだりする。 | 有 | 無 | .50 | 1.04 | .672 |
| | | | | .44 | .73 | |
| | 文字を読むことに興味関心がない。 | 有 | 無 | .93 | 1.33 | .850 |
| | | | | .78 | 1.30 | |
| | 直線がまっすぐに引けない。 | 有 | 無 | .89 | 1.23 | .528 |
| | | | | 1.11 | 1.27 | |
| 不注意 | 丸の書き始めと終わりが離れている。 | 有 | 無 | .68 | 1.19 | .196 |
| | | | | 1.22 | 1.30 | |
| | 自分の名前をひらがなで書こうとしない。 | 有 | 無 | .96 | 1.35 | .345 |
| | | | | .56 | 1.13 | |
| | なぞり書きがおおきくずれる。 | 有 | 無 | 1.29 | 1.18 | .741 |
| | | | | 1.44 | 1.24 | |
| 不注意 | ぬり絵でぬり残しが多かったり大きくはみ出したりする。 | 有 | 無 | 1.89 | 1.20 | .985 |
| | | | | 1.78 | 1.48 | |
| 不注意 | グループにおやつを配る時に1つ不足していることがわからない。 | 有 | 無 | 1.32 | 1.42 | .830 |
| | | | | 1.22 | 1.48 | |
| | さいころを使って遊べない。 | 有 | 無 | .50 | 1.00 | .281 |
| | | | | .89 | 1.27 | |
| | 10までの数唱ができない。 | 有 | 無 | .89 | 1.26 | .392 |
| | | | | .56 | 1.13 | |
| 不注意 | グループの人数を確認しておやつを配ることができない。 | 有 | 無 | 1.32 | 1.36 | .401 |
| | | | | .89 | 1.17 | |
| | 数の大小がわからない。 | 有 | 無 | .82 | 1.28 | .881 |
| | | | | .67 | 1.12 | |
| | 長さやかさの比較をすることが難しい。 | 有 | 無 | .68 | 1.19 | .155 |
| | | | | 1.33 | 1.41 | |
| 不注意 | 丸やひし形などの図形の模写をすることが難しい。 | 有 | 無 | 1.18 | 1.22 | .640 |
| | | | | 1.44 | 1.51 | |
| | ジャンケンで勝ち負けがわからない。 | 有 | 無 | 1.04 | 1.35 | .397 |
| | | | | 1.56 | 1.51 | |
| | しりとり遊びで次につなげることが難しい。 | 有 | 無 | 1.50 | 1.37 | .664 |
| | | | | 1.22 | 1.39 | |
| 不注意 | 早合点や飛躍した考えをする。 | 有 | 無 | 1.07 | 1.27 | .364 |
| | | | | 1.56 | 1.51 | |
| 不注意 | 細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをしたりする。 | 有 | 無 | 2.32 | .94 | .857 |
| | | | | 2.22 | 1.30 | |
| | 課題や遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい。 | 有 | 無 | 2.39 | .96 | .786 |
| | | | | 2.56 | .73 | |
| | 面と向かって話しかけられているのに、聞いていないように見える。 | 有 | 無 | 1.86 | 1.11 | .084 [†] |
| | | | | 2.56 | .73 | |
| 不注意 | 指示に従えなかったり、指示した事柄を最後までやり遂げられなかったりする。 | 有 | 無 | 2.21 | 1.03 | .968 |
| | | | | 2.11 | 1.36 | |
| | 課題や活動を順序立てて行うことが難しい。 | 有 | 無 | 2.14 | .89 | .259 |
| | | | | 2.44 | 1.01 | |
| | 集中して努力を続けなければならない課題を避ける。 | 有 | 無 | 1.89 | 1.17 | .572 |
| | | | | 2.11 | 1.27 | |
| 不注意 | 活動や遊びに必要な物をなくしてしまう。 | 有 | 無 | 1.46 | 1.20 | .496 |
| | | | | 1.78 | 1.20 | |
| | 気が散りやすい。 | 有 | 無 | 2.32 | .94 | .095 [†] |
| | | | | 2.89 | .33 | |
| | 日々の活動で忘れっぽい。 | 有 | 無 | 1.75 | 1.21 | .577 |
| | | | | 2.00 | 1.22 | |

Mann-WhitneyのU検定 † $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

続く

Table 3-2 祖父母との日常的交流の有無とつまずきチェックシートの各項目との関係

| 領域 | 項目 | 続き | | | |
|--|--|-------------------------------|--------------|--------------|-------------------|
| | | 祖父母との日常的 交流の有無 有28名 無9名 | M | SD | Mann- Whitney |
| 多 動 性 ― 衝 動 性 | 手足をそわそわ動かしたり、着席していても、もじもじしたりする。 | 有 無 | 2.00 2.67 | 1.25 .71 | .150 |
| | 活動中や座っているべき時に席を離れてしまう。 | 有 無 | 1.50 1.88 | 1.23 1.25 | .489 |
| | きちんとしていなければならない時に、過度に走り回ったりよじ登ったりする。 | 有 無 | 1.18 1.44 | 1.31 1.33 | .521 |
| | 遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい。 | 有 無 | 1.43 2.22 | 1.20 1.20 | .074 [†] |
| | じっとしていない。または何かに駆り立てるように活動する。 | 有 無 | 1.36 2.22 | 1.28 1.20 | .066 [†] |
| | 過度にしゃべる。 | 有 無 | 1.04 1.67 | 1.23 1.12 | .173 |
| | 質問が終わらない内に出し抜けて答えてしまう。 | 有 無 | .79 1.56 | 1.13 1.33 | .107 |
| | 順番を待つのが難しい。 | 有 無 | 1.29 2.00 | 1.30 1.32 | .156 |
| | 他の人がしていることをさげざったり、じゃまをしたりする。 | 有 無 | 1.07 1.56 | 1.15 1.51 | .432 |
| 対 人 関 係 や こ だ わ り 等 | 大人びている。ませている。 | 有 無 | .04 .00 | .19 .00 | .571 |
| | みんなから「〇〇博士」「〇〇教授」と思われている。(例: カレンダー博士) | 有 無 | .25 .00 | .59 .00 | .180 |
| | 他の子どもは興味を持たないことに興味があり、「自分だけの世界」を持っている。 | 有 無 | .89 .56 | .96 .73 | .392 |
| | 特定の分野の知識を蓄えているが、丸暗記であり、意味をきちんとは理解していない。 | 有 無 | .36 .44 | .62 .53 | .490 |
| | 含みのある言葉や嫌みを言われてもわからず、言葉通りに受け止めてしまうことがある。 | 有 無 | .89 .78 | .92 .67 | .820 |
| | 会話の仕方が形式的であり、抑揚なく話したり、間合いが取れなかったりすることがある。 | 有 無 | .75 .78 | .84 .83 | .893 |
| | 言葉を組み合わせ、自分だけにしかわからないような造語を作る。 | 有 無 | .18 .22 | .55 .67 | .948 |
| | 独特な声で話すことがある。 | 有 無 | .39 .33 | .79 .71 | .961 |
| | 誰かに何かを伝える目的がなくても場面に関係なく声を出す。(唇を鳴らす、咳払い、喉を鳴らす、叫ぶ) | 有 無 | .54 1.00 | .84 1.00 | .181 |
| | とても得意なことがある一方で、極端に苦手なものがある。 | 有 無 | .71 .89 | .90 1.05 | .689 |
| | いろいろな話をするが、その時の場面や相手の感情や立場を理解しない。 | 有 無 | .68 1.56 | .86 .88 | .017* |
| | 共感性が乏しい。 | 有 無 | 1.11 1.11 | .88 .93 | .985 |
| | 周りの人が困惑するようなことも、配慮しないで言うてしまう。 | 有 無 | .54 1.11 | .84 1.05 | .126 |
| | 独特な目つきをすることがある。 | 有 無 | 1.18 .67 | 2.31 .87 | .680 |
| | 友達と仲良くしたいと思っても、友達関係をうまく築けない。 | 有 無 | 1.43 1.00 | .79 .87 | .159 |
| | 友達のそばにいますが、一人で遊んでいる。 | 有 無 | 1.61 1.33 | .63 .71 | .231 |
| | 仲の良い友人がいない。 | 有 無 | 1.39 .56 | .79 .73 | .010** |
| | 常識が乏しい。(決まりきった行動が身につかない。危険なことがわからない。) | 有 無 | 1.29 1.11 | .90 .93 | .582 |
| | 球技やゲームをする時、仲間と協力することに考えが及ばない。 | 有 無 | 1.43 1.33 | .63 .87 | .906 |
| | 動作やジェスチャーが不器用で、ぎこちないことがある。 | 有 無 | 1.25 1.22 | .93 .83 | .829 |
| | 意図的でなく、頭や体を動かすことがある。 | 有 無 | .75 .56 | .89 .88 | .538 |
| | ある行動や考えに強くこだわることによって簡単な日常の活動ができなくなることがある。 | 有 無 | .57 .56 | .84 .88 | .933 |
| | 自分なりの独特な日課や手順があり、変更や変化を嫌がる。 | 有 無 | .64 .44 | .87 .73 | .608 |
| | 特定の物に執着がある。 | 有 無 | .64 .67 | .91 .87 | .837 |
| | 他の子どもたちからいじめられることがある。 | 有 無 | .04 .22 | .19 .44 | .079 [†] |
| | 独特な表情をしていることがある。 | 有 無 | .57 .44 | .69 .73 | .562 |
| | 独特な姿勢をしていることがある。 | 有 無 | .57 .22 | .74 .67 | .132 |

Mann-WhitneyのU検定 † $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

4. 考察

発達障害児及び発達につまずきのある児の男女比はおおよそ 4 : 1 である（厚生労働省，2012）。本研究で得られた男女比においても、男児は 28 人（75.7%）、女児は 9 人（24.3%）であり、これに準じる結果となった。

祖父母との日常的交流においては、37 人中 28 人（75.7%）が交流していた。本調査は 5 割近い世帯が、同居あるいは近隣に祖父母が居住している地域で行ったため、祖父母との日常的交流が有る児が 7 割以上と多い結果となり、祖父母が日常的に子育ての支援者としての役割を担っている現状が明らかとなった。

以下、発達障害児及び発達につまずきのある児と祖父母が、日常的交流を図ることによる影響について考察する。

1) 学習障害に関する領域について

祖父母と孫との関わりにおいては、孫の年齢が低いほど関わる頻度は多く（杉井，2008）、保育所に通う孫を持つ祖父母を対象に、孫との関わりについて質問紙調査をした結果、遊び相手になることが最も多かった（山崎ら，2004）。また、祖父母は孫に昔話や本を読み聞かせ、話し相手になるといった 1 対 1 の関わりをすることが多いと報告されている（杉井ら，1994）。本研究では、指示の理解、適切な速さで話す、絵本を見ることについて正の影響が期待できる結果となった。祖父母との遊びや絵本の読み聞かせや話し相手等の 1 対 1 の関わりが、学習障害に関する領域の「聞く」、「話す」、「読む」について、正の影響を与える可能性が示唆された。

2) 注意欠陥多動性障害に関する領域について

注意欠陥多動性障害に関連する行動について、「不注意」の領域では、『面と向かって話しかけられているのに、聞いていないように見える。』、『気が散りやすい。』、「多動性－衝動性」の領域では、『遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい。』、『じっとしていない。』において、祖父母との日常的交流が正の影響を与えている可能性が示唆された。三宅ら（2002）は、多動と言語の遅れを有する発達障害幼児が、療育の場面において 1 対 1 の個別の関わりをする中で、他者と楽しいという感情を共有することによ

り、他者との相互作用が増えたことを明らかにした。また児の発言や行動を認められ、伝えたいことが表現できるまで待ってもらえるという体験が、児の衝動的行動の軽減につながったという報告がある（繪内ら，2005）。本研究の結果より、児の発言や行動を認め、楽しさを共有する関わりが祖父母との日常的交流の中にあり、そのことが不注意、多動性や衝動性の軽減、他者との遊びや活動の参加に繋がった可能性がある。

3) 高機能自閉症等に関する領域について

高機能自閉症等に関連する行動について、「対人関係やこだわり等」の領域では、『いろいろな話をするが、その時の場面や相手の感情や立場を理解しない。』などの2項目に正の影響を与えることが示唆された。内田（2011）は、広汎性発達障害の児童に対して、3年間の絵本の読み聞かせを実施した結果、絵本、読み手、聞き手という三項関係が生まれ、「共に共感できる私とあなた」という相互信頼関係が構築され、児の情緒が安定し、相手の気持ちを理解することに繋がったことを報告している。また、高橋ら（2005）は、乳幼児期に目線が合わない、こだわり行動などの自閉症の症状を有する子どもを対象とした研究において、児の自発的な行動に対して、微笑み、容認、賞賛、拍手などで応答するという手続きを取った結果、他者との遊びが拡大し、こだわり行動が減少したことを明らかにした。つまり絵本の読み聞かせなどの個別の丁寧な関わり（杉井ら，1994）や優しさや微笑み等のあたたかい態度（諏澤，2013b）が、祖父母との日常的交流の中にあり、対人関係に関する項目で正の影響を与える可能性が示唆されたと考える。しかし『仲の良い友人がいない。』という項目に関しては、交流無群の方が有意に低い結果を示しており、友人づくりは、保育所や療育機関など同年齢児がいる所での働きかけが必要であることが示唆された。

杉山（2007）は、発達障害の特徴として、大きく、「認知（周りの世界を知り、理解すること）」、「学習能力（文字を読む、書く、計算するといった能力）」、「言語能力（言葉の発語や理解）」、「社会性（他人の気持ちを読むこと、人との付き合い方や社会のルールの習得）」、「運動（歩く、走るといったからだ全体の運動）」、「手先の細やかな動き」、「注意や行動のコントロール」の7側面の発達に障害があると述べている。今回の調査結果からは、祖父母との日常的交流が、「学習能力」、「言語能力」、「社会性」、「注意や行動の

コントロール」の4側面の発達に影響を与えることが示唆された。杉山ら(1999)は「社会性」などの対人関係については早期からの介入が望ましいと述べている。発達障害児への早期支援という観点では、医療機関や療育機関における専門的な関わりとともに、個別に行われる祖父母との日常的交流も、重要な役割を担う可能性が示唆された。

5. 結語

予備調査では、対象地域、サンプル数ともに規模が少ないため結果の分析には限界があったが、7割以上が祖父母と日常的交流を図っており、そのことが学習障害、注意欠陥多動性障害、高機能自閉症等に関連する行動に正の影響を与える可能性が示唆された。

第3節 本調査

1. 目的

予備調査にて、祖父母と日常的に交流することによる影響が示唆されたため、統計的に信頼性を高めること、及び祖父母の属性、児の属性、つまずきチェックシートによる児の行動発達上の評価の関係、双方が受ける影響について詳細に検討することを目的とする。

2. 研究方法

1) 調査対象者

全国保育協議会より公開されている A 県の保育所 100 か所に勤務している保育士であった。

2) 調査時期

平成 28 年 3 月

3) 調査方法

郵送調査をした。A 県の保育所 100 か所に研究協力依頼の電話をした後、依頼文、質問票、返信用封筒を同封したものを 300 部郵送した。回収は、自由意思が尊重されるように、個別で返送するものとした。

4) 調査内容

つまずきチェックシート及び属性を調査した。属性として、保育士については、性別、年齢、就業年数、発達障害児及び発達につまずきのある児を担当した年数、発達障害児に関する研修や勉強会の受講の有無を調査した。児については、性別、年齢、医療機関の関わりの有無、療育機関の関わりの有無、祖父母との交流の有無を調査した。児と最もよく交流している祖父母については、続柄（「父方祖父」、「父方祖母」、「母方祖父」、「母方祖母」）、児との交流の頻度（「毎日」、「週に 1 回以上」、「月に 1 回以上」、「年に 1

回以上))、健康状態(「良い」、「普通」、「悪い」、「不明」)、児の障害の理解(「良く理解している」、「少し理解している」、「あまり理解していない」、「理解していない」)、育児協力(「よく協力している」、「少し協力している」、「あまり協力していない」、「協力していない」)、保護者との関係性(「とても良い」、「良い」、「あまり良くない」、「良くない」、「不明」)、居住(「同居」、「別居」)、居住距離(「歩いていける距離」、「日帰りの範囲」、「泊りがけの範囲」、「不明」)を調査した。

5) 分析方法

最もよく交流している祖父母の各属性を2群に分けて検討した。以下2群分けの詳細を述べる。「児との交流の頻度」では、「毎日」、「週に1回以上」を高群、「月に1回以上」、「年に1回以上」を低群とした。「健康状態」では、「良い」、「普通」を高群、「悪い」、「不明」を低群とした。「児の障害の理解」では、「良く理解している」、「少し理解している」を高群、「あまり理解していない」、「理解していない」を低群とした。「育児協力」では、「よく協力している」、「少し協力している」を高群、「あまり協力していない」、「協力していない」を低群とした。「保護者との関係性」では、「とても良い」、「良い」を高群、「あまり良くない」、「良くない」を低群とした。「居住」では、「同居」、「別居」に分けた。そして、児の属性と最もよく交流している祖父母の属性の2群分けとの関係を検討するため、 χ^2 検定を用いた。さらに、つまりきチェックシートの各領域と児と最もよく交流している祖父母の各属性の2群分けとの関係を検討するために Mann - Whitney の U 検定を用いた。

児と最もよく交流している祖父母の属性の回答選択肢を点数化し、祖父母の各属性の関係を検討するため、Pearson の相関係数を求めた。「交流の程度」では、「毎日」を4点、「週に1回以上」を3点、「月に1回以上」を2点、「年に1回以上」を1点とした。「健康状態」では、「良い」を3点、「普通」を2点、「悪い」を1点、「不明」を0点とした。「児の障害の理解」では、「良く理解している」を4点、「少し理解している」を3点、「あまり理解していない」を2点、「理解していない」を1点とした。「育児協力」では、「よく協力している」を4点、「少し協力している」を3点、「あまり協力していない」を2点、「協力していない」を1点とした。「保護者との関係性」では、「とても良い」を

4点、「良い」を3点、「あまり良くない」を2点、「良くない」を1点とした。

統計解析ソフトには、統計パッケージ SPSS Statistics 19 を使用した。

3. 研究結果

郵送した300部のうち、回収数は104部であった(回収率34.7%、有効回答率93.3%)。

1) 対象の概要

(1) 保育士の属性 (Table 3-3)

性別は、「男性」0人(0%)、「女性」100人(96.2%)、「回答なし」4人(3.8%)であった。年齢は「20歳代」27人(26.0%)、「30歳代」27人(26.0%)、「40歳代」29人(27.9%)、「50歳代」16人(15.4%)、「60歳代」1人(0.9%)、「70歳代」1名(0.9%)、「回答なし」3人(2.9%)であった。就業年数は、「5年未満」9人(8.6%)、「5年以上10年未満」23人(22.1%)、「10年以上15年未満」20人(19.2%)、「15年以上20年未満」13人(12.5%)、「20年以上25年未満」16人(15.4%)、「25年以上」14人(13.6%)、「回答なし」9人(8.6%)であった。発達障害児及び発達につまずきのある児を担当した年数では、「1年」19人(18.3%)、「2年」17人(16.4%)、「3年」17人(16.4%)、「4年」9人(8.6%)、「5年」8人(7.7%)、「6年」3人(2.9%)、「7年」3人(2.9%)、「8年」2人(1.8%)、「9年」0人(0%)、「10年」3人(2.9%)、「11年以上」4人(3.8%)、「回答なし」19人(18.3%)であった。発達障害児に関する研修や勉強会の受講の有無は、「有」86人(82.8%)、「無」10人(9.6%)であった。

(2) 児の属性 (Table 3-4)

児の属性は、「男児」76人(78.4%)、「女児」13人(12.4%)、「回答なし」8人(8.2%)であった。年齢は、「3歳」15人(15.5%)、「4歳」25人(25.8%)、「5歳」30人(30.9%)、「6歳」17人(17.5%)であった。医療機関との関わりの有無は、「有」40人(41.2%)、「無」49人(50.5%)、「回答なし」8人(8.2%)、療育機関との関わりの有無は、「有」56人(57.7%)、「無」33人(34.0%)、「回答なし」8人(8.2%)であった。祖父母との交流の有無は、「有」81人(83.5%)、「無」10人(10.3%)、「回答なし」6人(6.1%)

であった。

(3) 児と最もよく交流している祖父母の属性 (Table 3-5)

「続柄」は、「父方祖父」4人(4.9%)、「父方祖母」30人(37.1%)、「母方祖父」10人(12.3%)、「母方祖母」37人(45.7%)であった。「児との交流の頻度」は、「毎日」25人(30.9%)、「週に1回以上」28人(34.6%)、「月に1回以上」19人(23.5%)、「年に1回以上」6人(7.4%)、「回答なし」2人(2.5%)であった。「健康状態」は、「良い」50人(61.8%)、「普通」21人(25.9%)、「悪い」1人(1.2%)、「不明」9人(11.1%)であった。「児の障害の理解」は、「よく理解している」25人(30.9%)、「少し理解している」19人(23.5%)、「あまり理解していない」28人(34.5%)、「理解していない」6人(7.4%)、「回答なし」3人(3.7%)であった。「育児協力」は、「よく協力している」36人(44.4%)、「少し協力している」29人(35.8%)、「あまり協力していない」11人(13.6%)、「協力していない」2人(2.5%)、「回答なし」3人(3.7%)であった。「保護者との関係性」は、「とても良い」17人(21.0%)、「良い」44人(54.3%)、「あまり良くない」8人(9.9%)、「良くない」1人(1.2%)、「不明」11人(13.6%)であった。「住居」は、「同居」19人(23.5%)、「別居」61人(75.3%)、「回答なし」1人(1.2%)であった。「住居距離」は、「歩いていける範囲」45人(55.6%)、「日帰りの範囲」23人(28.3%)、「泊りがけの範囲」2人(2.5%)、「不明」11人(13.6%)であった。

Table 3-3 保育士の属性

| | | n=104 |
|-----------------------|------------|-----------|
| 性別 | 男 | 0(0) |
| | 女 | 100(96.2) |
| | 回答なし | 4(3.8) |
| 年齢 | 20歳代 | 27(26.0) |
| | 30歳代 | 27(26.0) |
| | 40歳代 | 29(27.9) |
| | 50歳代 | 16(15.4) |
| | 60歳代 | 1(0.9) |
| | 70歳以上 | 1(0.9) |
| | 回答なし | 3(2.9) |
| 就業年数 | 5年未満 | 9(8.6) |
| | 5年以上10年未満 | 23(22.1) |
| | 10年以上15年未満 | 20(19.2) |
| | 15年以上20年未満 | 13(12.5) |
| | 20年以上25年未満 | 16(15.4) |
| | 25年以上 | 14(13.6) |
| | 回答なし | 9(8.6) |
| 発達障害児または疑いのある児を担当した年数 | 1年 | 19(18.3) |
| | 2年 | 17(16.4) |
| | 3年 | 17(16.4) |
| | 4年 | 9(8.6) |
| | 5年 | 8(7.7) |
| | 6年 | 3(2.9) |
| | 7年 | 3(2.9) |
| | 8年 | 2(1.8) |
| | 9年 | 0(0) |
| | 10年 | 3(2.9) |
| | 11年以上 | 4(3.8) |
| | 回答なし | 19(18.3) |
| 発達障害児に関する研修や勉強会の受講 | 有 | 86(82.8) |
| | 無 | 10(9.6) |
| | 回答なし | 8(7.7) |

単位:人(%)

Table 3-4 児の属性

| | | |
|-----------|------|-----------|
| 性別 | 男児 | 76 (78.4) |
| | 女児 | 13 (12.4) |
| | 回答なし | 8 (8.2) |
| 年齢 | 3歳 | 15 (15.5) |
| | 4歳 | 25 (25.8) |
| | 5歳 | 30 (30.9) |
| | 6歳 | 17 (17.5) |
| | 回答なし | 10 (10.3) |
| 医療機関との関わり | 有 | 40 (41.2) |
| | 無 | 49 (50.5) |
| | 回答なし | 8 (8.2) |
| 療育機関との関わり | 有 | 56 (57.7) |
| | 無 | 33 (34.0) |
| | 回答なし | 8 (8.2) |
| 祖父母との交流 | 有 | 81 (83.5) |
| | 無 | 10 (10.3) |
| | 回答なし | 6 (6.1) |

単位: 人 (%)

Table 3-5 児と最もよく交流している祖父母の属性

| | | | |
|------------|----|------------|------------------|
| 続柄 | | 父方祖父 | 4(4.9) |
| | | 父方祖母 | 30(37.1) |
| | | 母方祖父 | 10(12.3) |
| | | 母方祖母 | 37(45.7) |
| 交流の頻度 | 高群 | 毎日 | 25(30.9) |
| | | 週に1回以上 | 28(34.6) |
| | 低群 | 月に1回以上 | 19(23.5) |
| | | 年に1回以上 | 6(7.4) |
| | | なし 回答なし | 1(1.2) 2(2.5) |
| 健康状態の程度 | 高群 | 良い | 50(61.8) |
| | | 普通 | 21(25.9) |
| | 低群 | 悪い | 1(1.2) |
| | | 不明 | 9(11.1) |
| 障害理解の程度 | 高群 | よく理解している | 25(30.9) |
| | | 少し理解している | 19(23.5) |
| | 低群 | あまり理解していない | 28(34.5) |
| | | 理解していない | 6(7.4) |
| | | 回答なし | 3(3.7) |
| 育児協力の程度 | 高群 | よく協力している | 36(44.4) |
| | | 少し協力している | 29(35.8) |
| | 低群 | あまり協力していない | 11(13.6) |
| | | 協力していない | 2(2.5) |
| | | 回答なし | 3(3.7) |
| 保護者との関係の程度 | 高群 | とても良い | 17(21.0) |
| | | 良い | 44(54.3) |
| | 低群 | あまり良くない | 8(9.9) |
| | | 良くない | 1(1.2) |
| | | 不明 | 11(13.6) |
| 住居 | | 同居 | 19(23.5) |
| | | 別居 | 61(75.3) |
| | | 回答なし | 1(1.2) |
| 住居距離 | | 歩いていける範囲 | 45(55.6) |
| | | 日帰りの範囲 | 23(28.3) |
| | | 泊まりがけの範囲 | 2(2.5) |
| | | 不明 | 11(13.6) |

単位: 人(%)

2) 児の属性と最もよく交流している祖父母の属性の 2 群分けとの関係 (Table 3-6)

児の属性（性別、年齢、医療機関との関わり、療育機関との関わり）と最もよく交流している祖父母の属性（交流の程度、健康状態の程度、児の障害の理解の程度、育児協力の程度、保護者との関係性の程度、住居）の 2 群わけについて、 χ^2 検定を行った。その結果、児の属性；医療機関（ $p<.00$ ）及び療育機関（ $p<.00$ ）の関わりと、祖父母の属性；障害の理解の程度において、高群と低群の間に有意差が認められた。他の属性については、有意差は認められなかった。

Table 3-6 児の属性と最もよく交流している祖父母の属性の 2 群分けとの関係

| | | 性別 | | χ^2 | 年齢 | | | | χ^2 | 医療機関との関わり | | χ^2 | 療育機関との関わり | | χ^2 |
|-------------|----|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|----------|----------|-----------|----------|----------|
| | | 男 | 女 | | 3歳 | 4歳 | 5歳 | 6歳 | | 有 | 無 | | 有 | 無 | |
| 交流の程度 | 高 | 41(52.6) | 24(30.8) | .39 | 7(9.2) | 15(19.7) | 18(23.7) | 12(15.8) | .17 | 22(28.2) | 31(39.7) | .59 | 31(39.7) | 22(28.2) | .42 |
| | 低 | 12(15.4) | 1(1.3) | | 8(10.5) | 8(10.5) | 7(9.2) | 1(1.3) | | 12(15.4) | 13(16.7) | | 17(21.8) | 8(16.3) | |
| 健康状態の程度 | 高 | 59(72.0) | 12(14.6) | .51 | 14(17.5) | 18(22.5) | 23(28.8) | 15(18.8) | .11 | 34(41.5) | 37(45.1) | .20 | 45(54.9) | 26(31.7) | .99 |
| | 低 | 10(12.2) | 1(1.2) | | 1(1.3) | 6(7.5) | 3(3.8) | 0(0.0) | | 3(3.7) | 8(9.8) | | 7(8.5) | 4(4.9) | |
| 障害理解の程度 | 高 | 35(44.9) | 9(11.5) | .31 | 6(7.9) | 11(14.5) | 18(23.7) | 8(10.5) | .24 | 27(34.6) | 17(21.8) | .00** | 36(46.2) | 8(10.3) | .00** |
| | 低 | 30(38.5) | 4(5.1) | | 8(10.5) | 12(15.8) | 7(9.2) | 6(7.9) | | 10(12.8) | 24(30.8) | | 15(19.2) | 19(24.4) | |
| 育児協力の程度 | 高 | 53(67.9) | 12(15.4) | .34 | 13(16.9) | 16(20.8) | 23(29.9) | 12(15.6) | .20 | 31(39.7) | 34(43.6) | .92 | 41(52.6) | 24(30.8) | .34 |
| | 低 | 12(15.4) | 1(1.3) | | 2(2.6) | 7(9.1) | 2(2.6) | 2(2.6) | | 6(7.7) | 7(9.0) | | 10(12.8) | 3(3.8) | |
| 保護者との関係性の程度 | 高 | 49(70.0) | 12(17.1) | .54 | 12(17.6) | 15(22.1) | 20(29.4) | 12(17.6) | .20 | 31(44.3) | 30(42.9) | .72 | 40(57.1) | 21(30.0) | .56 |
| | 低 | 8(11.4) | 1(1.4) | | 0(0.0) | 5(7.4) | 3(4.4) | 1(1.5) | | 4(5.7) | 5(7.1) | | 5(7.1) | 4(5.7) | |
| 住居 | 同居 | 15(18.8) | 4(5.0) | .52 | 4(5.1) | 3(3.8) | 7(9.0) | 4(5.1) | .53 | 8(10.0) | 11(13.8) | .68 | 12(15.0) | 7(8.8) | .95 |
| | 別居 | 52(65.0) | 9(11.3) | | 11(14.1) | 21(26.9) | 18(23.1) | 10(12.8) | | 29(36.3) | 32(40.0) | | 39(48.8) | 22(27.5) | |

単位:人(%) * $p<.05$ ** $p<.01$

3) 児と最もよく交流している祖父母の属性の 2 群分けとつまずきチェックシートとの関係 (Table 3-7)

祖父母との「交流の程度」とつまずきチェックシートとの関係においては、「聞く」領域では、『聞き違いがある。('知った'を'行った'と聞き間違える。)] ($p<.05$) が、低群において有意に低い結果であった。「読む」領域では、『よく似た文字の見分けがつかない。』 ($p<.01$)、『絵本を見ようとしな。』 ($p<.05$)、『同じ文字を繰り返し読んだり文

字をとばして読んだりする。』(p<.10) が、低群において低い傾向もしくは有意な差を認めた。「書く」領域では、『直線がまっすぐに引けない。』(p<.10)、『丸の書き始めと終わりが離れている。』(p<.05) が、低群において低い傾向もしくは有意な差を認めた。「推論する」領域では、『早合点や飛躍した考えをする。』(p<.05) が、低群において有意に低い結果であった。「不注意」領域では、『集中して努力を続けなければならない課題を避ける。』(p<.05) が、低群において有意に低い結果であった。「多動性－衝動性」領域では、『遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい。』(p<.05)、『過度にしゃべる』(p<.01)、『質問が終わらない内に出し抜けに答えてしまう。』(p<.01)、『他の人がしていることをさえぎったり、じゃまをしたりする。』(p<.05) が、低群において有意に低い結果であった。「対人関係やこだわり等」領域では、『大人びている。ませている。』(p<.05)、『みんなから「〇〇博士」「〇〇教授」と思われている。(例：カレンダー博士)』(p<.05)、『周りの人が困惑するようなことも、配慮しないで言う。』(p<.01) が、低群において有意に低い結果であった。

祖父母の「健康状態の程度」とつまずきチェックシートとの関係においては、「聞く」領域では、『聞き違いがある。(「知った」を「行った」と聞き間違える。)](p<.01)、『友だちどうして話をする時に、話の流れについて行けないことがある。』(p<.05) が、低群において有意に低い結果であった。「書く」領域では、『丸の書き始めと終わりが離れている。』(p<.10) が、低群において低い傾向であった。「対人関係やこだわり等」領域では、『周りの人が困惑するようなことも、配慮しないで言う。』(p<.01) が、高群において有意に低い結果であった。

祖父母の「障害理解の程度」とつまずきチェックシートとの関係においては、「書く」領域では、『直線がまっすぐに引けない。』(p<.10)『ぬり絵でぬり残しが多かったり大きくはみ出したりする。』(p<.10) が、低群において低い傾向であった。「推論する」領域では、『ジャンケンで勝ち負けがわからない。』(p<.10)、『しりとり遊びで次につなげることが難しい。』(p<.01) が、低群において低い傾向もしくは有意な差を認めた。「不注意」領域では、『日々の活動で忘れっぽい。』(p<.10) が、高群において低い傾向であった。「多動性－衝動性」領域では、『手足をそわそわ動かしたり、着席していても、もじもじしたりする。』(p<.10)、『じっとしていない。または何かに駆り立てるように活動す

る。』(p<.05)、『過度にしゃべる。』(p<.05)が、高群において低い傾向もしくは有意な差を認めた。

祖父母の「育児協力の程度」とつまずきチェックシートとの関係においては、「計算する」領域では、『グループの人数を確認しておやつを配ることができない。』(p<.01)、『数の大小がわからない。』(p<.10)が、高群において低い傾向もしくは有意な差を認めた。

「推論する」領域では、『丸やひし形などの図形の模写をすることが難しい。』(p<.10)が、高群において低い傾向であった。「不注意」領域では、『細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをしたりする。』(p<.05)が、高群において有意に低い結果であった。「多動性－衝動性」領域では、『手足をそわそわ動かしたり、着席していても、もじもじしたりする。』(p<.05)、『活動中や座っているべき時に席を離れてしまう。』(p<.05)が、高群において有意に低い結果であった。「対人関係やこだわり等」領域では、『会話の仕方が形式的であり、抑揚なく話したり、間合いが取れなかったりすることがある。』(p<.10)、『共感性が乏しい。』(p<.10)、『仲の良い友人がいない。』(p<.10)が、高群において低い傾向であった。

祖父母と「保護者との関係性の程度」とつまずきチェックシートとの関係においては、「聞く」領域では、『個別に言われると聞き取れるが、集団指示では難しい。』(p<.05)が、低群において有意に低い結果であった。「多動性－衝動性」領域では、『活動中や座っているべき時に席を離れてしまう。』(p<.10)が、高群において低い傾向であった。

祖父母との「住居」とつまずきチェックシートとの関係において、「聞く」領域では、『聞きもらしがある。』(p<.10)、『個別に言われると聞き取れるが、集団指示では難しい。』(p<.05)、『友だちどうして話をする時に、話の流れについて行けないことがある。』(p<.10)が、別居において低い傾向または有意な差を認めた。「書く」領域では、『直線がまっすぐに引けない。』(p<.05)が、別居において有意に低い結果であった。

Table 3-7 祖父母の属性とつまずきチェックシートとの関係

(有意差及び有意傾向があったものを表記)

| 領域 | 項目 | | 交流の程度 | | 健康状態の程度 | | 障害理解の程度 | | 育児協力の程度 | | 保護者との関係性の程度 | | 住居 | |
|------------|---|---|-------------|--------|-------------|--------|-------------|-------|-------------|-------|-------------|------|--------|-------------|
| | | | 高:53名 | 低:25名 | 高:71名 | 低:11名 | 高:44名 | 低:34名 | 高:65名 | 低:13名 | 高:61名 | 低:9名 | 同居:19名 | 別居:61名 |
| | | | M(SD) | U | M(SD) | U | M(SD) | U | M(SD) | U | M(SD) | U | M(SD) | U |
| 聞く | 聞き違いがある。(「知った」を「行った」と聞き間違える。) | 高 | 1.51 (1.08) | .05* | 1.52 (1.06) | .005** | | | | | | | 同居 | |
| | | 低 | 1.00 (.95) | | .55 (.68) | | | | | | | | 別居 | |
| | 聞きもらしがある。 | 高 | | | | | | | | | | | 同居 | 2.63 (.59) |
| | | 低 | | | | | | | | | | | 別居 | 2.18 (1.00) |
| | 個別に言われると聞き取れるが、集団指示では難しい。 | 高 | | | | | | | | | 2.54 (.82) | .02* | 同居 | 2.84 (.50) |
| 読む | | 低 | | | | | | | | | 1.78 (1.20) | | 別居 | 2.38 (.93) |
| | 友だちどうして話をする時に、話の流れについて行けないことがある。 | 高 | | | 2.17 (1.08) | .047* | | | | | | | 同居 | 2.47 (1.02) |
| | | 低 | | | 1.45 (1.12) | | | | | | | | 別居 | 1.98 (1.10) |
| | よく似た文字の見分けがつかない。 | 高 | 1.25 (1.27) | .01** | | | | | | | | | 同居 | |
| | | 低 | .52 (.91) | | | | | | | | | | 別居 | |
| 書く | 絵本を見ようとしなない。 | 高 | 1.28 (1.09) | .02* | | | | | | | | | 同居 | |
| | | 低 | .68 (.74) | | | | | | | | | | 別居 | |
| | 同じ文字を繰り返し読んだり文字をとばして読んだりする。 | 高 | 1.12 (1.26) | .09† | | | | | | | | | 同居 | |
| | | 低 | .60 (.95) | | | | | | | | | | 別居 | |
| | 直線がまっすぐに引けない。 | 高 | 1.62 (1.19) | .08† | | | 1.68 (1.15) | .06† | | | | | 同居 | 1.95 (1.22) |
| 計算する | | 低 | 1.12 (1.13) | | | | 1.18 (1.19) | | | | | | 別居 | 1.34 (1.15) |
| | 丸の書き始めと終わりが離れている。 | 高 | 1.66 (1.09) | .04* | 1.52 (1.08) | .08† | | | | | | | 同居 | |
| | | 低 | 1.16 (.94) | | .91 (.94) | | | | | | | | 別居 | |
| | ぬり絵でぬり残しが多かったり大きくはみ出したりする。 | 高 | | | | | 2.02 (1.06) | .06† | | | | | 同居 | |
| | | 低 | | | | | 1.50 (1.33) | | | | | | 別居 | |
| 推論する | グループの人数を確認しておやつを配ることができない。 | 高 | | | | | | | .97 (1.18) | .00** | | | 同居 | |
| | | 低 | | | | | | | 2.00 (1.29) | | | | 別居 | |
| | 数の大小がわからない。 | 高 | | | | | | | 1.03 (1.21) | .09† | | | 同居 | |
| | | 低 | | | | | | | 1.62 (1.19) | | | | 別居 | |
| | 丸やひし形などの図形の模写をすることが難しい。 | 高 | | | | | | | 1.28 (1.20) | .08† | | | 同居 | |
| 不注意 | | 低 | | | | | | | 1.92 (1.11) | | | | 別居 | |
| | ジャンケンで勝ち負けがわからない。 | 高 | | | | | 1.50 (1.26) | .06† | | | | | 同居 | |
| | | 低 | | | | | .97 (1.33) | | | | | | 別居 | |
| | しりとり遊びで次につなげることが難しい。 | 高 | | | | | 1.82 (1.29) | .01** | | | | | 同居 | |
| | | 低 | | | | | 1.12 (1.24) | | | | | | 別居 | |
| 多動性・衝動性 | 早合点や飛躍した考えをする。 | 高 | 1.50 (1.30) | .05* | | | | | | | | | 同居 | |
| | | 低 | .88 (1.01) | | | | | | | | | | 別居 | |
| | 細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをしたりする。 | 高 | | | | | | | 2.25 (1.01) | .05* | | | 同居 | |
| | | 低 | | | | | | | 2.77 (.59) | | | | 別居 | |
| | 集中して努力を続けなければならない課題を避ける。 | 高 | 2.28 (.98) | .03* | | | | | | | | | 同居 | |
| 対人関係やこだわり等 | | 低 | 1.72 (1.17) | | | | | | | | | | 別居 | |
| | 日々の活動で忘れっぽい。 | 高 | | | | | 1.66 (1.11) | .08† | | | | | 同居 | |
| | | 低 | | | | | 2.03 (1.24) | | | | | | 別居 | |
| | 手足をそわそわ動かしたり、着席していても、もじもじしたりする。 | 高 | | | | | 2.16 (.98) | .06† | 2.20 (.97) | .02* | | | 同居 | |
| | | 低 | | | | | 2.50 (.86) | | 2.77 (.59) | | | | 別居 | |
| 対人関係やこだわり等 | 活動中や座っているべき時に席を離れてしまう。 | 高 | | | | | | | 1.86 (1.10) | .05* | 1.84 (1.09) | .09† | 同居 | |
| | | 低 | | | | | | | 2.46 (.877) | | 2.44 (.88) | | 別居 | |
| | 遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい。 | 高 | 2.13 (1.07) | .05* | | | | | | | | | 同居 | |
| | | 低 | 1.68 (.98) | | | | | | | | | | 別居 | |
| | じっとしていない。または何かに駆り立てるように活動する。 | 高 | | | | | 1.61 (1.03) | .03* | | | | | 同居 | |
| 対人関係やこだわり等 | | 低 | | | | | 2.12 (1.17) | | | | | | 別居 | |
| | 過度にしゃべる。 | 高 | 1.81 (1.16) | .008** | | | 1.23 (1.13) | .00** | | | | | 同居 | |
| | | 低 | 1.12 (.88) | | | | 1.94 (1.04) | | | | | | 別居 | |
| | 質問が終わらない内に出し抜けに答えてしまう。 | 高 | 1.68 (1.22) | .008** | | | | | | | | | 同居 | |
| | | 低 | .92 (.86) | | | | | | | | | | 別居 | |
| 対人関係やこだわり等 | 他の人がしていることをささげったり、じゃまをしたりする。 | 高 | 1.94 (1.20) | .01* | | | | | | | | | 同居 | |
| | | 低 | 1.32 (1.14) | | | | | | | | | | 別居 | |
| | 大人びている。ませている。 | 高 | .43 (.74) | .03† | | | | | | | | | 同居 | |
| | | 低 | .08 (.27) | | | | | | | | | | 別居 | |
| | みんなから「○○博士」「○○教授」と思われている。(例:カレンダー博士) | 高 | .23 (.54) | .03* | | | | | | | | | 同居 | |
| 対人関係やこだわり等 | | 低 | .00 (.00) | | | | | | | | | | 別居 | |
| | 会話の仕方が形式的であり、抑揚なく話したり、間合いが取れなかったりすることがある。 | 高 | | | | | | | .88 (.83) | .07† | | | 同居 | |
| | | 低 | | | | | | | 1.38 (.96) | | | | 別居 | |
| | 共感性が乏しい。 | 高 | | | | | | | 1.40 (.78) | .08† | | | 同居 | |
| | | 低 | | | | | | | 1.77 (.59) | | | | 別居 | |
| 対人関係やこだわり等 | 周りの人が困惑するようなことも、配慮しないで言ってしまう。 | 高 | 1.15 (.88) | .01** | .06 (.89) | .01** | | | | | | | 同居 | |
| | | 低 | .60 (.81) | | .36 (.67) | | | | | | | | 別居 | |
| | 仲の良い友人がいない。 | 高 | | | | | | | .94 (.86) | .09† | | | 同居 | |
| | | 低 | | | | | | | 1.38 (.87) | | | | 別居 | |

Mann-WhitneyのU検定 † $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

4) 児と最もよく交流している祖父母の各属性の相関 (Table 3-8)

「交流の程度」では、「健康状態」($r = .32, p < .01$)、「育児協力」($r = .56, p < .01$)、「保護者との関係」($r = .23, p < .05$)に正の有意な相関があったが、「障害理解の程度」とは、相関はなかった。「健康状態の程度」では、「障害理解の程度」($r = .35, p < .01$)、「育児協力の程度」($r = .42, p < .01$)、「保護者との関係性の程度」($r = .52, p < .01$)に正の有意な相関があった。「障害理解の程度」では、「育児協力」($r = .45, p < .01$)に正の有意な相関があったが、「保護者との関係性の程度」とは、相関はなかった。「育児協力の程度」では、「保護者との関係性の程度」($r = .42, p < .01$)に正の有意な相関があった。

Table 3-8 児と最もよく交流している祖父母の属性の相関

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---------------|---|-------|-------|-------|-------|
| 1 交流の程度 | | .32** | .21 | .56** | .23* |
| 2 健康状態の程度 | | | .31** | .42** | .51** |
| 3 障害理解の程度 | | | | .45** | .21 |
| 4 育児協力の程度 | | | | | .42** |
| 5 保護者との関係性の程度 | | | | | |

** $p < .01$ * $p < .05$

4. 考察

1) 対象の概要について

研究への協力が得られた保育士は、「20 歳代」から「70 歳代」の幅広い年齢層であった。保育士の就業年数は「5 年以上 10 年未満」23 人 (22.1%) が最も多く、次いで「10 年以上 15 年未満」20 人 (19.2%) であった。保育士が発達障害児及び発達につまずきのある児を担当した年数は、「1 年」19 人 (18.3%) が最も多く、次いで「2 年」、「3 年」が 17 人 (16.4%) であり、合わせると担当年数 1 年～3 年が約 5 割であった。また、約 8 割以上の保育士が発達障害児に関する研修や勉強会の受講の経験があった。全国の保育所の 6 割以上が障害児を受け入れており (厚生労働省, 2015 b)、また、乳幼児健康診査にて発達等に問題があった児のフォロー機関として、全国の市町村の約 8 割が保育所

と連携をしている状況がある（日本臨床心理士会，2014）。本研究において、保育所における集団場面での直接支援の必要性が高まっており、本研究においても保育士の研修や勉強会等の必要性の高まりが伺えた。

発達障害児及び発達につまずきのある児の男女比はおおよそ 4 : 1 である（厚生労働省，2012）。本研究で得られた男女比においても、「男児」76 人（78.4）、「女児」13 人（12.4%）であり、これに準じる結果となった。医療機関との関わりがあったのが 40 人（41.2%）、療育機関との関わりがあったのが 56 人（57.7%）であり、5 割前後が専門機関との関わりが有り、予備調査に準拠する結果となった。祖父母との交流の有無では、81 人（83.5%）が交流有り、予備調査に準拠する結果となった。

児と最もよく交流している祖父母について述べる。「続柄」においては、最もよく交流していたのは「母方祖母」37 人（45.7%）であり、次いで「父方祖母」30 人（37.1%）であった。Boaz ら（1970）は、祖父母の続柄で、交流が多いのは、母方祖母であったことを報告している。Shira ら（2002）は、祖母は祖父よりも関係性が深く、支えとなり、父方祖母より、母方祖母の方が、より多くの支援を提供することを示した。祖父母の子育て参加状況は、「母方祖母」、「父方祖母」、「母方祖父」、「父方祖父」の順に高いという報告があり（八重樫ら，2003）、子育てに参加することは交流することに繋がり、本研究もこれに準拠する結果となった。「児との交流の頻度」においては、「週に 1 回以上」28 人（34.6%）が最も多く、次いで「毎日」25 人（30.9%）であり、5 割以上が日常的に交流をしていた。「健康状態」については、「良い」50 人（61.8%）が最も多く、次いで「普通」21 人（25.9%）であった。就学前の子どもを育てる保護者の年齢は若く、それに伴い祖父母の年齢も若く、健康であることが多く（八重樫ら，2003）、そのことが影響していると考ええる。「児の障害理解」については、「よく理解している」25 人（30.9%）が最も多く、「少し理解している」19 人（23.5%）を合わせると 5 割以上が児の障害を理解していた。しかし、「あまり理解していない」28 人（34.5%）が 2 番目に多いという結果より、祖父母の障害理解を積極的に促す働きかけが必要ではないかと考える。「育児協力」については、「よく協力している」36 人（44.4%）が最も多く、次いで「少し協力している」29 人（35.8%）であり、6 割以上の祖父母が育児協力をしていた。先行研究でも、発達障害児の祖父母が、経済的援助、買い物、家事の手伝い、子どもの世話を

していることが示されていた (Allen ら,1995; Hornby ら,1994)。また、山崎ら (2004) は、保育所に通う祖父母を対象に質問紙調査をした結果、母親の就労が「孫育て」への関わりに大きく影響しており、「孫育て」の内容は、「園の送迎」、「遊び相手になる」が多かったことを報告しており、本調査においても、保育所に通園している児を対象としていることから、母親の就労が祖父母の育児協力に影響をしていることが考えられる。

「保護者との関係性」では、「良い」44人 (54.3%) が最も多く、次いで「とても良い」17人 (21.0%) で、6割以上が祖父母と保護者の関係性は良いという結果であった。「住居」では、「別居」61人 (75.3%) が多く、「住居距離」は、「歩いていける範囲」45人 (55.6%) が最も多かったことより、別居で近くに住んでいる祖父母において、よく児と交流していることが窺えた。

2) 児の属性と最も交流している祖父母の属性の2群分けとの関係

本研究の結果からは、祖父母における児の障害の理解の程度は、児の性別や年齢とは関係なく、医療機関や療育機関との関わりに関してのみ有意差を認めた。祖父母の障害理解について、徳田ら (2002) は、障害児を持つ母親と祖父母の関係について調査し、祖父母が児の障害について理解することが、孫や保護者にとって重要であることを報告した。また、野尻 (2014) は、祖父母の障害受容を促す要因について検討し、同居しているか否か、交流の頻度とは関係せず、祖父母が「障害を聞いていること」が重要であることを報告した。Gardner ら (1994) は、障害を持っている孫を持つ祖父母は、孫を医学的治療に連れて行き、治療の手伝いや孫の教育に関係していることを報告した。また、Alison ら (2012) は、アスペルガー障害の孫の祖母は、特に医学的、療育的な情報を必要としていることを報告した。さらに、Alison ら (2012) は、自閉症スペクトラムの子どもの養育には、社会的、情緒的な負担があり、祖父母においても、満足感が低いことを報告した。そしてアスペルガー障害の孫を持つ祖母は、強いフラストレーションを持っていることも報告しており、祖父母の精神的健康についてのアプローチを示唆している。

今野 (2009) は、全国の発達障害者支援センターに、祖父母への支援について調査をした。その結果、祖父母からの相談を9割以上のセンターが受けており、相談内容として、「孫について感じる異常について専門的な意見を求めるもの」が最も多く、つぎに「孫の

ために自分がどのようなことをしてやれるかについて」、「孫に対する自分の接し方について」などの支援方法、また「孫の将来について」であった。保育所に通園している児の母親は就労していることが多く、医療機関、療育機関への送迎は、祖父母が担っている可能性がある。そのことが、祖父母の医療機関、療育機関等の専門機関との関わりを多くすることになり、診断名や、支援方法などの障害に関する知識を高め、理解を深めていることが考えられる。

発達障害者支援法において「都道府県及び市町村は、発達障害者の支援に際しては、家族も重要な援助者であるという観点から、発達障害者の家族を支援していくことが重要である。特に、家族の障害受容、発達支援の方法などについては、相談及び助言など、十分配慮された支援を行うこと。また、家族に対する支援に際しては、父母のみならず兄弟姉妹、祖父母等の支援も重要であることに配慮すること。」とされており、家族を重要な援助者にとらえ、その支援の重要性を謳っている（厚生労働省，2005）。定型発達児と異なる発達特性のある発達障害児を理解し、受容することは、援助者としての祖父母にとって、また家族支援の観点からも重要なことである。発達障害者支援法の施行後、発達障害の早期発見・早期支援が推進され、幼児期早期から医療機関や療育機関などの専門機関に繋がる発達障害及び発達が気にかかる児は増加している。そのことが、援助者としての祖父母の障害理解に正の影響を与えていることが示唆されたことは、意義深いと考える。

3) 児と最もよく交流している祖父母の属性の2群分けとつまずきチェックシートとの関係について

児と最もよく交流している祖父母の属性の2群分けとつまずきチェックシートとの関係について述べる。「障害理解の程度」では、注意欠陥多動性障害に関する領域（「不注意」、「多動性—衝動性」）の一部の項目において、障害理解が高いほど、いい影響を及ぼす可能性があった。本研究の結果、障害理解の高い群では、児は医療機関、療育機関との関わりが有意に高かったため、専門機関での支援の影響も考えられる。また、「育児協力の程度」では、学習障害に関する領域（「計算する」、「推論する」）、注意欠陥多動性障害に関する領域（「不注意」、「多動性—衝動性」）、高機能自閉症等に関する領域（「対人関係やこだわり等」）の一部の項目において、育児協力しているほうが、いい影響を及ぼ

す可能性があった。さらに「保護者との関係性の程度」では、関係性がよいほど、注意欠陥多動性障害に関する領域（「不注意」）の一部の項目にいい影響が出ていた。「居住」については、別居のほうが、学習障害の一部の項目にいい影響を及ぼす可能性があった。

しかし、「交流の程度」については、祖父母との交流がよくあるほうが、学習障害に関する領域（「聞く」、「読む」、「書く」、「推論する」）、注意欠陥多動性障害に関する領域（「不注意」、「多動性・衝動性」）、高機能自閉症等に関する領域（「対人関係やこだわり等」）の一部の項目の平均点が高くなっていた。また、「健康状態の程度」については、健康状態が良いほうが、学習障害に関する領域（「聞く」、「書く」）の一部の項目の平均点が高くなっていた。「障害理解の程度」については、障害理解ができているほうが、学習障害に関する領域（「書く」、「推論する」）の一部の項目の平均点が高くなっていた。つまり学習障害に関する領域においては、祖父母の交流や健康状態、障害理解において、いい影響はないことが考えられる。また、学習障害の徴候は、学童期以降に顕かになることが多く、本研究の対象児は年齢が低いため、関係性が表れにくいことも考えられる。

以上のことより、祖父母の属性が児に影響を及ぼすことが明らかになったが、予備調査と本調査の結果に違いが見られた。これはつまりきチェックシートの記載において、予備調査では面接での聞き取り調査であったが、本調査では自記式の郵送調査であったことが影響したと考えられる。つまりきチェックシートは「発達障害児及び発達のつまりきや気になる児」に対して記載するように提示した。面接での聞き取りでは、発達書障害児と発達のつまりきや気になる児のデータがとれたが、郵送調査では、発達障害の症状が顕著な子どものデータが収集された可能性がある。

4) 児と最も交流している祖父母の各属性の相関について

児の交流の頻度が高い群では、祖父母の健康状態はよく、育児協力をしており、保護者との関係がよかった。つまり児と交流できるということは、健康であり、育児協力ができるということである。就労している母親にとっては、祖父母の育児協力の必要を感じ、それが保護者との関係性により影響となっている可能性がある。石井ら（2014）は、育児上の特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の体験について、8名の祖父母（男性2名、女性6名）に対して、孫育児、印象的な出来事や日常生活、孫育

児に伴う感情、孫や家族に対する思いや考えをインタビュー調査した。その結果、自分自身の存在価値を認識するとともに、長い時間をかけて構築してきた夫婦間や子や孫とのつながりを価値づけていた。また、息子夫婦または娘夫婦を支える立場に身をおき続け、気遣いや見守り、家族の情緒的きずなや家族機能の安定を獲得していることを明らかにしている。祖父母が家族機能へ貢献していることが「育児協力」となり、「保護者との関係性の程度」に影響していると考えられる。さらに「育児協力」をよくすることで、児への「障害理解」が深まる機会を得られている可能性がある。保育所に通園している児の母親は就労していることが多い。障害児の母親の就労が、祖父母による援助に強く依存し、そして障害児のある子どもの預かりや送迎などを行う祖父母が多いことが報告されている（丸山，2013）。医療機関、療育機関への送迎により、専門機関との関わりができ、祖父母の障害の知識が高まり、児への「障害理解」に繋がっていることが考えられる。

5. 結語

本調査では、発達障害児及び発達につまずきのある児の祖父母は、母方祖母との交流が一番多く、健康状態、児の障害の理解、育児協力、保護者との関係において、5～6割が概ねよいという結果であった。また別居で近くに住んでいる祖父母において、よく児と交流していることが窺えた。そして、祖父母の障害の理解の程度が高い群では、児の医療機関及び療育機関との関わりが有意に多いことから、専門機関と関わることで、祖父母の障害理解に正の影響を与えていることが示唆された。祖父母の「障害理解」、「育児協力」、「保護者との関係性」が高いほど、学習障害に関する領域、注意欠陥多動性障害に関する領域、高機能自閉症等に関する領域により影響が見られた。さらに祖父母と児との交流の頻度が多いほど、祖父母の健康状態はよく、育児協力をしており、保護者との関係がよかった。つまり、児と祖父母は双方に影響を及ぼしあっていた。

引用文献

- Alison S., Greta W., Jay V., Marian C (2012) Children on Autism Spectrum: Grandmother Involvement and Family Functioning; *Journal of Research in Intellectual Disabilities*, 25, 484-494
- Allen G. Sandler, Sharon H. Warren, & Sharon A. Raver (1995) Grandparents as a Source of Support for Parents of Children With Disabilities, A Brief Report, 33 (4), 248-250
- Boaz K. Eve K (1970) Grandparenthood from the Perspective of the Developing Grandchild, *Developmental Psychology*, 3 (1), 98-105
- 繪内利啓, 宮前義和, 馬場広充, 坂井聡, 小林壽江, 植松克友, 西村健一, 佐藤宏一, 金崎知子, 玉井昌代, 杉山愛, 馬場恵子, 丸峰良子, 水嶋由紀, 田中栄美子 (2005) LD, ADHD 及び高機能自閉症児のための SST プログラム開発—平成 16 年度学部研究開発プロジェクト—, 香川大学教育実践総合研究 11, 125-139
- Gardner, J. E., Scherman, A., Mobley, D., Brown, P., & Schutter, M. (1994) Grandparents' Beliefs Regarding their Role and Relationship with Special Needs Grandchildren, 17 (2), 185-196
- 郷間英世, 圓尾奈津美, 宮路知美, 池田友美, 郷間安美子 (2008) 幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究, 京都教育大学紀, 113, 81-89
- 原口英之, 野呂文行, 神山努 (2013) 保育所における特別な配慮を要する子どもに対する支援の実態と課題—障害の診断の有無による支援の比較—, 障害科学研究 37, 103-114
- Hornby, G., & Ashworth, T. (1994) Grandparents' support for families who have children with disabilities, A survey for parents. *Journal of Child and Family Studies*, 3 (4), 403-413
- 福島忍 (2005) 少子高齢社会に向けた子ども—高齢者の世代間交流の促進に関する市町村の取り組み—長野県における保育園の中高年・高齢者保育サポーター事業の展開—,

長野大学紀要 27 (2), 25-38

兵庫県 (2011) 兵庫県高齢者居住安定確保計画

web.pref.hyogo.jp/ks26/keikaku/documents/010kourei_honbun.pdf (アクセス日
2015 年 5 月 19 日)

今野和夫 (2009) 発達障害者支援センターにおける祖父母支援センターへの質問紙調査を通してー, 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 31, 61-74

石井邦子, 荒木暁子, 小池幸子, 市原真穂, 水野芳子, 佐藤紀子, 林ひろみ, 北川良子,
小澤治美 (2014) 育児上特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の体験,
千葉看護学会誌, 20 (1), 3-10

厚生労働省 (2005) 発達障害者支援法について,

<http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0412-1e.html> (アクセス日 2015 年 12 月
18 日)

厚生労働省 (2012) 発達障害児のアセスメントツールの効果的使用とその研修について,

[http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-](http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/h24_seikabutsu-22.pdf)
[Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/h24_seikabutsu-22.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/h24_seikabutsu-22.pdf)(アクセス日 2015
年 9 月 24 日)

厚生労働省 (2015b) 現状・課題と検討の方向性 (1) 障害児支援について (2) その他
の障害福祉サービスの在り方等について,

[http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukastukan-](http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukastukan-Sanjikanshitsu-Shakaihoshoutantou/000010358.pdf)
[Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/000010358.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukastukan-Sanjikanshitsu-Shakaihoshoutantou/000010358.pdf) (アクセス日 2017 年 6 月 12 日)

前原武子, 金城育子, 稲谷ふみ枝 (2000) 続柄の違う祖父母と孫の関係, 教育心理学研
究, 48 (2), 120-127

松尾里香, 齋藤ひさ子, 中河亜希 (2014) 内的ワーキング・モデル変容からとらえる
孫の誕生による祖母の発達を構成する因子, 母性衛生, 55 (2), 444-453

丸山啓史 (2013) 障害児の母親の就労と祖父母による援助, 京都教育大学紀要, 122,
87-100

三宅康将, 伊藤良子 (2002) 発達障害児のコミュニケーション指導における情動的交流
遊びの役割, 特殊教育学研究 39 (5), 1-8

文部科学省（2003a）通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」調査結果，

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/054/shiryo/attach/1361231.htm（アクセス日 2017 年 7 月 21 日）

文部科学省（2012）通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について，

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/138729_01.pdf（アクセス日 2016 年 1 月 20 日）

日本臨床心理士会（2014）乳幼児健診における発達障害に関する市町村調査 報告書，

<http://www.jsco.jp/suggestion/sug/pdf/kensshinhoukoku140702.pdf>（アクセス日 2017 年 6 月 22 日）

野尻恵美子（2014）障害児をもつ祖父母の障害受容と両親の受容との関連，コミュニケーション障害学，31，72-79

Shira K. Louise K (2002) Grandparents of Children with Developmental Disabilities, Perceptions, Beliefs, and Involvement in Their Care, Issues in Comprehensive Pediatric Nursing, 25, 113-128

杉井潤子，泊裕子，堀智晴，早川淳，文賀淳（1994）祖父母・孫関係に関する研究—第3報—「孫育て」にみる祖父母の位置づけおよびその主観的評価，大阪市立大学生活科学部紀要，42，141-154

杉井潤子（2008）祖父母と孫との世代間関係—孫の年齢による関係性の変化—，奈良教育大学紀要，55（1），177-189

杉山登志郎，辻井正次（1999）高機能広汎性発達障害—アスペルガー症候群と高機能自閉症．ブレーン出版，東京，47-51

杉山登志郎（2007）発達障害の子どもたち，講談社，東京，26-50

諏澤宏恵（2013a）日米の実証研究にみる祖父母—孫関係の発達の变化：祖父母・親・孫のライフステージを単位とした検討，人間文化研究科年報，28，121-131

諏澤宏恵（2013b）祖父母の世代間調整役割に関する考察—青年期の女子の孫を対象と

- した質問紙調査をもとに一，小児保健研究，72 (2)，322-329
- 高橋正泰，大野博之 (2005) 乳幼児期に自閉症が疑われた男児に対する早期療育とその効果—フリー・オペラント技法を用いた指導の検討—，特殊教育学研究，42 (5)，329-340
- 徳島県教育委員会 (2006) 通常の学級に在籍している特別な支援を必要とする子どものチェックシート，
<http://www.tokushima-ec.ed.jp> (アクセス日 2017 年 6 月 12 日)
- 徳田克己，水野智美 (2002) 障害児を持つ母親と祖父母との関係 I，日本認知心理学会発表論文集，307
- 上村眞生，岡花祈一郎，若林紀乃，松井剛太，七木田敦 (2007) 世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究，幼年教育年報，29，65-71
- 内田京子 (2011) 広汎性発達障害児への読み聞かせ実践—「のはらうた」を教材とした発達の検討—，滋賀大学大学院教育学研究科論文集，14，25-36
- 八重樫牧子，江草安彦，李永喜，小河孝則，渡邊貴子 (2003)，祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響，川崎医療福祉学会誌，13 (2)，233-245
- 山崎美佐子，角間陽子，草野篤子 (2004) 異世代間におけるネットワークの可能性—祖父母と孫の交流関係から—，信州大学教育学部紀要 112，99-110

第4章 研究3：祖父母は発達障害児及び発達につまずきのある孫 にどのように関わっているのか ー当事者へのインタビュー調査ー

第1節 研究の背景と目的

序論第2節での障害児の祖父母に関する文献研究では、祖父母の思いについて示した。その内容として、孫の疾患や障害を知った時は、強い衝撃を受けているが、希望と落胆の間を揺らぎながら、息子夫婦あるいは娘夫婦を支え、気遣い、家族の機能の安定を図っていた（石井ら，2014；鳥居ら，2007）。そして、祖父母が孫の障害を受容し、理解することが、孫及びその保護者の精神的安楽につながり、障害を理解した上で、育児への協力をするのが、孫の保護者の有用なサポート源となっていたことが報告されていた（今吉ら，2015）。

本研究者は、研究1（第2章）において、発達障害もしくは発達につまずきのある児が祖父母と交流することによる影響を、保育士にインタビュー調査をした。その結果、「発達障害児及び発達につまずきのある児への影響」、「保護者への影響」、「祖父母の態度」の3つのカテゴリが抽出された。「発達障害児及び発達につまずきのある児への影響」については、質問紙調査をし、児への影響が確認された。そこで本章では、研究1（第2章）で得られた「保護者への影響」、「祖父母の態度」を参考に、発達障害児の祖父母の子育ての関与や思いを明らかにすることを目的とした。

第2節 当事者へのインタビュー調査

1. 目的

研究1（第2章）で得られた「祖父母との日常的交流における発達障害児及び発達につまずきのある児の『保護者への影響』（Table2-3）及び「発達障害児及び発達につまずきのある児の孫に対する『祖父母の態度』」（Table2-4）のサブカテゴリの内容を参考に、祖父母の子育ての関与や思いを実証的に明らかにする。

2. 研究方法

1) 研究対象

研究協力者の選定は、紹介による便宜的標本抽出法である機縁法とした。対象者の紹介の条件として、孫の発達につまずきを感じており、その孫と週に1～2回以上の関わりがあるとした。紹介された研究対象者に研究者が連絡をとり、研究協力に関する説明をしてもよいかどうかについて確認した。研究対象者に研究協力について説明する機会を得た後、インタビュー調査について了解を得た。

2) 調査時期

2016年12月から2017年8月

3) 調査方法

半構造化面接とし、研究1で得られた発達障害児の祖父母の態度や保護者への影響が明らかになるのではないかと仮説を設定した。質問項目は、①「お孫さんの育児の関わりや頻度について教えてください」、②「お孫さんの育児についてどのようなことを思っていますか」、③「お孫さんのことで気になったことを、誰かに相談したり、本等で調べたりしたことがありますか」、④「お孫さんの両親に対してどのようなことを思っていますか」であった。調査時間は1回あたり30分～40分であった。インタビューで聞きもらした場合、再度質問することの承諾を得た。面接時は対象者の了解を得て録音し、逐語録を作成した。

4) 分析方法

分析方法は質的帰納的分析とした。類似する内容を集め、類似性と相違性を検討しサブカテゴリを生成し、さらに抽象度を高めカテゴリを生成した。研究のプロセスを通して継続したスーパーバイズを受けることにより、結果の妥当性を確保した。

3. 研究結果

1) 対象者の属性

対象者の性別は、「男性」1人、「女性」6人であった。年齢は、「40歳代」1人、「50歳代」1人、「60歳代」3人、「70歳代」2人であった。続柄は、「父方祖母」3人、「母方祖父」1人、「母方祖母」2人、「保護者」1人であった。児との住居関係は、「同居」2人、「別居」5人であった。

児において、診断については、「自閉症傾向」、「自閉症」、「適応障害」、「発達障害」、「知的障害」であった。医療機関の関わりの有無は、「有」7人、「無」0名であった。療育機関の関わりの有無は、「有」6人、「無」1人であった。

2) 発達障害児及び発達につまずきのある児の祖父母の子育ての関与や思いについて

インタビューより得られた内容は、101であり、【孫との交流】、【障害理解】、【育児協力】、【保護者との関係性】、【関係機関との関わり支援】の5つのカテゴリに分類した。カテゴリを【 】、サブカテゴリを《 》、内容を「 」にて以下に示す。

【孫との交流】では、5つのサブカテゴリで構成された。《孫への余裕のある関わり》では、「叱ってもしょうがない。怪我せんとおってよかったってな」等の5の内容があった。《孫への客観的な視点》では、「私の目からみて、ちょっと遅いこともあるのかなっていうのは感じてたんですよ」等の4の内容があった。《孫をかわいいと思う気持ち》では、「ばあちゃんは全面的に、かわいい、かわいいだけなんですよ、ばあちゃんに言ったらなんでも買ってもらえとか、甘やかすんですよ、だって責任がないですからね」等の5の内容があった。《孫に好きな物を見つける手助け》では、「おじいちゃんのおかげで、貨物列車っていうすごく好きなものができた」等の5の内容があった。《他の子どもとの関わりの促し》では、「家でごろごろさせたらいかん、外に出たら、他の子ども

と仲良くなるからな、それも考えたな・・・小学校まではよく方々連れて行って、他の子どもとあそんどった、それが今では友達ができた。あれがよかったのかなって思うわな」の1の内容があった。

【障害理解】では、5のサブカテゴリで構成された。《孫の障害の受け入れ》では、「(孫の障害を)受け入れるか、受け入れないかですごく変わってくると思うんですね、受け入れようと思うところにすごく壁があると思うんです」等の3の内容があった。《病院との関わり》では、「病院に行くのも(娘と)二人でね、だから今だに病院に行くときは、私も仕事の都合をつけて、一緒に行ってますね」等の2の内容があった。《療育との関わり》では、「必ず(娘と)二人で連れて行って、療育してもらっているのを見ていましたね、そこで、どういうふうにこの子に接したらいいのかなっていうのはわかりましたね、こっちは素人だからわからないから、体をあーいうふうに使わすんだってね、親子で勉強したっていう感じですか、親子で勉強しながら育てる」等の4の内容があった。《サポートブック》では、「子どものサポートブックっていうのを作ったので、それを渡したら、ほんとにそれを何回も見ていてくれて、何時間もかけてみてくれて、それを見て、自閉症っていうのがわかったって言ってくれてね、危ないもの上にあげてくれたり、気になるものはシートで隠してくれていたり、すごくいい構造化ができていてね、有りがたかったですね」の1の内容があった。《孫への対応に関する情報》では、「今からは良いこと悪いことの善悪がついたりとか、人の気持ちがわかったりとか、今まで見えてない部分を成長していかないといけないのかなって、そのために、おばあちゃんとしてどういう支援をしていったらいいのかなって思いますね」等の5の内容があった。

【育児協力】では、3のサブカテゴリで構成された。《父方祖母の育児協力の姿勢》では、「大家族だったんで、嫁も育休があげたら、手伝えることがあったらって思ってね」等の5の内容があった。《母方祖母の育児協力の姿勢》では、「うちは実の娘だから、そこは話し合いで、できるほうがするっていうようにしましたね」等の7の内容があった。《孫の世話》では、「(孫たちは)毎日、外でお風呂しにくるのを待っているのよ、お買い物に連れて行って、そこで風船を買って」等の10の内容があった。

【保護者との関係性】では、3のサブカテゴリで構成された。《保護者への精神的フォロー》では、「夕方になったらお風呂に入れに来てくれる、その時が私にとって、人と

話せる時間になってね、ほんとに煮詰まっている状態のときに来てくれて、ほっとできる時間ができた」等の4の内容があった。《気遣い》では、「私ばかりみてもらおうと、娘も私に気をつかうみたいで、パパがみるって言ってね、お互い、そのあたりは気をつかいあってね、お互い気をつかうっていうのはいいですよ」等の9の内容があった。《家族支援》では、「わしは家族が大事じゃと思っている、特にだんながね。だんなとこれの二人がどうなるかっていうことじゃやの、だんなが手を挙げてしまったらもう終わりやからな、でもこのだんなはそういうことなかったからな、男として本当につらいと思うわ」等の7の内容があった。

【関係機関との関わり支援】では、6のサブカテゴリで構成された。《病院との関わり》、《療育との関わり》においては、【関係機関との関わり支援】及び【障害理解】と関係すると考え、「再掲」とした。《保育所・学校との関わり》では、「毎日学校に参観に行った」等の8の内容があった。《支援学級・支援学校への促し》では、「支援学級に入るといことは、母親が決めて、私はそれがいいんじゃないかって言いました」等の5の内容があった。《保護者が相談できる場所を増やす促し》では、「PTAの役もしなさいよって言う、それで家のことができないんであれば、私がしたらいいんだし、親にばかり相談しないで、他の人にも相談できるようにと思ってね」等の2の内容があった。《社会活動》では、「(ボランティアで) わかりやすいように紙に書いたり、この家でしていることをしたら、すごくコミュニケーションがとれたって言われてね」等の3の内容があった。

Table 4-1 祖父母の育児の関与と思いについてのインタビュー

| カテゴリ | サブカテゴリ | No | 内容 |
|-------|----------------|----|--|
| 孫との交流 | 孫への余裕のある関わり | 1 | 叱つてもしょうがない、怪我せんとおってよかったってな |
| | | 2 | 大きくなったらばあちゃんとか入らなくてね、なんでかっていうと、お母さんだったら、体も几帳面にきれいに洗うけど、ばあちゃんだったら、「今日はいいか」って、融通がきくからね |
| | | 3 | そりゃ、かわいいわな、だけど、一緒には住めんで、一緒にいたら、腹が立つこともあるけど、離れているから、やっていける。気になることがあっても、言わないですむ |
| | | 4 | 孫が幼稚園のころに、「おばあちゃん、きらい」って言われたことがあって、ショックだったけど、あーこんなことも言えるようになったんやって思ってね、そのときに「ありがと」って言ったら、「なんでそんなこというの」って言われてね、「なんでやらね、先生に聞いてみたら」って言ったら、「そんなこと言えない」って、悪いこと言っているんやってわかっているんやって、それでうれしくなってね |
| | | 5 | 行動パターンがわかっているの、おそらくあのビデオ屋だとかってね、そやから、最後まで見失うことはなかったね |
| | 孫への客観的な視点 | 6 | 私の目からみて、ちょっと遅いこともあるのかなっていうのは感じてたんですよ |
| | | 7 | 自分の子どもをみるのと孫をみるのでは違うと思うんです、ちょっとワンクッションおいてね、私も幼稚園の仕事をしているから、猫かわいがりはしなかったんですけど、ちょっとだけ距離をおいて |
| | | 8 | どうい動きをするのかわかって、教師の目っていうか、おばあちゃんなんだけど、そういう目で見ていることがあったね |
| | | 9 | この子も結構叱られてきたと思うんですよ、それが心の傷として残っているんじゃないかって思います |
| | 孫をかわいと思う気持ち | 10 | ばあちゃんは全面的に、かわいい、かわいいだけなんですよ、ばあちゃんに言ったらなんでも買ってもらえとか、甘やかすんですよ、だって責任がないですからね |
| | | 11 | 孫だからかわいいから、どんな状態でも |
| | | 12 | ものすごくかわいがってくれてね。もうじいちゃんの膝の上から離れないって感じて、子どももじいちゃんが抱っこすると泣きやんでね |
| | | 13 | この子は小さくて見た目はかわいいから、女の子からしたら「かわいい、かわいい」って可愛がってくれているんですね、それは本当にうれしいことです |
| | 孫に好きな物を見つける手助け | 14 | みんなに可愛がられて成長させてもらってるなって思ってね |
| | | 15 | おじいちゃんのおかげで、貨物列車っていうすごく好きなものができた |
| | | 16 | 家の子は、好きなものをおじいちゃんが見つけてくれて、本を読んでもくれたり、ビデオを買ってくれたので、ビデオをずっと見てくれているし、支援がしやすい子に今は育ってくれている、私はそれをすごく感謝しています、好きなものがあるって、ほんとに強みだよなって、教室の先生が言ってくれて、これを見て待ってねって言ったら待つことができるねって、これはほんとにじいちゃんのお蔭だと思っています |
| | | 17 | 好きなものがあるので、一人で過ごせる時間ができる |
| | | 18 | おいしいごはん作ってあげないと思ってる |
| | | 19 | さかなくんに一目合わせてあげたいって思ってね。電話して行けることになったんです。そういう風なことしか、私には何もできないんだけど |
| | | 20 | 家でごろごろさせたいかん、外に出たら、他の子どもと仲良くなるかな、それも考えたな……小学校まではよく方々連れていって、他の子どもとあそんどった、それが今では友達ができた。あれがよかったのかなって思うわな |
| 障害理解 | 孫の障害の受け入れ | 21 | (孫の障害を)受け入れるか、受け入れないかですごく変わってくると思うんですね、受け入れようと思うところにすごく壁があると思うんです |
| | | 22 | そこで(発達支援センター)そう言われたって聞いたときは「あーっ、やっぱりな」っていうのはあったんです |
| | 病院との関わり | 23 | 成人するまでに、なんとかなってくれたらって思ってね。そんなことも夢見てるんです。 |
| | | 24 | 病院に行くのも(娘と)二人でね、だから今だに病院に行くときは、私も仕事の都合をつけて、一緒に行ってますね |
| | | 25 | そう、主治医がいるんでね、その先生に相談しながら育てていきましたね、先生っていう存在は心の支えになってたんじゃないかな |
| | 療育との関わり | 26 | 必ず(娘と)二人で連れていって、療育してもらっているのを見ていましたね、そこで、どういふうはこの子に接したらいいのかわかっていたね、こっちは素人だからわからないから、体をあーいふうに使わすんだってね、親子で勉強したっていう感じですか、親子で勉強しながら育てる |
| | | 27 | 保育園行きながら、療育にも行ってましたね、私は午前中働いて、お母さんは午後から働いてね、だから、朝は娘が保育園に送って、帰りは私が迎えに行ってるいふうにして、療育は私と娘と二人で連れていってね |
| | | 28 | いろんな人が関わってもらえるようにしてもらえればって思う、小さいときからの関わりが大切だと思うしね、私は療育の人とかの関わりがあったからよかったと思う |
| | | 29 | 特別な教室に通ってね。嫁が送れないときは、私が送り迎えしましたよ |
| | サポートブック | 30 | 子どものサポートブックっていうのを作ったので、それを渡したら、ほんとにそれを何回も見ていてくれて、何時間もかけてみてくれて、それを見て、自閉症っていうのがわかったって言ってくれてね、危ないものの上にあげてくれたり、気になるものはシーツで隠してくれていたり、すごくいい構造化ができていてね、有りがたかったですね |
| | | 31 | 今からは良いこと悪いことの善悪がついたりとか、人の気持ちがわかったりとか、今まで見えてない部分を成長していかないといけないのになって、そのために、おばあちゃんとしてどうい支援をしていったらいいのかわかっていると思いますね |
| | 孫への対応に関する情報 | 32 | 苦手なところが克服できたらいと思うんだけどね。そのためにどうしたらいいのかわかっていることですよ |
| | | 33 | 孫がどうい風で学校で過ごしているのかわかっている気になってたんだけど、少しでも知れてよかったでした |
| | | 34 | 支援学級のことやその子を知ること |
| | | 35 | 友達関係とか、今から心配になることもあるのかなってね |

続く

Table 4-1 祖父母の育児の関与と思いについてのインタビュー

| 続き | | | | |
|------|---|--------------|--|--|
| カテゴリ | サブカテゴリ | No | 内容 | |
| 育児協力 | 父方祖母の育児協力の姿勢 | 36 | 大家族だったんで、嫁も育児があげたら、手伝えることがあったらって思ってた | |
| | | 37 | 私も心配性なんで、色んなこと知っておきたいという気持ちが高い人間なので、息子の家に行く機会があると「ラッキー」って思うんです | |
| | | 38 | 子育ても母親から聞いてきたら「こうしたらいいんじゃないの」って言ったけど、ああして、こうしてって強制的には言わないようにしていたわ | |
| | | 39 | 嫁は言葉数が少なくてね、こっちがしゃべっても一方通行みたいな感じがしてね、言葉のキャッチボールができないって思うことがあるのよね | |
| | | 40 | 子育てしているとは言わないけど私も参加させてもらってるなって思うんです | |
| | 母方祖母の育児協力の姿勢 | 41 | うちは実の娘だから、そこは話し合いで、できるほうがするっていうようにしましたね | |
| | | 42 | ほんとの親子だから、遠慮せずに、やりやすかったですね、お嫁さんとはそのあたりはちょっと違うのかな | |
| | | 43 | 娘の近くにいたら面倒を見られるかなと思ってな | |
| | | 44 | 娘と私がどっちかが見て、どっちかが手が離れるっていうのは、お互い余裕ができますよね、どっちかが交代でやればいいんだから。できるほうがする | |
| | | 45 | がんばらなくっちゃっていう感じがな。無我夢中でやっていたんでしょね、(娘と)二人でこの子を育てるっていう感じ | |
| | 孫の世話 | 46 | この子は未熟児で生まれてね、体重が1300gで、早産で7か月でできてね。産まれて2か月近くは国立病院に入院していて、だから、ほんとに母親(娘)と二人でこの子を育ててたって言う感じ | |
| | | 47 | あの子が小さい時から私は勤めていてね、今でも勤めているんですけどね、この子が小さいときは、午前中のアルバイトだったから、午前中だけ行ってっていう感じで育てましたけど | |
| | | 48 | (孫たちは)毎日、外でお風呂しにくるのを待っているのよ、お買い物に連れて行って、そこで風船を買って | |
| | | 49 | 毎日風呂に入れるようになったんやな | |
| | | 50 | 散歩もさせよったな、2番目の子を、自転車に乗って連れて行ってた | |
| | | 51 | 貨物列車が載った本とビデオを買ってやって、家でそれをずっと見ていたな | |
| | | 52 | 汽車を見に行こうって、連れていってな、柵のところで汽車を待っているところに、ちょうど貨物列車が通って、そのときに、貨物列車の人が手を挙げてくれてね、それから、もう、貨物列車が好きになって。貨物列車だけ好き | |
| | | 53 | これ読んで、あれ読んでって、本を読んでくれるのはいいじゃんって感じで | |
| | | 54 | 子どもが小さいときは、親が仕事に行くときは、家に預けに来てな、それから私が保育園に送っていつたり、帰りは連れて帰ったりな、夏休みのときは、ここでお風呂に入って帰ったり、晩御飯を食べて帰ったりな。小さいころはずっとそうだったな | |
| | | 55 | お風呂なんか大変だったけど、そこはおじいちゃんたちがやってくれたから助かった | |
| | | 56 | じいちゃんが来ると、二人ともほんとに態度ががらって変わってね、じいちゃんに、あっち来て、こっち来てって引っ張りまわして、ぼくのじいちゃんって感じで | |
| | | 57 | じいさんだから連れていってくれると思って、すぐ引っ張りだすんよ | |
| | | 保護者への精神的フォロー | 58 | 夕方になったらお風呂に入りに来てくれる、その時が私にとって、人と話せる時間になってね、ほんとに煮詰まっている状態のときに来てくれて、ほっとできる時間ができた |
| | | | 59 | 私はほんとに子どもと過ごすことだけだったので、誰かと話すことが少なくて、そこを母に聞いてもらって、傾聴してもらって、元気の出ることを言ってもらって、そのときそのときに応じた励ましの言葉をもらいました |
| | | | 60 | あかちゃんの時から育てにくい子だったね、じいちゃんが帰ってきてくれると、子どもを抱っこしてくれるし、散歩に連れて行ってくれるし、ほんとにその時が私の休息の時間だった |
| | | | 61 | 「自分が子どもにどう接したらいいのかわからない」って、そのときは私は言葉がつまんだと思うんですけどね、「でも、あなたがやりたいようにやればいいやん、マニュアルなんてないから、可愛かったら抱きめたいいいし、抱っこしたかったら抱っこしたいいいし、そんなに考えなくていいやん」って言ったんですけどね |
| 62 | 私ばかりみてもらおうと、娘も私に気をつかうみたいで、パパがみるって言ってね、お互い、そのあたりは気をつかいあってね、お互い気をつかうっていうのはいいですよ | | | |
| 63 | ケンカしなくなかったんでね、私は波風をたてなくなかったっていうのがあってね | | | |
| 64 | 私は、彼女に「こうしたらいいよ、あしたらいいよ」ってあまり言わないようにしていたんです | | | |
| 65 | 孫は1500gの未熟児だったんですけどね、母親として未熟児で生まれてしまったというのがあって、背負っているものがあるんじゃないかって思っていたんでね | | | |
| 66 | 自分も石橋たいたいていたって思います。もつとぶつかってもよかったのかなって思いますね | | | |
| 67 | 私はそんなに感じてないんですけど、彼女からしたら他人やから一緒に住んでたら、いろいろ思うこともあったんかな | | | |
| 68 | 時間をおいて、「あのときはこうしたらよかったんちゃうかな」「こういう方法もあったんだちゃうかな」っていうのは言っていましたね | | | |
| 69 | まあ、母親のプライドもあるからね | | | |
| 70 | 今まで、ほんまにあかんのかなって思っていた子が、学校に行っているし、嫁の努力のお陰なんかなって思ったりしますね | | | |
| 家族支援 | 気遣い | | 71 | わしは家族が大事じゃと思っている、特にだんながね。だんなとこれの二人がどうなるかっていうことじゃやの、だんなが手を挙げてしまったらもう終わりやからな、でもこのだんなはそういうことなかったからな、男として本当につらいと思うわ |
| | | | 72 | 子どものお父さんがどういふ態度をとるかかっていうのがほんとに大事、変な態度とられたら困るしな、まあ、男としたりがくつとくときがあるわな、文句いわずにきたっていうのは、ほんまに立派なもんや |
| | | 73 | 夫婦が大事じゃ | |
| | | 74 | 自分たち家族で生活するのも責任感がでるのよね、いいかなって | |
| | | 75 | 息子たち夫婦がやりたいようにやったらいいと思っていたんです | |
| | | 76 | (息子が)子どもたちのことは可愛がってくれているので、それがなによりかなって思います | |
| | | 77 | (息子に)子どものことちゃんとしたってねって言うようにしてますけどね | |

続く

Table 4-1 祖父母の育児の関与と意思についてのインタビュー

| 続き | | | |
|-------------|-------------------|-----|--|
| カテゴリ | サブカテゴリ | No | 内容 |
| 関係機関との関わり支援 | 病院との関わり(再掲) | 78 | 病院に行くのも(娘と)二人でね、だから今だに病院に行くときは、私も仕事の都合をつけて、一緒に行ってますね |
| | | 79 | そう、主治医がいるんでね、その先生に相談しながら育てていましたね、先生って存在は心の支えになってたんじゃないかな |
| | 療育との関わり(再掲) | 80 | 必ず(娘と)二人で連れていって、療育してもらっているのを見ていましたね、そこで、どういふうにこの子に接したらいいのかなっていうのはわかりましたね、こっちは素人だからわからないから、体をあーいふうに使わずんだってね、親子で勉強したっていう感じですか、親子で勉強しながら育てる |
| | | 81 | 保育園行きながら、療育にも行っていましたね、私は午前中働いて、お母さんは午後から働いてね、だから、朝は娘が保育園に送って、帰りは私が迎えに行ってるというふうにして、療育は私と娘と二人で連れていってね |
| | | 82 | いろんな人が関わってもらえるようにしてもらえればって思う、小さいときからの関わりが大切だと思うしね、私は療育の人とかの関わりがあったからよかったと思う |
| | | 83 | 特別な教室に通ってね。嫁が送れないときは、私が送り迎えしましたよ |
| | | 84 | 毎日学校に参観に行った |
| | 保育所・学校との関わり | 85 | 親2人と私の3人で交代で、何か月も学校に行きつたな |
| | | 86 | 親がおつたら猫かぶって、私が行ったら立たせるんよ、まあ、じっと見とつたらいいわと思ってな、我慢してってな、なんちゃ、先生には言わんようにな |
| | | 87 | 休ませたら、学校に行きづらくなるから、行かなくなったら、引きこもりになってしまう、だから学校は休ませなんだ、行きたくないときは、なかなか服を着ない、それでも着せて、連れていったけどな |
| | | 88 | この子は2歳のときから保育園に行ってたね、先生方はほんとにこの子を可愛がって下さってね。それは有りがたいなって思っています |
| | | 89 | 担任の先生がほんとにその子のことをすごく考えてくださってね |
| | | 90 | やっぱり生活していけないと困るんでね、学校で自立に向けてそういうことも教えて下さっているんやなって思ってたね。心強かったです |
| | | 91 | 運動会も行っていました。お母さんが上手に絵にして、何をするのかを孫に伝えていたからね。学校の参観日にも行っていましたよ |
| | | 92 | 支援学級に入るということは、母親が決めて、私はそれがいいんじゃないかって言いました |
| | 支援学級・支援学校への促し | 93 | 母親には、「この子にとっては少ない人数の中でね、しっかりとみてもらった方がいいと思うよ」っていうのは言ったんですよ |
| | | 94 | だから小学校にあがったときには、この子にとっては支援学級のほうがいいのかなって思ってたんですけど、母親のほうもそれを選んだからね、ちょっとホッとしたんです |
| | | 95 | 子どもを支援学校に入れるときも、主人の母親に相談してね、こういふところに入れるから、親戚からなんか言われたときには縁を切ってもらっても構わんからっていったら、家の親戚にはそういう人は一人もおらんから心配しなくていいって言ってくれたんです |
| | | 96 | 私もその学校のほうがいいって思っていたって言ってきて、後押ししてくれた、ほんとにそういう精神的な支えがいっぱいあったのでやってこれました |
| | 保護者が相談できる場所を増やす促し | 97 | PTAの役もしないよって言う、それで家のことができないんであれば、私がしたらいいんだし、親にばかり相談しないで、他の人にも相談できるようにと思ってね |
| | | 98 | 役場のほうからこんなことがありますよってわざわざ言ってこないで、こちらから言わないといけないうところがある、でも支援学校の知り合いが教えてくれるから、行政のサービスを使える、だから、どんどん外に出さないよって言うの、娘は出不精だったけど、今は一生懸命やっていますよ |
| | 社会活動 | 99 | (ボランティアで)わかりやすいように紙に書いたり、この家でしていることをしたら、すぐコミュニケーションがとれたって言われてね |
| | | 100 | おばあちゃんは、子どもたちを見てくれたので、今では、障害者のボランティアをしています。楽しそうにね |
| | | 101 | 昔は仕事人間やったから、障害者のボランティアするなんて思わなかった |

4. 考察

1) 孫との交流について

【孫との交流】においては、「孫との余裕のある関わり」、「孫への客観的な視点」、「孫をかわいと思う気持ち」、「孫に好きなものをみつける手助け」、「他の子どもとの関わりの促し」の5つのサブカテゴリにより構成された。当事者のインタビューでは、祖父母は、孫に対して、かわいと思う気持ちと余裕のある関わりの中、客観的な視点も持ち合わせており、祖父母の愛情とゆとりが感じられた。そして、「孫に好きな物を見つける手助け」が、孫にとっては興味や関心を広げることになり、それが生活を豊かにし、好循環へと変わっていったことが示されていた。

研究1（第2章）での、質問紙調査の結果において、祖父母と交流がある児は、「人との関わりが上手になる」ことが示された。本章でも、「他のこどもとの関わりの促し」をしていることが実証され、研究1との関連性が確認された。同年代の子どもとの友人関係の構築に困難性のある発達障害児にとって、祖父母のこのような働きかけは、非常に重要と考えられる。

また、本章での当事者からのインタビューから得られた【孫との交流】でのサブカテゴリ（Table 4-1）と、研究1（第2章）の保育士のインタビューの中から抽出された【祖父母の態度】のサブカテゴリ（Table 2-4）とは類似したものとなっていた。本章でのサブカテゴリである「孫への余裕のある関わり」においては、【祖父母の態度】の「ゆっくりと関わっている」、「おおらかな目と心でみている」が類似したものとなっており、「孫への客観的な視点」では、【祖父母の態度】の「客観的にみている」、「冷静にみている」と類似していた。また、「孫をかわいと思う気持ち」においては、【祖父母の態度】の「甘えさせている」、「寄り添っている」が類似していると考えられる。さらに、「孫に好きな物を見つける手助け」では、【祖父母の態度】の「色々なことを教えている」、「五感を使えるようなところに連れて行っている」と類似していると考えられる。つまり、保育士が発達障害児に影響を与えると捉えていた祖父母の態度は、当事者のインタビューからも確認された。

2) 障害理解について

【障害理解】においては、《孫の障害の受け入れ》、《病院との関わり》、《療育との関わり》、《サポートブック》、《孫への対応に関する情報》の5つのサブカテゴリにより構成された。

インタビューの中で、「・・・受け入れようと思うところにすごく壁がある」との内容があり、障害受容の難しさが示されていた。また、「成人するまでに、なんとかなってくれたらって思ってた。そんなことも夢見てるんです」と、希望を語っていた。石井ら(2014)は、育児上の特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の体験についてのインタビュー調査より、孫の疾患や障害を知った時は強い衝撃を受け、困難を抱えながらも希望と落胆の間を揺らいでいることを報告しており、本調査においても同様の内容が確認された。

研究2(第3章)において、祖父母の障害の理解が高いほど医療機関、療育機関との関わりが多くなっていたことが示された。本章においても、《病院との関わり》では、「そう、主治医がいるんでね、その先生に相談しながら育てていきましたね、先生っていうのは心の支えになっていたんじゃないかな」から主治医に相談している内容があった。また、《療育機関との関わり》について、「必ず(娘と)二人で連れて行って、療育してもらっているのを見ていましたね。そこでどういうふうにこの子に接したらいいのかわかっていうのがわかりましたね。」から療育機関への送迎をし、障害の理解を深めていたことが伺われ、研究2との関連性が確認された。

《サポートブック》は児の特徴や支援方法について記載されたものであり、情報を共有するツールである。インタビューの中で障害を理解する上で、《サポートブック》の有用性が示されていた。一方で「・・・おばあちゃんとしてどういう支援をしていったらいいかなって思います」等、《孫への対応に関する情報》を必要としていることが語られていた。Alisonら(2012)は、アスペルガー障害の孫の祖母は、特に医学的、療育的な情報を必要としていることを報告している。また、今野(2009)は、全国の発達障害者支援センターに、祖父母への支援について調査をした結果、祖父母からの相談内容として、「孫について感じる異常について専門的な意見を求めるもの」が最も多く、つぎに「孫のために、自分がどのようなことをしてやれるかについて」であったことを報告

しており、祖父母への情報提供についてのアプローチの必要性が、本調査でも示された。

3) 育児協力について

【育児協力】では、《父方祖母の育児協力の姿勢》、《母方祖母の育児協力の姿勢》、《孫の世話》の3つのサブカテゴリにより構成された。

《父方祖母の育児協力の姿勢》では、「・・・手伝えることがあったらって思ってね」、「子育ても母親から聞いてきたら『こうしたらいいんじゃないの』って言ったけど、あして、こうしてって強制的には言わないようにしていたわ」等の内容があった。石井ら（2014）は、育児上の特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の体験を明らかにしており、祖父母は孫育児の中心になろうとせず、常に見守る立場にしようとしていたと述べていた。本研究においても、孫育児の中心にならない姿勢が確認された。

一方、《母方祖母の育児協力の姿勢》においては、「・・・できるほうがする」、「・・・遠慮せずにやりやすかったですね。」等の内容があり、積極的に育児に関わっている様子であった。

また、《孫の世話》では、食事、入浴などの日常生活や散歩等、実際的な世話を担っていた。研究1（第2章）での、質問紙調査の結果において、祖父母と交流がある児は、「絵本を見る」ことが示された。本章でも、「これ読んで、あれ読んでって、本を読んでくれるのはじいちゃんって感じで」との内容があり、研究1との関連性が確認された。

4) 保護者との関係性について

【保護者との関係性】は、《保護者への精神的フォロー》、《気遣い》、《家族支援》の3つのサブカテゴリにより構成された。

Barry ら（2008）は、発達障害児の祖母の無償で提供してくれる休息と子どもの世話は、重要な助けであると評価しており、祖母の情緒的サポートは、発達障害児の母親の心理的な健康を促すとしている。本研究で抽出されたサブカテゴリの《保護者への精神的フォロー》では、休息时间、元気の出る言葉、励ましの言葉の提供、子育てのマニュアルに縛られないように言う等の内容があった。このような関わりは、研究1（第2章）の保育士のインタビューの中から抽出された【保護者への影響】のサブカテゴリ（Table

2-3) と関連したものとなっていた。つまり、保護者が休息時間を得ることは、《育児負担が減る》、《余裕が持てる》、《気持が落ち着く》ことに繋がる。そして、祖父母から元気の出る言葉や励ましの言葉をもらえることで、保護者は、《気持が楽になる》、《前向きになる》ことに繋がると考える。

《気遣い》では、「・・・お互い、そのあたりは気をつかいあってね・・・」の内容より、祖父母と保護者の双方への気遣いが確認された。また、「孫は 1500 g の未熟児だったんですね。母親としては未熟児で生まれてしまったというのがあって、背負っているものがあるんじゃないかなって思っていたんでね」の内容より、母親が責任を感じているのではないかという保護者への気遣い等の内容があった。石井ら（2014）は、祖父母は孫の育児の中心である娘もしくは嫁の心情にとりわけ深い思いを寄せていたことを報告しており、本研究においても、娘もしくは嫁の心情への気遣いが確認された。

《家族支援》では、家族や夫婦の大切さや在り方について内容があった。Miller ら（2011）は、障害児の祖父母の主要な体験として、家族関係を維持する体験を、家族の間に入ったり、家族の葛藤を整えることを挙げた。本研究においても、孫の父親への思い、孫の両親への思い等、孫の家族に対しての思いが確認された。

5) 関係機関との関わり支援について

【関係機関との関わり支援】では、《病院との関わり（再掲）》、《療育との関わり（再掲）》、《保育所・学校との関わり》、《支援学級・支援学校への促し》、《保護者が相談できる場所を増やす促し》、《社会活動》の6つのサブカテゴリにより構成された。

Gardner ら（1994）は、障害を持っている孫を持つ祖父母は、孫を医学的治療に連れて行き、治療の手伝いや孫の教育に関係していることを報告している。乳幼児期の自閉症にとって、早期療育は、その子ども自身や家族に良い影響を与え（江崎，1998）、幼児の発達特性に気づき、対応の見通しを得ることが、二次的な問題の防止やスムーズな就学に重要である（小枝，2007）。本研究においても、《病院との関わり（再掲）》、《療育との関わり（再掲）》を積極的にしていることが示されていた。また、「毎日、学校に行った」ことや「休ませたら、学校に行きづらくなるから、行かさなかったら引きこも

りになってしまう、だから学校は休まसानだ、行きたくないときは、なかなか服を着ない、それでも着せて、連れていったけどな」等、孫を学校に行くように促していたことが示されており、《保育所・学校との関わり》においても、二次的な問題や就学に良い影響を与えていることが推測されることより、祖父母からのこのような関わりは、大変意義深いことと考えられる。

《支援学級・支援学校への促し》では、「支援学級に入るということは、母親が決めて、私はそれがいいんじゃないかって言いました」、「母親には、『この子にとっては少ない人数の中でね、しっかりみてもらったほうがいいと思うよ』っていうのは言ったんですよ」等、支援学級に入ることへの後押しや促しをする内容があった。また、今野（2009）は、祖父母のほうが両親より状況を客観的にみられるところがあり、孫に対する愛情と現実を客観的に見て、素直に「行動に対する疑問」をみることができる立場にあると述べていた。本研究においても、孫の特徴を客観的にとらえ、支援学級等へ促していることが示された。

《保護者が相談できる場所を増やす促し》においては、近年拡充してきた行政サービスの情報を求め、またどう利用するかという視点で、PTA や親どうしのつながり、等家族外へのアクセスを促している。他者に相談することで問題を解決していける能力となり、重要な関わりであることは言うまでもない。これは、リサーチした先行研究では確認できなかった内容であり、新たな視点となった。

孫に対して祖父母ができることを、より多く自覚するほど、自己の在り方や人生を受容し、人生の展望や目的を持つと言われている（稲谷ら，2006）。本研究で得られた《社会活動》では、孫との関わりで得た知識が、障害者ボランティアにつながり、新たな社会活動へと発展していったことが示された。これは、自身の今後の展望や目的を持ちながら生活することに繋がっているのではないかと考えられる。

5. 結語

本研究のインタビューの内容を質的帰納的分析した結果、【孫との交流】、【障害理解】、【育児協力】、【保護者との関係性】、【関係機関との関わり支援】の5つのカテゴリに分類した。【孫との交流】では、《孫との余裕のある関わり》、《孫への客観的な視点》、

《孫をかわいいと思う気持ち》、《孫に好きなものをみつける手助け》、《他の子どもとの関わりの促し》の5つのサブカテゴリにより構成された。【障害理解】では、《孫の障害の受け入れ》、《病院との関わり》、《療育との関わり》、《サポートブック》、《孫への対応に関する情報》の5つのサブカテゴリにより構成された。【育児協力】では、《父方祖母の育児協力の姿勢》、《母方祖母の育児協力の姿勢》、《孫の世話》の3つのサブカテゴリにより構成された。【保護者との関係性】では、《保護者への精神的フォロー》、《気遣い》、《家族支援》の3つのサブカテゴリにより構成された。【関係機関との関わり支援】では、《病院との関わり（再掲）》、《療育との関わり（再掲）》、《保育所・学校との関わり》、《支援学級・支援学校への促し》、《保護者が相談できる場所を増やす促し》、《社会活動》の6つのサブカテゴリにより構成された。また、研究1（第2章）、研究2（第3章）で得られた結果に関連した内容が確認された。しかしながら、今回、調査に協力いただけた対象者は、比較的良好な保護者祖父母関係があり、児の障害の理解が進んでおり、そこから導き出された結果は、偏りを十分考慮に入れる必要がある。今後は、偏りをなくすことを目的に、調査対象を拡大し研究を継続していきたい。

引用文献

- Alison S., Greta W., Jay V., Marian C (2012) Children on Autism Spectrum: Grandmother Involvement and Family Functioning, *Journal of Research in Intellectual Disabilities*, 25, 484-494
- Barry T., Catherine W., Diane H.M (2008) Grandmother Support for Parents of Children With Disabilities, *Gender Differences in Parenting Stress, Families Systems. & Health*, 26 (2), 135 - 146
- 江崎路子 (1998) 障害児の早期療育－障害児と親への援助効果の評価－, *日本小児科学学会雑誌*, 102 (1), 58 - 67
- Gardner, J. E., Scherman, A., Mobley, D., Brown, P., & Schutter, M. (1994) Grandparents' Beliefs Regarding their Role and Relationship with Special Needs Grandchildren, *EDUCATION AND TREATMENT OF CHILDREN*, 17 (2), 185-196
- 今野和夫 (2009) 発達障害者支援センターにおける祖父母支援－センターへの質問紙調査を通して－, *秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要*, 31, 61-74
- 今吉千尋, 稲谷ふみ枝 (2015) 障碍のある子どもをもつ母親の育児不安に対する祖父母サポート機能に関する研究, *久留米大学心理学研究*, 14, 1-6
- 稲谷ふみ枝, 前原 武子, 津田 彰 (2006) 高齢者の Psychological well-being と祖父母機能の関係, *健康支援*, 8 (2), 106-116
- 石井邦子, 荒木暁子, 小池幸子, 市原真穂, 水野芳子, 佐藤紀子, 林ひろみ, 北川良子, 小澤治美 (2014) 育児上特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の体験, *千葉看護学会誌*, 20 (1), 3-10
- 小枝達也 (2007) 軽度発達障害児の発見と対応システムおよびそのマニュアル開発に関する研究, 厚生労働省, 科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業 18 年度総括・分担研究報告
- Miller, E ., Buys ,L .,Woodbridge , S (2011) Impact disability on families ; grandparents perspective *Journal of Intellectual Disability Research*, 56 (1), 102-

110

鳥居奈津子, 横田碧 (2007) ダウン症児の家庭内に祖母が存在する意味, 家族看護研究,
13 (2), 95

第5章 研究結果の概要と総合的考察及び今後の課題

第1節 研究結果の概要

本研究の目的は、祖父母と発達障害児及び発達につまずきのある児の交流について、祖父母が児にどのような関わりをしているのか、また児はどのような影響を受けているのかを明らかにすることである。研究の構成は、研究1、研究2、研究3の3部構成とした。

研究1では、児と祖父母が交流することによる影響を探索的に把握するため、保育士へインタビュー調査をした。そして、把握した内容を実証的に明らかにするため、児と祖父母が交流することによる影響に関する質問紙を作成し、郵送調査をした。

35名の保育士にインタビュー調査をした結果、【児への影響】、【保護者への影響】、【祖父母の態度】が見いだされた。祖父母と関わることによる【児への影響】では、《コミュニケーションが上手になる》、《人との関わりが上手になる》、《人の話が聞けるようになる》、《気持ちをコントロールできるようになる》、《愛情をもらえている》、《守られている》、《刺激をもらえている》、《協調性が養える》、《物の貸し借りができる》、《優しくなる》、《相手の気持ちを考えられる》、《心が安定する》、《落ち着きのある子に育つ》、《心や情緒が豊かに育つ》、《甘え方が上手になる》、《通園時間が安定する》、《親が精神的に安定することで子どもが落ち着く》、《定型発達と同等の発達を期待されて苦しむ》であった。【保護者への影響】では、《育児負担が減る》、《相談ができる》、《余裕が持てる》、《気持ちが落ち着く》、《気持ちが楽になる》、《前向きになる》、《育て方が悪いと祖父母から責められる》であった。【祖父母の態度】では、《ゆっくりと関わっている》、《おおらかな目と心でみている》、《客観的にみている》、《冷静にみている》、《甘えさせている》、《寄り添っている》、《お行儀や生活習慣を身につけさせている》、《色々なことを教えている》、《五感を使えるようなところに連れて行っている》、《送迎の援助をしている》、《自然と子どもの発達に合った遊びをさせている》、《障害の理解が不十分である》、《多動の子を

みるのは大変である」であった。

次に、保育士のインタビューで得られた「祖父母との日常的交流における発達障害及び発達につまずきのある児への影響」(Table 2-2)のサブカテゴリの内容を、実証的に明らかにするため、「祖父母との交流が孫(発達障害児または疑いを含む)に与える影響に関する質問紙」を作成し、調査した。その結果、概ね祖父母との交流は良いとの結果が得られた。また、祖父母との交流において正の影響が示唆されたサブカテゴリは、「人との関わりが上手になる・甘え方が上手になる」、「心や情緒が豊かに育つ」、「依存的になる」、「あいさつができる」、「絵本を見る」であった。

研究2では、発達障害児及び発達につまずきのある児が、祖父母と交流することによる児の行動発達上の評価への影響について、チェックシートⅢつまずきチェックシート[幼稚園用](以下つまずきチェックシート)を用いて、保育士に調査をした。まず、予備調査として、小規模に保育士への聞き取り調査をした。予備調査にて、祖父母と交流することによって児の行動発達上の評価への影響が示唆されたため、統計的に信頼性を高めるために、対象地域、サンプル数を拡大し、本調査を実施した。

予備調査では、35名の保育士へ調査をした。その結果、祖父母の関わりにより、学習障害に関する領域の「聞く」、「話す」、「読む」に正の影響が示唆された。また、注意欠陥多動性障害に関する領域の「不注意」、「多動性－衝動性」や高機能自閉症に関する「対人関係やこだわり等」の領域においても正の影響があることが示唆された。

本調査では、300名の保育士に郵送調査をし、104名の回答が得られた。つまずきチェックシートの調査に加え、児の属性(性別、年齢、医療機関・療育機関との関わりの有無、祖父母との関わりの有無)、祖父母の属性(続柄、児との交流の頻度、健康状態、児の障害の理解、育児協力、保護者との関係性、住居、住居距離)を調査した。その結果、児との交流の頻度では、母方祖母との交流が一番多く、祖父母の健康状態、児の障害の理解、育児協力、保護者との関係において、5～6割が概ねよいという結果であった。また別居で近くに住んでいる祖父母において、よく児と交流していることが窺えた。そして、祖父母の障害の理解の程度が高い群では、児の医療機関及び療育機関との関わりが有意に多かった。つまずきチェックシートの調査においては、祖父母の「交流の程

度」、「健康状態の程度」は、概ね児の行動発達の評価に正の影響を与える結果とはならず、特に学習障害に関する領域では、概ね祖父母は正の影響を与えていなかった。しかし、祖父母の「障害理解の程度」では、注意欠陥多動性障害に関する領域に良い影響が見られた。「育児協力の程度」では、学習障害に関する領域、注意欠陥多動性障害に関する領域、高機能自閉症等に関する領域に良い影響が見られ、「保護者との関係性」が高いほど、注意欠陥多動性障害に関する領域に良い影響が見られた。さらに祖父母が児から受ける影響として、祖父母と児との交流の頻度が多いほど、祖父母の健康状態は良く、育児協力をしており、保護者との関係が良かった。

研究3では、研究1で得られた【保護者への影響】(Table 2-3)、【祖父母の態度】(Table 2-4)を参考に、発達障害児の祖父母の子育ての関与や思いを明らかにすることを目的として、7名の当事者にインタビュー調査をした。その結果、【孫との交流】、【障害理解】、【育児協力】、【保護者との関係性】、【関係機関との関わり支援】の5つのカテゴリが見いだされた。【孫との交流】では、祖父母は《孫との余裕のある関わり》、《孫への客観的な視点》、《孫をかわいと思う気持ち》、《孫に好きなものをみつける手助け》、《他の子どもとの関わりの促し》をしていたことが明らかになった。【障害理解】では、《孫の障害の受け入れ》、《病院との関わり》、《療育との関わり》、《サポートブック》、《孫への対応に関する情報》が示された。【育児協力】では、《父方祖母の育児協力の姿勢》、《母方祖母の育児協力の姿勢》、《孫の世話》が示された。【保護者との関係性】では、《保護者への精神的フォロー》、《気遣い》、《家族支援》が示された。【関係機関との関わり支援】では、《病院との関わり（再掲）》、《療育との関わり（再掲）》、《保育所・学校との関わり》、《支援学級・支援学校への促し》、《保護者が相談できる場所を増やす促し》、《社会活動》が示された。研究3では、研究1、研究2で得られた結果に関連した内容が確認された。

第2節 総合的考察

発達障害は、できるだけ早期からの発達支援が、特に重要とされており、乳幼児の育児や健康の保持増進、疾病・障害の早期発見のスクリーニングを担う乳幼児健康診査では、発達障害への早期発見・早期支援が重要課題となっている。しかし、乳幼児健康診査で、障害を早期発見し支援につなげようとしても、社会資源が需要に対応できていない現状がある（二重，2013）。そのような中、本研究において、6割以上の祖父母が育児の協力をしており、祖父母の関わりが児への早期支援へとつながっていた。自閉症児の他者理解の発達には、愛着対象からの快の情動を受けることが重要であり（別府，1997）、社会的相互においては、情緒の共有が重要な役割を果たしている（Trevvarthen,C, 1980）。西谷ら（2013）は、愛着の対象は父母だけではなく、祖父母の養育行動によっても形成されることを明らかにしている。本研究において、祖父母との関わりがある児は、人との関わり、情緒、相手の気持ちを考えられる、あいさつができる等の社会性に関して、正の影響を受けていた。また、祖父母の障害の理解が高く、育児の協力をしているほど、さらに保護者との関係性が良いほど、注意欠陥多動性障害に正の影響が認められた。しかし、学習障害においては、祖父母の交流が正の影響を与えていないという結果となった。学習障害の兆候は、学童期以降に顕かになることが多く、本研究の対象児は年齢が低いため、関係性が表れにくいことが考えられる。しかしながら、発達障害児への早期支援という観点では、医療機関や療育機関における専門的な関わりとともに、個別に日常生活の中で行われる祖父母との交流は、重要な役割を担う可能性が示唆された。

現在の家族形態は核家族が多く、性役割分業体制が確立し（大日向，2005）、子育ては母親が背負うものと、暗黙の社会的共通認識を生んでいる（中谷，2008）。しかしながら、発達障害児を抱える保護者は、育てにくさや育児不安を感じており（二重，2013）、永田ら（2013）は、自閉症スペクトラム障害が疑われる2歳児の母親は、同年代の子どもをもつ母親に比べて、抑うつ陽性率が高く、育児ストレスは全般的に高いことを明らかにした。また、子どもの気になる状態を、母親の育て方の問題とみなされ、母親一人で悩みを抱え、孤立するなどの問題がある（夏堀，2001）。しかし、祖父母が母親の

精神的支えになることで、母親のストレスや孤立等の問題が緩和され、母親が精神的に安定する。そのことが、発達障害児への関わりに余裕ができ、重要な育児支援に繋がると考える。本研究においても、祖父母による保護者への精神的支援が示されていた。一方、祖父母による育児支援について「高齢社会対策大綱」(内閣府, 1996)においては、「世代間の連携強化」が謳われ、また「少子化社会対策大綱」(内閣府, 2015)においても「世代間の助け合いを図る」ことを推奨し、祖父母等による育児支援が謳われている。孫との関わりは祖父母にとっては、主観的幸福感が向上し(橋本, 2012)、生きがいを感じ(保山ら, 2011)、日々の生活の質の向上につながる(津間ら, 2012)。しかし、本研究において、孫の障害に対して理解がない場合は、孫に定型発達を期待し、祖父母だけでなく、孫やその保護者までもが苦しむことが示された。よりよい育児支援となるには、祖父母が障害の理解を深められる機会を確保する必要性がある。また、本研究より、孫との関わりで得た知識が、障害者ボランティアにつながり、新たな社会活動へと発展していったことが示された。つまり、祖父母自身の今後の展望や目的を持ちながら生活することにつながったことを意味すると考える。

尚、研究1の保育士のインタビュー調査については、日本幼少児健康教育学会誌第3号第1号に掲載された(二重ら, 2017a)。研究2の予備調査については、小児の精神と神経(日本小児精神神経学会)第57号2号に掲載された(二重ら, 2017b)。

第3節 今後の課題

本研究より、発達障害児とその祖父母が関わることによる影響が確認された。今後は、発達障害児への祖父母の関わり方を通して、祖父母の果たす役割モデルの構築を目指すべく、研究を継続していきたいと考える。

本研究の限界として、今回は、祖父母側からの視点であったため、保護者の障害理解や健康状態、育児の負担感等、保護者に関しての影響については検討できていない。さらに、発達障害児の様々な状態像に対しても言及できていない。また、本研究は横断研究であり、結果の連続性や安定性を明示することができなかった。今後は、以上のことを考慮した研究を継続していきたい。

本研究が、発達障害児とその家族に対しての支援の一助になればと考える。

引用文献

- 別府哲（1997）自閉症児の愛着行動と他者の心の理解，心理学評論，40（1），145-157
- 橋本翼（2012）高齢者の心理的、精神的健康状態における孫の及ぼす影響－孫－祖父母関係評価尺度をもちいた検討，山形保健医療研究，15，21-32
- 保山公美子、炭原加代、岩谷澄香、佐藤重恭（2011）生後1か月の孫がいる祖父母の育児支援と生きがい感の関係に関する研究．母性衛生、52（3），176
- 永田雅子、佐野さやか（2013）自閉症スペクトラム障害が疑われる2歳児の母親の精神的健康と育児ストレスの検討，小児の精神と神経，53（3），203-209
- 内閣府（1996）：高齢者社会対策大綱，
<http://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/index-t.html>（アクセス日 2012年10月18日）
- 内閣府（2015）少子化社会対策大綱～結婚、妊娠、子供、子育てに温かい社会の実現をめざして～，
http://www8.cao.go.jp/Shoushi/shousika/law/pdf/shousika_taikou2.pdf
（アクセス日 2015年8月31日）
- 中谷奈津子（2008）地域の子育て支援と母親のエンパワーメント－内発的発展の可能性－，大学教育出版，岡山，31-38
- 夏堀撰（2001）就学前期における自閉症児の母親の障害受容過程．特殊教育学研究，39（3），11-22
- 二重佐知子（2013）乳幼児健診に従事する保健師のストレス構造に関する研究，JNIThe Journal of Nursing Investigation，12（1），24-35
- 二重佐知子，津田芳見（2017a）発達障害もしくは発達につまずきのある児とその祖父母との日常的交流について－保育士のインタビュー調査より－，日本幼少児健康教育学会誌，3（1），17-25
- 二重佐知子，津田芳見（2017b）祖父母との日常的交流が保育所に通う発達障害児および発達につまずきのある児に与える影響 第1報，小児の精神と神経，57（2），137-145

- 西谷正太，木戸哲夫，高村恒人，篠原一之（2013）「家族関係の行動神経基盤」家族「愛」の神経基盤，分子精神医学，13（4），236-242
- 大日向雅美（編），莊巖舜哉（編）（2005）子育ての変遷と今日の子育ての困難．実践子育て学講座 3 子育ての環境学，大修館書店，東京，110
- Trevarthen, C. (1980) The foundations of intersubjectivity : Development of interpersonal and cooperative understanding. In D. R. Olson (Ed.), The social foundation of language and thought. Norton, New York, 316-342
- 津間文子、四宮美佐恵（2012）祖母による「孫育て」に関する文献検討，看護・保健科学研究誌，12（1），154-162

謝辞

この論文は、多くの皆さまの支えやご指導により書き上げることができました。巻末ではありますが、心よりお礼を申し上げます。

2013年4月から2年間は、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科の研究生として、本研究に取り組み、その後、2015年4月より兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程に在学し、引き続き研究に取り組んで参りました。その間、研究計画から論文作成の全プロセスにおいて、的確かつ丁寧な研究指導をしていただいた本大学院教授であった津田芳見先生に心からお礼を申し上げます。そして、田中淳一先生、有園博子先生、川上綾子先生には、多大なご指導、ご助言をいただいたこと、心よりお礼申し上げます。

研究に際して、その趣旨をご理解いただき、調査にご協力いただきました保育士の皆さまに、心より感謝申し上げます。また、貴重な時間をさき、インタビューにご協力いただきました皆さまに、心より感謝申し上げます。

つまずきチェックシート(予備調査用)

祖父母との日常的交流 有 無 ・児の年齢 歳 ・性別 男 女

領域「聞く」（チェック:0＝ない、1＝まれにある、2＝ときどきある、3＝よくある）

| | | 回答欄 | | | |
|---|----------------------------------|-----|---|---|---|
| 1 | 聞き違いがある。（「知った」を「行った」と聞き間違いをする。） | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | 聞きもらしがある。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 | 個別に言われると聞き取れるが、集団指示では難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 | 指示の理解が難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 | 友だちどうして話をする時に、話の流れについて行けないことがある。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

領域「話す」（チェック:0＝ない、1＝まれにある、2＝ときどきある、3＝よくある）

| | | 回答欄 | | | |
|---|----------------------------------|-----|---|---|---|
| 1 | 適切な速さで話すことが難しい。(たどたどしく話す。とても早口。) | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | ことばにつまることがある | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 | 単語を羅列したり、短い文で内容的に乏しい話をする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 | 思いつくままに話すなど、筋道の通った話をするのが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 | 内容をわかりやすく伝えることが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

領域「読む」（チェック:0＝ない、1＝まれにある、2＝ときどきある、3＝よくある）

| | | 回答欄 | | | |
|---|-----------------------------|-----|---|---|---|
| 1 | よく似た文字の見分けがつかない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | 絵本を見ようとしなない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 | 数字のひろい読みが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 | 同じ文字を繰り返し読んだり文字をとばして読んだりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 | 文字を読むことに興味関心がない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

領域「書く」（チェック:0＝ない、1＝まれにある、2＝ときどきある、3＝よくある）

| | | 回答欄 | | | |
|---|----------------------------|-----|---|---|---|
| 1 | 直線がまっすぐ引けない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | 丸の書き始めと終わりが離れている。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 | 自分の名前をひらがなで書こうとしない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 | なぞり書きがおおきくずれる。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 | 塗り絵でぬり残しが多かったり大きくはみ出したりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

領域「計算する」（チェック:0＝ない、1＝まれにある、2＝ときどきある、3＝よくある）

| | | 回答欄 | | | |
|---|--------------------------------|-----|---|---|---|
| 1 | グループにおやつを配る時に1つ不足していることがわからない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | さいころを使って遊べない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 | 10までの数唱ができない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 | グループの人数を確認しておやつを配ることができない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 | 数の大小がわからない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

領域「推論する」（チェック:0＝ない、1＝まれにある、2＝ときどきある、3＝よくある）

| | | 回答欄 | | | |
|---|------------------------|-----|---|---|---|
| 1 | 長さやかさの比較をすることが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | 丸やひし形などの図形の模写することが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 | ジャンケンで勝ち負けがわからない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 | しりとり遊びで次につなげることが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 | 早合点や飛躍した考えをする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

領域「不注意」（チェック:0＝ない、1＝ときどきある、2＝しばしばある、3＝非常にしばしばある）

| | | 回答欄 | | | |
|---|--------------------------------------|-----|---|---|---|
| 1 | 細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをしたりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | 課題や遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 | 面と向かって話しかけられているのに、聞いていないように見える。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 | 指示に従えなかったり、指示した事柄を最後までやり遂げられなかったりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 | 課題や活動を順序立てて行うことが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 6 | 集中して努力を続けなければならない課題を避ける。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 7 | 活動や遊びに必要な物をなくしてしまう。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 8 | 気が散りやすい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 9 | 日々の活動で忘れっぽい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

領域「多動性—衝動性」（チェック:0＝ない、1＝ときどきある、2＝しばしばある、3＝非常にしばしばある）

| | | 回答欄 | | | |
|---|--------------------------------------|-----|---|---|---|
| 1 | 手足をそわそわ動かしたり、着席していても、もじもじしたりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | 活動中や座っているべき時に席を離れてしまう。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 | きちんとしていなければならない時に、過度に走り回ったりよじ登ったりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 | 遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 | じっとしていない。または何かに駆り立てるように活動する。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 6 | 過度にしゃべる。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 7 | 質問が終わらない内に出し抜けに答えてしまう。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 8 | 順番を待つのが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 9 | 他の人がしていることをさげざったり、じゃまをしたりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

領域「対人関係やこだわり等」（チェック:0＝いいえ、1＝多少、2＝はい）

| | | 回答欄 | | |
|----|--|-----|---|---|
| 1 | 大人びている。ませている。 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | みんなから「○○博士」「○○教授」と思われている。（例：カレンダー博士） | 2 | 1 | 0 |
| 3 | 他の子どもは興味を持たないことに興味があり、「自分だけの世界」を持っている。 | 2 | 1 | 0 |
| 4 | 特定の分野の知識を蓄えているが、丸暗記であり、意味をきちんとは理解していない。 | 2 | 1 | 0 |
| 5 | 含みのある言葉や嫌みを言われてもわからず、言葉通りに受け止めてしまうことがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 6 | 会話の仕方が形式的であり、抑揚なく話したり、間合いが取れなかったりすることがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 7 | 言葉を組み合わせて、自分だけにしかわからないような造語を作る。 | 2 | 1 | 0 |
| 8 | 独特な声で話すことがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 9 | 誰かに何かを伝える目的がなくても場面に関係なく声を出す。（唇を鳴らす、咳払い、喉を鳴らす、叫ぶ） | 2 | 1 | 0 |
| 10 | とても得意なことがある一方で、極端に苦手なものがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 11 | いろいろな話をするが、その時の場面や相手の感情や立場を理解しない。 | 2 | 1 | 0 |
| 12 | 共感性が乏しい。 | 2 | 1 | 0 |
| 13 | 周りの人が困惑するようなことも、配慮しないで言ってしまう。 | 2 | 1 | 0 |
| 14 | 独特な目つきをすることがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 15 | 友達と仲良くしたいと思っても、友達関係をうまく築けない。 | 2 | 1 | 0 |
| 16 | 友達がそばにいるが、一人で遊んでいる。 | 2 | 1 | 0 |
| 17 | 仲の良い友人がいない。 | 2 | 1 | 0 |
| 18 | 常識が乏しい。（決まりきった行動が身につかない。危険なことがわからない。） | 2 | 1 | 0 |
| 19 | 球技やゲームをする時、仲間と協力することに考えが及ばない。 | 2 | 1 | 0 |
| 20 | 動作やジェスチャーが不器用で、ぎこちないことがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 21 | 意図的でなく、頭や体を動かすことがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 22 | ある行動や考えに強くこだわることによって、簡単な日常の活動ができなくなることがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 23 | 自分なりの独特な日課や手順があり、変更や変化を嫌がる。 | 2 | 1 | 0 |
| 24 | 特定の物に執着がある。 | 2 | 1 | 0 |
| 25 | 他の子どもたちからいじめられることがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 26 | 独特な表情をしていることがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 27 | 独特な姿勢をしていることがある。 | 2 | 1 | 0 |

※このチェックシートは徳島県教育委員会学校政策課が作成したものです。

ご協力を誠にありがとうございました。

つまずきチェックシート(本備調査用)

このチェックシートは、「特別な支援を必要とする子ども」の状態をチェックするものです。過去、または現在において、発達障害児もしくはその疑いがある子どもを受け持った経験がある保育士の方をお願いいたします。その子どもを思い浮かべながら、下記の項目の回答欄の番号に○を記入して下さい。子どもの年齢によっては、回答できない項目もあると考えられるので、その場合は「0」に記入して下さい。

| 領域「聞く」(チェック:0=ない、1=まれにある、2=ときどきある、3=よくある) | | | | |
|---|-----|---|---|---|
| | 回答欄 | | | |
| 1 聞き違いがある。(「知った」を「行った」と聞き間違いをする。) | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 聞きもらしがある。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 個別に言われると聞き取れるが、集団指示では難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 指示の理解が難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 友だちどうして話をする時に、話の流れについて行けないことがある。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

| 領域「話す」(チェック:0=ない、1=まれにある、2=ときどきある、3=よくある) | | | | |
|---|-----|---|---|---|
| | 回答欄 | | | |
| 1 適切な速さで話すことが難しい。(たどたどしく話す。とても早口。) | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 ことばにつまることがある | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 単語を羅列したり、短い文で内容的に乏しい話をする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 思いつくままに話すなど、筋道の通った話をするのが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 内容をわかりやすく伝えることが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

| 領域「読む」(チェック:0=ない、1=まれにある、2=ときどきある、3=よくある) | | | | |
|---|-----|---|---|---|
| | 回答欄 | | | |
| 1 よく似た文字の見分けがつかない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 絵本を見ようとしめない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 数字のひろい読みが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 同じ文字を繰り返し読んだり文字をとばして読んだりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 文字を読むことに興味関心がない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

| 領域「書く」(チェック:0=ない、1=まれにある、2=ときどきある、3=よくある) | | | | |
|---|-----|---|---|---|
| | 回答欄 | | | |
| 1 直線がまっすぐ引けない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 丸の書き始めと終わりが離れている。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 自分の名前をひらがなで書こうとしめない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 なぞり書きがおおきくずれる。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 塗り絵でぬり残しが多かったり大ききはみ出したりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

| 領域「計算する」(チェック:0=ない、1=まれにある、2=ときどきある、3=よくある) | | | | |
|---|-----|---|---|---|
| | 回答欄 | | | |
| 1 グループにおやつを配る時に1つ不足していることがわからない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 さいころを使って遊べない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 10までの数唱ができない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 グループの人数を確認しておやつを配ることができない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 数の大小がわからない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

| 領域「推論する」(チェック:0=ない、1=まれにある、2=ときどきある、3=よくある) | | | | |
|---|-----|---|---|---|
| | 回答欄 | | | |
| 1 長さやかさの比較をすることが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 丸やひし形などの図形の模写をすることが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 ジャンケンで勝ち負けがわからない。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 しりとり遊びで次につなげることが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 早合点や飛躍した考えをする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

| 領域「不注意」(チェック:0=ない、1=ときどきある、2=しばしばある、3=非常にしばしばある) | | | | |
|--|-----|---|---|---|
| | 回答欄 | | | |
| 1 細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをしたりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 課題や遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 面と向かって話しかけられているのに、聞いていないように見える。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 指示に従えなかったり、指示した事柄を最後までやり遂げられなかったりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 課題や活動を順序立てて行うことが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 6 集中して努力を続けなければならない課題を避ける。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 7 活動や遊びに必要な物をなくしてしまう。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 8 気が散りやすい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 9 日々の活動で忘れっぽい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

資料2

領域「多動性—衝動性」(チェック:0＝ない、1＝ときどきある、2＝しばしばある、3＝非常にしばしばある)

| | | 回答欄 | | | |
|---|--------------------------------------|-----|---|---|---|
| 1 | 手足をそわそわ動かしたり、着席していても、もじもじしたりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | 活動中や座っているべき時に席を離れてしまう。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 3 | きちんとしていなければならない時に、過度に走り回ったりよじ登ったりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 4 | 遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 5 | じっとしていない。または何かに駆り立てるように活動する。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 6 | 過度にしゃべる。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 7 | 質問が終わらない内に出し抜けに答えてしまう。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 8 | 順番を待つのが難しい。 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 9 | 他の人がしていることをさえぎったり、じゃまをしたりする。 | 3 | 2 | 1 | 0 |

領域「対人関係やこだわり等」(チェック:0＝いいえ、1＝多少、2＝はい)

| | | 回答欄 | | |
|----|--|-----|---|---|
| 1 | 大人びている。ませている。 | 2 | 1 | 0 |
| 2 | みんなから「〇〇博士」「〇〇教授」と思われている。(例:カレンダー博士) | 2 | 1 | 0 |
| 3 | 他の子どもは興味を持たないことに興味があり、「自分だけの世界」を持っている。 | 2 | 1 | 0 |
| 4 | 特定の分野の知識を蓄えているが、丸暗記であり、意味をきちんとは理解していない。 | 2 | 1 | 0 |
| 5 | 含みのある言葉や嫌みを言われてもわからず、言葉通りに受け止めてしまうことがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 6 | 会話の仕方が形式的であり、抑揚なく話したり、間合いが取れなかつたりすることがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 7 | 言葉を組み合わせて、自分だけにしかわからないような造語を作る。 | 2 | 1 | 0 |
| 8 | 独特な声で話すことがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 9 | 誰かに何かを伝える目的がなくとも場面に関係なく声を出す。(唇を鳴らす、咳払い、喉を鳴らす、叫ぶ) | 2 | 1 | 0 |
| 10 | とても得意なことがある一方で、極端に苦手なものがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 11 | いろいろな話をするが、その時の場面や相手の感情や立場を理解しない。 | 2 | 1 | 0 |
| 12 | 共感性が乏しい。 | 2 | 1 | 0 |
| 13 | 周りの人が困惑するようなことも、配慮しないで言うてしまう。 | 2 | 1 | 0 |
| 14 | 独特な目つきをすることがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 15 | 友達と仲良くしたいと思っても、友達関係をうまく築けない。 | 2 | 1 | 0 |
| 16 | 友達がそばにいるが、一人で遊んでいる。 | 2 | 1 | 0 |
| 17 | 仲の良い友人がいない。 | 2 | 1 | 0 |
| 18 | 常識が乏しい。(決まりきった行動が身につかない。危険なことがわからない。) | 2 | 1 | 0 |
| 19 | 球技やゲームをする時、仲間と協力することに考えが及ばない。 | 2 | 1 | 0 |
| 20 | 動作やジェスチャーが不器用で、ぎこちないことがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 21 | 意図的でなく、頭や体を動かすことがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 22 | ある行動や考えに強くこだわることによって、簡単な日常の活動ができなくなることがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 23 | 自分なりの独特な日課や手順があり、変更や変化を嫌がる。 | 2 | 1 | 0 |
| 24 | 特定の物に執着がある。 | 2 | 1 | 0 |
| 25 | 他の子どもたちからいじめられることがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 26 | 独特な表情をしていることがある。 | 2 | 1 | 0 |
| 27 | 独特な姿勢をしていることがある。 | 2 | 1 | 0 |

※このチェックシートは徳島県教育委員会学校政策課が作成したものです。

つまずきチェックシートの子どもについてお聞きいたします。

| | | |
|--------------------------|--|---|
| 年齢: | 才 | |
| 性別: | 男 | 女 |
| 医療機関の関わりの有無: | 有 | 無 |
| 療育機関の関わりの有無: | 有 | 無 |
| ★ 祖父母との交流の有無: | 有 | 無 |
| 一番よく交流している祖父母の続柄: | 父方祖父・父方祖母・母方祖父・母方祖母 | |
| 一番よく交流している祖父母との交流の頻度: | 毎日・週に1回以上・月に1回以上・年に1回以上 | |
| 一番よく交流している祖父母の健康状態: | 父方祖父 良い・普通・悪い・不明 父方祖母 良い・普通・悪い・不明 母方祖父 良い・普通・悪い・不明 母方祖母 良い・普通・悪い・不明 | |
| 一番よく交流している祖父母の子どもの障害の理解: | 良く理解している・少し理解している・あまり理解していない・理解していない・不明 | |
| 一番よく交流している祖父母の育児への協力: | よく協力している・少し協力している・あまり協力していない・協力していない・不明 | |
| 一番よく交流している祖父母と保護者の関係性: | とても良い・良い・あまり良くない・良くない・不明 | |
| 一番よく交流している祖父母との居住: | 同居 別居 | |
| 一番よく交流している祖父母(別居)との居住距離: | 歩いて行ける範囲・日帰りの範囲・泊りがけの範囲・不明 | |

記入漏れがないか再度ご確認をお願いいたします。

| | |
|---|---|
| ★ | つまずきチェックシートの子どもが、祖父母と交流が有る場合は、ピンクのアンケート用紙にご記入をお願いいたします。 祖父母と交流が無い場合は、ブルーのアンケート用紙にご記入をお願いいたします。 |
|---|---|

資料3

祖父母との交流が孫（発達障害児または疑いを含む）に与える影響に関する質問紙

下記の項目は、**祖父母と交流の有る孫**（発達障害児または疑いを含む）について、お聞きしています。各項目ごとに当てはまると思う数字を選んで○を記入して下さい。

| | | 非常に当てはまる | やや当てはまる | あまり当てはまらない | 全く当てはまらない |
|----|---|----------|---------|------------|-----------|
| 1 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)他の子どもたちから、だいたい好かれているようだ | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)他の子どもたちより、大人という方がうまくいくようだ | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)子どもの顔を見たり、笑いかけると笑顔で反応する | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)他の子どもとうまくかかわったり遊んだりしない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)見知らぬ人に接することを極端にさける | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)知っている人になりたいしても極端に恥ずかしがる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)一人でいるのが好きで、一人で遊ぶことが多い | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)仲の良い友だちが少なくとも一人はいる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)他の子ともに興味がある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)同年代の子どもと比較して友達が少ない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)友だちを作ることに関心がない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)あなたから話しかけた時、交互にやりとりが成立する意味の通った会話になる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)「あのね」「それでね」と言いながら親しげに話しかけてくることがある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)欲しいものがあったり、手伝って欲しかったりした時には、身ぶりや言葉を使って、相手の顔をきちんと見て、自分の思いを伝えることができる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)おしゃべりしすぎる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)自分が知っていることやこだわっていることに関しては、相手が知っているかどうかにかかわらず一方的に話すことがそれ以外の話は受けつけない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)同年代の子どもと同じくらいに、表情のレパートリーがある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 18 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)よその人が微笑みかけると笑顔で返す | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 19 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)嬉しい時や悲しい時でも、あまり表情を変えない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 20 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)自分が興味をもつものや楽しいことを他の人と共有しようとする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 21 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)怒られていても相手の気持ちが変わらず、ケロッと平気な顔をしている | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 22 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)他人の気持ちをよく気づかう | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 23 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)あなたが悲しんだり痛がったりしていると慰めてくれる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 24 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり、嫌な思いをしているときなど、すすんで助ける | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 25 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)他の子どもたちと、よく分け合う(おやつ・おもちゃ・鉛筆など) | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 26 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)自分からすすんでよく他人を手伝う(親・先生・子どもたちなど) | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 27 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)よく他の子とけんかしたり、いじめたりする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 28 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)ほかの人を嫌がらせることをわざとする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 29 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)ほかの人に怒りをぶつけたり仕返しをしたりする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 30 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)他のひとの感情に関心がない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 31 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)みただけで遊びやごっこ遊びをする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 32 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)同年代の子どもと、鬼ごっこやかくれんぼなど、ルールのある集団遊びができない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 33 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)遊びに介入されることを嫌がる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 34 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)人やテレビの動作のまねをしない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 35 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)いつもそわそわしたり、もじもじしている | 4 | 3 | 2 | 1 |

資料3

| | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|
| 36 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)落ち着きがなく、長い間じっとしてられない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 37 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)落ち着きがなく、手を離すとどこに行くかわからない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 38 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)座っていなければならない状況で座り続けることができない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 39 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)カッとなったり、かんしゃくをおこしたりする事がよくある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 40 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)おちこんでしずんでいたり、涙ぐんでいたりすることがよくある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 41 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)嫌なことを「やられた」と思った瞬間に、すぐに手が出てしまう | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 42 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)怒りっぽくほかのことで簡単にいらいらする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 43 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)物の貸し借りができるようになる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 44 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)自分の好きな物や興味のある物は一人で楽しんで、他の人に見せたりしない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 45 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)素直で、だいたい大人のいうことをよく聞く | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 46 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)指示が終わる前に勝手に動き出す | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 47 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)質問が終わっていないのに答えてしまう | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 48 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)話をさえぎって自分の考えを突然述べようとする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 49 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)依存的になる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 50 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)ゲームや競争で一番にならないと気がすまない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 51 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)みんなの遊びに強引に割り込み、邪魔をする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 52 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)グループ活動で順番が待ってられない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 53 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)遊びで自分が負けそうになると、ルールを勝手に変える | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 54 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)お行儀がよくなる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 55 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)おもちゃを正しい場所に片づけられない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 56 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)部屋の掃除や片づけができない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 57 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)食事の途中で席を離れる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 58 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)日中におしっこや便をもらしてしまう | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 59 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)夜寝る時間、覚醒(目を覚ます)時間が不規則である | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 60 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)あいさつができる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 61 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)指示の理解が難しい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 62 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)適切な速さで話すことが難しい(たどたどしく話す。とても早口。) | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 63 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)絵本を見ようとしない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 64 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)気が散りやすい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 65 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 66 | (祖父母と交流の有る発達障害児(疑い含む)は)いろいろな話をするが、その時の場面や相手の感情や立場を理解しない | 4 | 3 | 2 | 1 |

ご意見、ご感想があればご記入下さい。

ご記入いただいた保育士の方についてお聞きたいします。

年齢: 20代 30代 40代 50代 60代 60代以上

性別: 男 女

保育士の経験年数: 年

発達障害児に関する研修や勉強会の受講の有無: 有 無

発達障害児または疑いのある子どもを担当した年数: 年

もう一度、記入漏れがないか、ご確認下さい。
ご協力を誠にありがとうございました。

資料4

祖父母との交流が孫（発達障害児または疑いを含む）に与える影響に関する質問紙

下記の項目は、**祖父母と交流が無い孫**（発達障害児または疑いを含む）について、お聞きしています。各項目ごとに当てはまると思う数字を選んで○を記入して下さい。

| | | 非常に当てはまる | やや当てはまる | あまり当てはまらない | 全く当てはまらない |
|----|--|----------|---------|------------|-----------|
| 1 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)他の子どもたちから、だいたい好かれているようだ | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)他の子どもたちより、大人という方がうまくいくようだ | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)子どもの顔を見たり、笑いかけると笑顔で反応する | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)他の子どもとうまくかかわったり遊んだりしない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)見知らぬ人に接することを極端にさける | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)知っている人にたいしても極端に恥ずかしがる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)一人でいるのが好きで、一人で遊ぶことが多い | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)仲の良い友だちが少なくとも一人はいる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)他の子どもにも興味がある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)同年代の子どもと比較して友達が少ない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)友だちを作ることに興味が無い | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)あなたから話しかけた時、交互にやりとりが成立する意味の通った会話になる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)「あのね」「それでね」と言いながら親しげに話しかけてくることがある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)欲しいものがあつたり、手伝って欲しかったりした時には、身ぶりや言葉を使って、相手の顔をきちんと見て、自分の思いを伝えることができる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)おしゃべりしすぎる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)自分が知っていることやこだわっていることに関しては、相手が知っているかどうかにかまわず一方的に話すことがそれ以外の話は受けつけない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)同年齢の子どもと同じくらいに、表情のレパートリーがある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 18 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)よその人が微笑みかけると笑顔で返す | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 19 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)嬉しい時や悲しい時でも、あまり表情を変えない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 20 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)自分が興味をもつものや楽しいことを他の人と共有しようとする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 21 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)怒られていても相手の気持ちが分からず、ケロッと平気な顔をしている | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 22 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)他人の気持ちをよく気づかう | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 23 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)あなたが悲しんだり痛がったりしていると慰めてくれる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 24 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり、嫌な思いをしているときなど、すすんで助ける | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 25 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)他の子どもたちと、よく分け合う(おやつ・おもちゃ・鉛筆など) | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 26 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)自分からすすんでよく他人を手伝う(親・先生・子どもたちなど) | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 27 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)よく他の子とけんかしたり、いじめたりする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 28 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)ほかの人を嫌がらせることをわざとする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 29 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)ほかの人に怒りをぶつけたり仕返しをしたりする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 30 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)他のひとの感情に関心である | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 31 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)みたて遊びやごっこ遊びをする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 32 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)同年齢の子どもと、鬼ごっこやかくれんぼなど、ルールのある集団遊びができない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 33 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)遊びに介入されることを嫌がる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 34 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)人やテレビの動作のまねをしない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 35 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)いつもそわそわしたり、もじもじしている | 4 | 3 | 2 | 1 |

資料4

| | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|
| 36 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)落ち着きがなく、長い間じっとしてられない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 37 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)落ち着きがなく、手を離すとどこに行くかわからない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 38 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)座っていなければならない状況で座り続けることができない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 39 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)カッとなったり、かんしゃくをおこしたりする事がよくある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 40 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)おちこんでしずんでいたり、涙ぐんでいたりすることがよくある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 41 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)嫌なことを「やられた」と思った瞬間に、すぐに手が出てしまう | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 42 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)怒りっぽくほかのことで簡単にいらいらする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 43 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)物の貸し借りができるようになる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 44 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)自分の好きな物や興味のある物は一人で楽しんで、他の人に見せたりしない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 45 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)素直で、だいたい大人のいうことをよく聞く | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 46 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)指示が終わる前に勝手に動き出す | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 47 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)質問が終わっていないのに答えてしまう | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 48 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)話をささぎって自分の考えを突然述べようとする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 49 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)依存的になる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 50 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)ゲームや競争で一番にならないと気がすまない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 51 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)みんなの遊びに強引に割り込み、邪魔をする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 52 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)グループ活動で順番が待ってられない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 53 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)遊びで自分が負けそうになると、ルールを勝手に変える | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 54 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)お行儀がよくなる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 55 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)おもちゃを正しい場所に片づけられない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 56 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)部屋の掃除や片づけができない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 57 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)食事の途中で席を離れる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 58 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)日中におしっこや便をもらしてしまう | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 59 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)夜寝る時間、覚醒(目を覚ます)時間が不規則である | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 60 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)あいさつができる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 61 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)指示の理解が難しい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 62 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)適切な速さで話すことが難しい(たどたどしく話す。とても早口。) | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 63 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)絵本を見ようとしめない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 64 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)気が散りやすい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 65 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 66 | (祖父母と交流の無い発達障害児(疑い含む)は)いろいろな話をするが、その時の場面や相手の感情や立場を理解しない | 4 | 3 | 2 | 1 |

ご意見、ご感想があればご記入下さい。

ご記入いただいた保育士の方についてお聞きいたします。

年齢: 20代 30代 40代 50代 60代 60代以上
 性別: 男 女
 保育士の経験年数: 年
 発達障害児に関する研修や勉強会の受講の有無: 有 無
 発達障害児または疑いのある子どもを担当した年数: 年

もう一度、記入漏れがないか、ご確認下さい。
 ご協力を誠にありがとうございました。